586
103

0028298000

0028298-000

586－103

金と悪魔

徳久武治・著

修文社

昭和３

ADI

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

金瓶梅

昭和三一・二・廿六
帝國

586-103

序

多年報知新聞社にあつて經濟部長の要職を占め、東都第一流の記者として名聲高き德久武治君、頃日、予の書齋を驚かして曰く、希はくは近著「金と惡魔」のため序文を寄せよと。予の曰く、近ごろ迷惑千萬、御門違ひも甚しき依頼かな。名なきものは序で貫目をつける必要もあらん、君の文名天下に鳴ること久し。何ぞ他人の序文を要せんや。德久君曰く、そのやうな村學究的の言を爲すことを止めよ。今時の華族は今少しサ

バけて可なりと。予また曰く、書物の價値なきものは序で看板を美にするの必要もあらん。君の文、既に定評あり。何ぞ他人の序を要せんや。徳久君曰く、そのやうな野暮臭きことを言ふを止めよ。予は唯、君を愛するが故に君の序を求むるのみと。予更に重ねて曰く、よしや序文を求むるも、これを其道の大家に求むるが常なり。予の如きは社會事業の後援に聊か微力を致す以外、何等取柄のなき男なり。學識筆力すべて君に劣れることを自覺す。何ぞ序文を書くの資格あらんや。徳久君曰く、いよ〳〵出でて、いよ〳〵華族といふ奴

は融通のきかぬ分らずやなるかな。唯、君を愛するが故にといふことを解せざるやと。こゝに於てか予の曰く、よし〳〵分つた〳〵、それならば、それは此方で言ふことなり。予は君を愛するが故に、喜んで君がために序を草するものなり喝！

昭和三年初秋

男爵　有吉立生識

ヘンな序文

徳久先生に序文を書けといはれて、古人の一句借用の事。

古池や蛙とびこむ水の音。　序文。

これでも序とす。

修文社樓上にて

前　原　久　夫

序

本書の各篇は時期を異にして書いたものである。併し最初から骨組は定めて置いたから、一卷に纏めて見ても首尾脈絡は通じてゐるつもりだ。

云ふまでもなく經濟は人間生活の基調で、地を離れて人無く、經濟を別にして人間は無い。そこで經濟生活の尺度たる金の效用と威力とが認めらるゝことになるが、金は猶かの水の如きものである。俱に人間生活に必要缺くべからざるものであつて、しかも水、一度激すれば堤防を決壞し人畜を損ひ、慘禍測り知るべから

ざるものあるが如く、金力も亦、用法を謬れば風教を紊し、政治を腐敗せしめ、害毒の及ぶところ眞に寒心に堪へぬものがある。即ち或意味に於て金は惡魔だ。

本書題して『金と惡魔』といふ。黃金の伏在するところ、惡魔は跳梁す。安田・三井・三菱等の財閥の裏面史はそれである。吾等は忌憚なき筆劍を揮つて、彼等の正體を曝露し得たつもりだ。黃金の香に醉うて羽化登仙せる成金の末路も悲慘と云へば悲慘である。吾等は彼等の夢の跡をも仔細に點檢した。銀行會社の破綻、惡魔の築きし樓閣の如何に脆きものであるかも、吾等は具さに探究した。是等の事實を記述するに當り、一々的確なる數字と根基

ある史實とに則る用意を忘れなかつたのは云ふまでも無いけれど、しかも經濟記事の大衆化は筆者の多年提唱し來つたところで、此の見地の下に努めて行文の無味乾燥に墮せざるを念としたところに筆者の苦心は存する。併し此の意志が、どの程度まで酬いられたかは、讀者諸賢の嚴正なる批判を俟つの外は無い。

昭和三年初秋

著者識

金と惡魔（目次）

◇安田王國の解剖……二

安田王國の起り

（一）鑢師屋の小僧から日本一の富豪に……二

（二）惡魔主義の權化……五

惡魔主義の銀行合併

（一）徹底した高利貸根性……六

（二）銀行魔の跳梁ぶり……九

（三）毒牙にかゝつた諸銀行……一一

買潰した銀行

（一）買收された百二十餘銀行……一四

（二）安田式買收の新戰術……一七

（一）銀行の破綻を覘ふ毒蛇の姿態……一九

（二）恐るべき專横と害毒……二一

會社の買潰し

（一）安田關係の各會社……二三

（二）會社乗取りの慣用手段……二五

（三）會社乗取りに失敗した例……二六

大思惑師の安田

（一）堅實の裏に此の太つ腹……三〇

（二）株式界動搖の張本人……三二

結城豐太郎の安田入り

（一）彼が安田入りの原因……三四

(二) 因果應報！闘いは闘面……三六
(三) 猛烈なる結城開結成懲……三八
安田と政權
(一) 罪障消滅のため出費……四〇
(二) 前途恐るべき安田の政權接觸……四三
人物の缺乏
(一) 重心を失つた安田王國の改造……四五
(二) 大人物を招聘する必要なきか……四七
銀行業
(一) 全國津々浦々までの銀行網……五一
(二) 安田系銀行の種々相……五四
安田銀行
(一) 五大銀行との比較……五九
(二) 對外的信用の稀薄……六三
(三) 改善の餘地ある安田の業態……六四
滿洲の金融權侵略
(一) 滿洲に於ける銀行の勢力分布……六六
(二) 滿洲經濟界の覇王……六九
事業會社
(一) 豐富なる資金の證券化……七三
保善社
(一) 組織並に出資額及び役員……七七
(二) 保善社本來の使命……八一
安田の社員
(一) 舊社員と新社員……八四
(二) 地味で堅實で誠意あるもの……八六
安田の資産
(一) 三井三菱との比較……八七
(二) 純財産三億數千萬圓……八八
慈善事業
(一) 寄附嫌ひな善次郎翁……九〇
(二) 市政調査會へ三百萬圓……九四

◇三井王國の解剖……九六
三井の起源
(一) 三井家の祖先……九六
(二) 江戸から東京へ……九七
初代の傑物三野村利左衛門
(一) 政商として活躍臺に立つまで……一〇〇
(二) 三井銀行の創立……一〇三
幾度か危機に瀕す
(一) 内憂外患一時に起る……一〇四
(二) 三井銀行の大整理……一〇六
工業界躍進
(一) 中上川彦次郎の辣腕……一一〇
(二) 會社乗取りに成功……一一三
中上川・益田の暗闘
(一) 益田と井上との關係……一一五
(二) 二六新報の三井攻撃……一一六
物産の純益八百萬圓
(一) 早川千吉郎の手腕……一一七
(二) 日露戰爭時代の暴富……一一八
(三) 三井王國の主權者團琢磨……一二〇
◇三菱王國の解剖……一二二
彌太郎の生立
(一) 帶刀を捨てゝ前垂掛に……一二三
(二) 土佐に於ける大活躍……一二四
三菱會社の誕生

(一) 密偵を懐柔して腹心となす……一三六
(二) 腹背に敵を受けた三菱會社……一三九
海運界の實權掌握
(一) 近藤廉平を起用す……一四一
反三菱の輿論沸騰

◇成金沒落史

成金の起り
(一) 成金の語源……一四〇
(二) 成金と天下の富豪……一四三
成金出現の時期
(一) 天災地變と戰爭動亂……一四五
(二) 不景氣は景氣復活の陣痛……一四六
(三) 黃金の渴をなした大正九年……一四八
パニック……一四〇
(一) パニックとは如何なるものか……一五〇
(二) パニックを生ずる原因……一五三
(三) パニック後の不景氣時代……一五五
英米の恐慌史
(一) 太陽黑點說とパニック……一五六
(二) 英國に於けるパニックの歷史……一五八
(三) 米國の恐慌史……一六〇
日本の恐慌史
(一) 維新當時のパニック……一六四
(一) アンチ三菱を目標とした三井の陰謀……一六三
(二) 政府の命令書と田口卯吉の攻擊……一六五
彌太郎あつての三菱
(一) 大隈重信との腐れ緣……一六六
(二) 日本郵船會社創立のイキサツ……一六八

(二) 不換紙幣の整理とパニック……一六七
(三) 三井銀行の取付……一六九
最初の株成金
(一) 今村清之助と井上安次郎……一七一
(二) 天下の糸平と金穀相場會所事件……一七三
(三) 難難汝を玉にす……一七七
日清戰爭前後の成金
(一) 諸株一齊に奔騰……一七九
(二) 三國干涉と日銀金利引下げ……一八一
(三) 大小成金の旗生……一八三
雨敬と諸戸
(一) 十五銀行を敵として戰ふ……一八五
(二) 快男兒雨敬の沒落……一八七
(三) 堅實なりし諸戸清六……一九〇
甲州系の成金
(一) 若尾逸平をめぐる一群……一九一
(二) 小池國三と佐竹作太郎……一九三
日露戰役前後
(一) 慘澹たる明治三十三四年の財界破綻……一九五
(二) 日露戰役中の財界……一九七
日露戰後の成金
(一) 熱狂亂舞の大景氣……一九九
(二) 成金亂舞時代の解剖……二〇〇
成金の沒落
(一) 亂舞者の妄想裏切らる……二〇三
(二) 成金全盛から成金沒落への大轉換……二〇四
鈴久の成金振り
(一) 下劣なる品性の發揮……二〇六
(二) 槿花一朝の夢……二〇七
大小成金の沒落
(一) 聞くも悲慘な劇的シーン……二〇九
(二) 自殺した平沼と片野……二一〇
切拔けた成金

(一) 天下の大富豪と策士の小泉策太郎……二二三
(二) 松辰將軍と半田庸太郎……二二三

大正の成金

(一) 歐洲戰爭と黃金の洪水時代……二二四
(二) 戰爭終熄と空景氣の祟り……二二六
(三) 成金沒落して元の歪阿彌となる……二二八

大成金久原房之助

(一) 國際的成金の第一人者……二三一
(二) 成金沒落から大臣になるまで……二三三

鈴木と山下

(一) 臺灣銀行と無理心中を圖る……二三四
(二) 山下龜三郎の今昔……二三五

勝田と橋本

(一) 護憲の神樣へ十五萬圓の捧げ物……二三七
(二) 金の力で一黨の總務……二三八

山本と內田

(一) 虎大盡山本唯三郎……二三〇
(二) 汽車の下敷で有名な內田信也……二三一
(三) 其他の船成金……二三三

生糸成金茂木

(一) 金と時とに惠まれた幸運兒……二三四
(二) 湯水の如くに浪費した五千萬圓……二三七

砂糖成金增田

(一) ジヤバ糖の投機で一攫三千萬圓……二三八
(二) 阿部幸と第百銀行との腐れ緣……二四一

綿糸成金

(一) 吹き荒む悲風慘雨……二四三
(二) 悲慘を極めた柿沼谷藏……二四四

借金成金石井定七

(一) 借金額九千萬圓……二四四
(二) 銀行を瞞す巧妙な手段……二四七

高田釜吉

(一) 機械成金を代表した高田商會……二四九
(二) 機關銀行の破綻と高田の斷末魔……二四九

鐵成金の人々

(一) 棚から牡丹餅の鐵成金……二五一
(二) 儲けた金と吐き出した金……二五三

株成金の人々

(一) 黃金の潮と死屍累々の慘狀……二五六
(二) 敗慘の巷より逃れ得た人々……二五七

堅氣な株成金

(一) 株界から遠ざかつた大成金……二五九
(二) あはれ果敢なき南柯の一夢……二六一

プレミアム成金

(一) 會社成立とプレミアム……二六三
(二) 赤い舌をペロリと出す重役連……二六四

權利金のカラクリ

(一) 滿手で栗の珍らしい策略……二六五
(二) 狐と狸の騙しあひ……二六七

政商と政府の結託

(一) 巧妙に仕組まれた大芝居……二六八
(二) 際どい藝當を打つた幸運兒……二七〇
(三) 財界のパチルス……二七二

◇昭和成金哀話……二七四

世界的借金王鈴木

(一) 大番頭「金子直吉」の怪腕……二七四
(二) 若槻內閣を手玉に取つた震手法案……二七五
(三) 昭和新政を汚した前代未聞の大恐慌……二七六
(四) 「鈴木商店」の赤裸々なる解剖……二七八

休銀重役の沒落
（一）何のその百萬石も笹の露……二八四
（二）渡邊一家沒落の徑路……二八五
（三）金の有難味を知らぬ天罰……二八六
（四）「中井銀行」破綻の原因……二八八

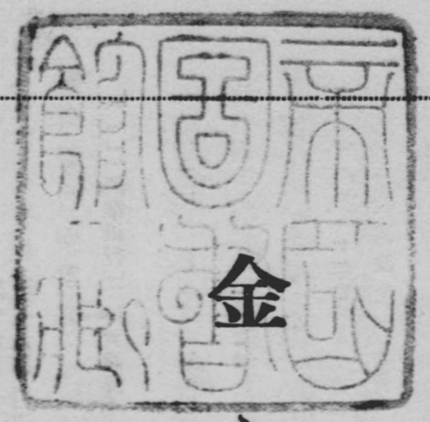
◇銀行會社發達史……二九四

明治初期の事業界
（一）事業界發展の時代別……二九四
（二）銀行會社の濫觴……二九六
（三）官營から民營に……二九八
日清戰爭前後
（一）戰前の事業界……三〇一
（二）泡沫會社の濫興……三〇三
（三）日銀正貨の激減……三〇五
（四）明治三十四年の大恐慌……三〇七
（五）「八十四」「中澤」兩銀行の內幕……二八九
（六）「左右田」と「村井」の內情……二九〇
（七）公爵「松方巖」一門の凋落……二九一
（八）公爵夫人から襁褓掛けの世話女房……二九二
日露戰爭前後
（一）戰前並に戰時中の財界……三一〇
（二）戰後の熱狂時代……三一三
（三）熱狂後の悲哀……三一五
歐洲大戰前後
（一）經濟力の完成……三一七
（二）海運界の黃金時代……三一九
（三）波濤重疊の製鐵業……三二四
（四）有卦に入つた造船界……三二七
（五）銀行の發達趨勢……三二九

◇銀行の破綻整理史……三三三

銀行破綻の原因
（一）我國獨得の頻繁なる取付騷ぎ……三三三
（二）銀行本來の職能……三三四
（三）銀行破綻の原因……三三五
（四）破綻防止の方策……三四一
（五）破綻銀行の開祖……三四四
銀行界の混亂時代
（一）銀行界混亂の動機……三四八
（二）九州が銀行破綻の火元……三五〇
（三）銀行破綻の防止運動……三五三
（四）混亂の渦卷く大阪地方……三五四
（五）七十九銀行の破綻……三五五
（六）銀行重役以下の珠數繫ぎ……三五七
（七）難波銀行の休業……三六〇
（八）海老鯛式で釣られた預金者……三六一
（九）大阪全市の大混亂……三六三
（十）混沌たる再度の破綻騷ぎ……三六六
（十一）大混亂に陷つた京都市……三六八
（十二）破綻の悲劇を演出した諸地方……三七一
日露戰爭後の破綻
（一）「百三十銀行」の破綻……三七五
（二）銀行界再度の混亂狀態……三七七
（三）「北濱銀行」の破綻……三八二
歐洲大戰後の破綻
（一）「岩田銀行」の取付……三八四
（二）「七十四銀行」の閉店……三八六
（三）續出した其他の破綻銀行……三八八
第二次の破綻時代
（一）大問題となつた「石井定七」事件……三九一
（二）投機で破綻した「日本積善銀行」……三九五
（三）「報德」「京和」其他の破綻……三九八

(四)大震災と銀行界……四〇〇
(五)「關東銀行」の破綻騷ぎ……四〇二
(六)破綻銀行一覽表……四〇四
(七)「敎育銀行」の破綻……四一〇
(八)「龍口銀行」の破綻……四一三
特殊銀行の整理
(一)「興業銀行」の現實曝露……四一五
◇會社破綻史……四三三
關西貿易會社
(一)平均一ヶ年資本六億圓の破綻……四三三
(二)一波萬波を捲き起す……四三四
日糖事件
(一)會社罪惡史中の首魁……四三六
(二)「礒村」「秋山」等の惡辣手段……四三七
(三)社長「酒匂常明」のピストル自殺……四三九
波佐見金山事件
(一)重金主義の餘弊……四四一
(二)山師に瞞された「政府」と「興銀」……四四二
國際汽船の整理
(一)盜人猛々しい創立の趣旨……四四三
(二)亂脈を極めた「朝鮮銀行」……四四七
(三)情實の犧牲となつた「臺灣銀行」……四四三
昭和初頭の大恐慌
(一)第一期パニック……四三三
(二)第二期パニック……四三六
(三)第三期パニック……四三七



金と惡魔

德久武治著

安田王國の解剖

安田王國の起り

一　鰹節屋の小僧から日本一の富豪に

安田王國の起りを今更詮議立でもあるまいが、安田傳來の素情を知らうとするには、どうしても其の創世記から始めなければならぬ。

先代「善次郎翁」が遙々越中の片田舎から上つて來たのは安政何年かの十七歳の時であつた。下谷御徒町の鰹節店の小僧となり、此間何年かを經過して十五兩の金を蓄め、自から乾物店を開いた。其の間粒々辛苦、又何年かを經過して、元治元年に日本橋小舟町の荒布橋畔に金貸業を創めた。これから金が金を生み、遂に今日のやうに『安田銀行』だけでも一億五千萬圓からの大資本を生み出したのである。

勿論これまでにするには、「善次郎翁」の苦心も並大抵では無かつた。彼は金を貯めることを知つ

て、使ふと云ふことを知らなかつた。たゞ其日も其日も、金庫の中に金が流れ込むのを見て畢生の愉悦と感じてゐた。金庫の中に入つて來る一つ一つの金は、それこそ接吻せんばかりの愛着の心を持つて之を迎へた。それであるから、此金が金庫から出ても、再び子を生んで、殖えて入つて來る目的が無い限り、如何なる場合に於ても之を金庫の外に出すことを好まなかつた。

明治四十三年、明治天皇が御內帑金百五十萬圓を御下賜になつたので、これを基本として『恩賜財團濟生會』なるものが起された。時の首相「桂太郎氏」は民間富豪に對しても之が寄附を勸め、特に「大倉」「古河」「鴻池」「森村」「安田」といつたやうな大富豪に對しては、此際十ケ年賦か一時金で百萬圓寄附するならば或は男爵を授けらるゝであらうといつた。「大倉」「古河」「鴻池」「森村」なんぞの連中は、勿論平民が一躍華族になることも嬉しいことには相違なかつたが、何といつても畏くも明治天皇が濟民の思召で率先して御內帑金を御下賜になる程であるから、吾々富豪も默つては居れぬ、仰せの通りの百萬圓を寄附しませうといふので、何れも氣前よく金庫の扉を開けたのであるが、獨り「安田善次郎」だけは、

「私は華族なんぞに成りたくはありません。今百萬圓寄附すれば華族になりたい爲めに寄附した

やうだから、お斷りします」

と此の百萬圓を斷つたのであつた。勿論此の場合、華族になりたい一存で寄附するのは餘り賞めたことでは無いが、さりとて華族に成りたくないといふことを理由として、百萬圓の寄附を斷つたといふことは、更に善くないこと〻言はなければならぬ。百萬圓といふ大金を出したくないから、華族になるのが嫌だといふ理由をつけて、態よく斷つたのだと言はれても致方あるまい。即ち華族になるよりも百萬圓の金が惜しいからとも見られるのである。しかして「善次郎翁」の場合、金といふものに對して無限の愛惜を感じ、地位も、名譽も、金に較ぶれば屁でも無いと思ふ者には、恐らく百萬圓が惜しかつた爲めに華族になるのを嫌つたのであらう。寄附行爲は利殖を伴はないために、金庫の扉を開くことをしなかつたのであらう、と言はれても殆ど辯解の辭は無いであらう。大抵の人間は或程度の富豪になれば、華族になりたいとか、何々名譽職になりたいとか、いつたやうな慾望を起すものだが、「善次郎翁」に限つて、金を一錢でも多く持つといふより外に慾望は無かつたものらしい。實に變つた人間であつた。

二　悪魔主義の權化

「大倉喜八郎翁」は「善次郎翁」と殆ど同じ經歴を持つ人である。二十歳前に同じ北國から上京し、同じく乾物屋の小僧となり、乾物屋の主人となり、それから一方は銃砲店を開き、一方は金貸となつて、遂に何れも天下の大富豪となつたのであるが、しかも中途で一方は金貸となり、一方は銃砲店の主人となつた如く、二人の性格には相當の距離があつた。誰か〻二人の性格を比較して、こんなことを言つてゐた。それは此の兩人はそれ〴〵毎年各支店長を集め、前年度の營業報告を聞くに當り、「善次郎翁」は支店收益の多寡を聞き、元金と收益とを仔細に計算して、其の收益多ければ賞し、少ければ戒めるといつたやうな有樣であるに對し、「喜八郎翁」は其の收益の多寡は敢て問題でなく、たゞ收益すべき機會を善く捉へて利益を擧げた者を賞し、若し其の機會を善く捉へ得なかつたものに對して之を戒めてゐた。即ち此の兩者を比較すれば、「善次郎翁」は單に利益さへ擧げれば其の手段方法は問題では無く、一方「喜八郎翁」は、商は機である、商人たる者は如何なる場合に於ても、此機を逸してはならない、機を逸するといふこと職務に忠實で無いからだといふのである。

以て兩者の性格の相違を知るべく、志を得て一は金貸となり、一は銃砲店となるだけの相違が玆に有るわけである。そして「善次郎翁」の此の精神が、翁の晩年は愚翁の死後、苟も安田王國の存續する限り傳はつてゐるのである。

惡魔主義の銀行合併

一　徹底したる高利貸根性

「安田善次郎翁」は生れながらにして涙といふものを忘れて來た人であつた。彼に若し一點の涙があつたならば、恐らく今日の『安田』は實現して居なかつたであらう。由來金貸に涙を求めるのは、女郎の誠を探して歩くやうなものだと言はれ、天下の皮肉家クリストは、富める者の天國に入るは恰も針の穴に駱駝を通すことよりも困難だと云つてゐる程だから、鰹節屋の丁稚から巨億の富を蓄積した「善次郎翁」に、涙といふものが勿論あり得べきものでは無かつた。

彼の生命――彼の畢生の事業は、其の手段と方法とは問はない。たゞ一厘は一厘から、より多く

蓄積することであり、增殖することであつた。彼は金を貸す場合に、元金が其のまゝ回收さるゝものとは如何しても思つて居なかつた。金を貸す者と借りる者とは、本來仇敵同士だと思つてゐた。たまゝ〳〵相互の必要若くは目的からして、金を貸しもすれば借りるものだと思つてゐた。殊に金といふものは借りる時の地藏顏に返す時の閻魔顏といふことは、動かす事の出來ない眞理であると思つてゐた。それであるから彼は金を貸す時は、始めから元金が其のまゝ利を生んで回收されるとは思つて居なかつた。借りる程の者に期間までに元金がそつくり調達されよう筈が無く、どうせ最後は抵當を引上げるより外にないと思つて居た。即ち彼は金を貸す時から既に抵當物を目的として貸して居た。人に對する信用なんて藥にしたくも持合せて居なかつた。それで或抵當物が欲しいと思へば、どんな男にでも金を貸すことを辭せなかつたのみならず、あらゆる機會を利用し、あらゆる手段方法を講じても、其の欲しい物件を擔保に融通することを忘れなかつた。であるから利子の高いことや、利子が高いために融通先で事業の採算が出來るか如何かと言つたやうなことは一切眼中に無かつた。利子は出來るだけ高く取つた。そして其の會社なり銀行なりが出來得る限り早く窮迫して來て、抵當流れになるか、或は懷に轉げ込むのを待つてゐた。甚だしきは若し其の會社なり

銀行なりが、急に轉げ込みさうもない時には、其の裏面に廻つて色々の手段を講じたとさへ傳へられるものがあつた。眞逆いくら因業なものでも、そんな殘酷なことはしないだらうが、兎に角「善次郎翁」は利殖といふことに對しては、意想外の考へを持つて居たばかりで無く、事實そんな手段をやりかねまじき人間であつたことは事實である。

それは日露戰爭中であつた。國民は血と肉の全部を捧げて皇國のために戰つてゐる時であつた。戰既に中を過ぎて內債は勿論外債に次ぐに外債を以てするも軍資金は時に涸渴せんとし、若し中途にして軍資金涸渴し糧道絶えなば、これまでの惡戰苦鬪、折角捷ち得た戰功が水泡に歸するは勿論、滿洲の野にある百萬の生靈の生死さへも氣遣はれたので、政府當局は必死となつて軍資金調達に努力し、そして「善次郎翁」に對し、七重の膝を八重に折つて哀訴嘆願したのであつた。然るに之に對し、

「高利でも宜しければ調達しよう、國家危急存亡の秋に當り多大の危險を冒して貸出す以上は、これに對して相當の報償を受くるのは當然である」

といふのであつた。彼は國家が危急存亡の秋でも高利貸根性だけは忘れなかつた。戰爭はお前等が

勝手にして居るのだ、俺は金を貸す以上、殊にそんな危險な仕事に費消する金は、それ相當の高利で無ければ御免を蒙るといふのであつた。何と徹底した金貸根性では無いか。彼の此の態度を見、且つ聞いた時には、國民の誰として憤慨しなかつた者は無く、彼を目して國賊！ とさへ叫んだ者があつた。蓋し當然の叫びであつたかも知れぬ。

二 銀行魔の跳梁ぶり

これも矢張り同じ日露戰爭當時の事であつた。それは或は讀者の記憶にも猶ほ新なるものであらうが、——當時大阪に本店を有する關西一の大銀行たる彼の『百三十銀行』の取付騷ぎの時であつた。この銀行の頭取「松本重太郎」は、關西銀行界の大立物で、當時後年に於ける「小山健三」の如き勢力を持つて居た。彼は『百三十銀行』の頭取たると共に、一方には『松本商店』なる事業會社を經營し、いはゆる銀行と事業とを兼營してゐた。『百三十銀行』といふのは資本金三百二十五萬圓、積立金五十萬圓、預金一千百四十五萬圓（明治三十六年下半期）で、今から見れば大した銀行でも無いが、其頃では勿論一流銀行であつた。それが明治三十七年六月十七日に突如として休業を發表した。

原因は銀行家の事業兼營が如實に現れたもので、『松本商店』の事業資金、若くは缺損補塡資金として預金を濫用したのである。それは恰も『高田商會』が『永樂銀行』の預金を遣ひ果したのと同一である。即ち『松本商店』を通じて關西諸會社への貸出と、『百三十銀行』を機關銀行としてゐる『日本紡績會社』の破綻が主なるものであつた。

然るに時は日露戰爭の眞最中、いはゆる皇國の興廢が岐るゝ時であつた。金は有る上にも無からねばならぬ時であつて、殊りに英米に向つて外債を賴んでゐた。それで若し此の『百三十銀行』から內地財界の破綻を傳へらるゝに於ては、外債成立に大影響を及ぼす譯である。即ち事は一銀行の破綻騷ぎでは無く、國家の運命に關する一大危機にあつたのである。それで時の首相「桂太郎」及び大藏大臣「曾禰荒助」は、辭を低うして之が救濟を安田に乞うたのであつた。然るに此時彼は損をすると言つて容易に肯んぜず、そこで「桂首相」は止むを得ず、明治天皇の聖旨まで傳へて彼の盡力を懇望したところ、彼は漸く承諾し、其の代り六百萬圓の救濟資金を十ケ年據置で融通せられたいと要求した。讀者諸君！　我國は當時國を擧げて戰つてゐる時である。しかも軍資金は日に窮乏し、幼となく老となく持てるものは一錢の金でも皇國のために醵金してゐた時であつた。然るに彼「善

次郎」は、銀行救濟の名の下に六百萬圓からの大金を十ケ年据置に借入れるとは、以て彼の性格の一般を知ることが出來るではないか。しかして斯の如くして救濟した其の『百三十銀行』は、其後再び關西に於ける有力なる銀行となり、大正十一年十二月、十二行の銀行を合併して『大安田銀行』を創立した時、此の『百三十銀行』も、其中の有力なる銀行として合併せられ、『大安田銀行』の大をなしたのであつた。そして今や『安田銀行』は天下の大銀行だと威張つて居るのである。

此外、銀行買潰しの數々を誣じ立つれば、それは宛然たる銀行魔の跳梁である。腐屍を漁つて舐る者とは恐らく彼の事を言つたのかも知れぬ。安田の惡魔主義銀行買潰しの一端を紹介することゝする。

三　毒牙にかゝつた諸銀行

それは『大垣共立銀行』の買潰しである。此の『大垣銀行』といふのは大した銀行では無いが、兎に角、明治十一年に彼の國立銀行條令で設立せられた『第百二十九國立銀行』を繼承して、二十九年に『大垣共立』と改稱したのであつた。それが明治三十七年に取付を喰ひ、其の當時取引關係のあつ

た『第三銀行』から救助を受けて、やつと營業を開始したが、それからといふものは營業面白からざる狀態にあつたところ、たま〳〵四十二年に取締役支店長某が十五萬圓からの行金を費消した事が曝露した。玆に於て愈々いけなくなり、四苦八苦の態であつたのを睨んだ安田は、二十五圓拂込の株式三千株を、それこそ二束三文に買つて甘々と一つの銀行を乘り取つたのであつた。其後『美濃實業』や、『眞利銀行』『五十六銀行』『養老銀行』及び『農産銀行』等を之と殆ど同じやうな方法で買潰して之に合併せしめ、今では資本金三百萬圓、支店所在數二十三ケ所、預金二千二百五十萬圓といふ立派な銀行となつてゐるが、其昔安田が始めて投じた資本は一萬圓足らずであつた、これぢや金持にならざるを得ないではないか。

次は『安田貯蓄銀行』である。これの前身は『金上貯蓄銀行』といつて、加賀の金澤にあつた銀行であつた。それが大正九年に營業不振で安田に身賣りして『安田貯蓄』となり、それから『八王子貯蓄』が同じく破綻して二束三文に叩かれ、次いで『中加貯蓄』『小石川貯藏』『横濱中央』『神奈川貯蓄』『淺野晝夜貯蓄』及び『福岡貯蓄』といつたやうなのが、例の惡魔主義の毒牙にかゝつて何れも合併せられたのであるが、中にも『淺野晝夜貯蓄』の如きは慘めなものであり且つ安田の冷酷振りが

一層深刻なのを知ることが出來る。それは『淺野晝夜』が合併せられたのは、大正十一年であつた。元來「善次郎翁」と「淺野總一郎」とは親友の間柄で、「淺野」は事業家で金を使ふ方であり、「善次郎」は銀行屋で、金を貸す方であつて、「善次郎翁」は「淺野」の手を通じて事業を行つて居た。即ち事業からの利益は「淺野」と「善次郎翁」とで分配して居たが、事業の危險は「淺野」一人で負擔して居た。これは「善次郎翁」としては當然の事であつて、自分で事業の危險を負擔するやうなことは絶對にしないのである。

然るに彼の大正九年の大恐慌は、大も小も事業といふ事業は齊しく瀕死に陷つた。勿論「淺野」も四苦八苦の態であつた。然るに「善次郎翁」の「淺野」に對する要求は好景氣時代と變らないばかりで無く、更に投資元金の償却をも要求して來た。「淺野」はそれどころでは無いので、日頃の親友ではあり、事情を打明けたが、勿論「善次郎翁」は金錢の前には友情など有り得よう筈は無かつた。そして融通した金の抵當に『淺野晝夜』と『淺野晝夜貯蓄』の兩行を引奪つてしまつた。安田の惡魔主義銀行合併方法は概ね斯の如しである。

買潰した銀行

一　買收された百二十餘銀行

斯の如き惡魔主義の下に一行また一行と合併して、大正十一年十二月に安田傘下の銀行の大合同をなして、今日の大銀行を作つた時には、直系銀行數二十二行、支店及び出張所總計三百五十九ケ所に達して居たが、しかも是等二十二行の銀行は、それまでに三行乃至五六行の銀行を合併して來たものであるから、是等以前の銀行に還元すると實に百二三十行の銀行を合併したものである。

而して大正十一年に合併して『大安田銀行』となした銀行數は十一行であつて、それは『安田』『第三』『百三十』『二十二』『肥後』『日本商業』『根室』『信濃』『明治商業』『神奈川』『京都』の各銀行で、此の總公稱資本金一億三千萬圓、拂込八千七百七十五萬圓と、これに新に『保善銀行』なる資本金二千萬圓、拂込五百萬圓を起し、前記十一行を合併して『安田銀行』となつたのである。

斯くて現在の安田王國の銀行數は資本金一億五千萬圓の『安田銀行』を始め、本店十三行、支店及

び出張所三百七十七ケ所、資本金總額二億二千五百三十三萬五千圓、預金部總額九億二千二百六十萬八千圓（大正十四年度上半期末）といふが如き元大なる業態を有するやうになつたのである。

然るに現在十三行の銀行の中『安田』が元から自分で創立した銀行といふのは一行も無く、たゞ大正十一年の合併前二十二行の中には『安田銀行』と『第三銀行』との二行があるのみで、他は悉く合併し買收したものである。即ち其の關係年月を示せば左の如くである。

（名稱）	（本店）	（創立時）	（關係年月）	（持株）
「安田銀行」	東京	明治十三年	同時	（合併）
「第三銀行」	東京	明治九年	同時	（合併）
「明治商業」	東京	明治二十九年	同時	（合併）
「安田貯蓄」	東京	明治二十九年	同時	九九、四〇〇
「日本畫夜」	東京	明治十七年	大正十一年	（合併）
「帝國商業」	東京	明治二十七年	大正十二年	三二、二三〇
「肥後銀行」	熊本	明治十年	明治三十六年	（合併）

「京都銀行」	京都	明治二十七年	明治三十四年	（合併）
「日本商業」	神戸	明治二十八年	同時	三五、一二九
「百三十銀行」	大阪	明治三十一年	明治三十七年	（合併）
「二十二銀行」	岡山	明治十年	明治三十四年	（合併）
「十七銀行」	福岡	明治十一年	明治三十六年	—
「第九十八銀行」	千葉	明治十五年	明治十五年	五、二七五
「根室銀行」	北海道	明治三十一年	同時	（合併）
「高知銀行」	高知	明治三十年	明治四十年	（合併）
「信濃銀行」	長野	明治二十二年	明治四十二年	（合併）
「大垣共立」	大垣	明治二十九年	明治四十三年	六、八〇〇
「正隆銀行」	大連	明治四十一年	明治四十四年	（不明）
「第三十六銀行」	八王子	明治十年	大正六年	八、四〇〇
「關西銀行」	德島	明治十年	大正十年	三〇、九三〇
「栃木伊藤」	栃木	明治二十七年	大正十年	五〇、〇〇〇

このうち合併とあるのは現在の『安田銀行』に合併せられたもので、他は未だ合併はして居ないが實權は全然安田にあることは勿論であつて、明治十五年千葉の『第九十八銀行』を合併したのを切掛として、殆ど全國に亙り金融機關を掌握して居るのである。此外に例の『龍口銀行』をも合併した。

これは「結城豐太郎」入社後のいはゆる「新安田」が買收の切掛であつて、しかも此の買收法は安田從來の戰法に新例を開いたものだと「結城」が龍口整理委員に自慢したものである。

二　安田式買收の新戰術

『龍口銀行』といふのは、安田直系の『正隆銀行』と共に滿洲に於ける大銀行の一つであつた。本店は大連にあり、資本金一千五百四十萬圓、預金一千五百萬圓を有し、『朝鮮銀行』を殺銀行とするものであつた。然るに大正十三年八月十五日突如取付に遇ひ、翌十六日から向ふ一週間休業の旨を發表したが、同行は彼の戰後の好況時代に於て、巨額の事業資金を貸出し、それに有價證券・土地建物等の擔保物件の値下りの上に、更に植民地には銀行喰ひ荒しが横行して居り、これに祟られた額

も相當大きく、遂に閉店前日に滿鐵の預金引出によつて、百萬圓からの交換尻が拭へなかつたのが端をなし、斯くて大連財界は殺氣立ち、大混亂狀態と化したのであつた。そして此の騷ぎは『滿洲銀行』にも飛火し、また銀行以外の『錢鈔取引所』『特產物取引所』竝に『五品取引所』にも波及したのであつた。こゝに於てか、お定まりの整理問題となつたが、さて『大連民政署』や『滿鐵』『正金』『鮮銀』等の頭株が寄り集つて協議しても、問題は結局金が先に口をきくのであるから容易に目鼻が附きさうになく、果は『龍銀』解散說までも傳へられるやうになつた。

かうなるとノロ〳〵と毒蛇のやうに姿を現はすのは例によつて『安田』である。そして二束三文のやうな値で、滿洲の大銀行たる『龍口銀行』を我物にしようといふのであつた。そればかりでなく、其の買潰し資金の如き、今度は政府に膽煎をさせて『日本銀行』から五百萬圓から融通せしめたのであつた。そして『龍口』の債權者たる『東拓』や、『正金』『鮮銀』には利子を二分に負けさせて、其上十ケ年据置といふ虫のよい注文をし、また『滿鐵』に對しては利子二分に引下げて十ケ年据置とした上に、更にこれから五百萬圓の預金をして貰ひたいといふのである。それも自分でも相當に犧牲を拂つて居るならば未だしも、銀行破綻・滿洲財界打擊といふ弱身に附け込み、これが救濟の美名の

下に自分の腹は少しも傷めず、うま〳〵と大銀行をせしめようといふのである。蓋し是れ『百三十銀行』買潰しの故智に倣つたものであるが、『日銀』口說き落しに成功したからか知らぬが、「紅城」は之を「安田式買收法の新例」だと威張つてゐる。

金の力

一 銀行の破綻を覘ふ毒蛇の姿態

『安田』は今日まで百二三十の銀行を買潰して合併したが、恐らく其の一行だつて完全な業態の銀行を合併したものは無いであらう。何れも破綻し休業したものか、若くは今にも破綻しさうで到底手の附けようが無いのを、二束三文に買潰すといふのが常套手段であつた。そして其の二束三文で買潰した銀行が、不思議に『安田』の手にかゝると、何れも恰も瀕死の病人が名醫にかゝると全快して、病氣前よりは健全な身體になるやうに、何れも健全な、そして有力な銀行となることであつた。これは「善次郎翁」が爪に火を點すやうにして蓄積した金の力であつて、『安田』の沒義道な遣口

には誰しも齒することを快しとしないのであるが、さて金といふ段になると、どんな冷酷な高利貸にでも信用せざるを得なくなるのと同一である。

斯くて『安田』は今日に於ても虎視耽々といふか、或は毒蛇がとぐろを卷いてゐるといふか、兎に角、常に何處かに破綻しさうな銀行は無いかと覘つてゐる。そして若し或銀行の業態が怪しい、或は愈々破綻しさうだとなると、例の惡魔のやうな笑を洩らして、これに少しばかり金を貸付けて兎も角も關係をつけて置く、そして何時の間にか呑んでしまふのである。

元來、銀行の集中主義といふことは善いことである。殊に我國の如く今日全國の銀行數が千八百餘行もあるといふことは、決して銀行の健全なる發達を期し得るものではなく、預金の爭奪や、不健全なる貸付等も、其の主なる原因は銀行が餘り多過ぎるといふことより來てゐるので、其の爲めに昭和二年三月の銀行取付騷ぎも起つたわけであるから、是等の銀行を出來得る限り合併して、其の數を減少せしむるといふことは喜ぶべきこと丶言はなければならぬ。此の意味に於て、『安田』の不健全なる銀行合併は歡迎すべきことであるが、たゞこれが『安田』の場合に限り、果して喜んで善いのか如何か一寸考へさせられるのである。それは『安田』が此の調子で以て銀行を買潰し、且つ合併して行つて、名實共に金融上の有力なる實權を有するが如きことある場合に於ては、其の專横と害毒とは寧ろ恐るべきものが有ると言はなければならぬ。

二　恐るべき專横と害毒

英國内に於ける銀行は、『ロイド銀行』『ウエストミンスター銀行』等、五六の大銀行に過ぎない程に大合同が行はれ、金融の覇權は是等小數の銀行家に握られてゐるのであるが、しかも彼等は最もよくカルチュアーされ、是等銀行の實權者は英國式紳士のタイプとされてゐる稍の人々であるから、苟も彼等が有する金融上の覇權を惡用して、專横を極むるが如きことは無いのであつて、斯の如き紳士によつて紳士的に其の銀行の營業を續けらるゝに於ては、銀行の合同・金融權の集中といふことは何等憂ふべきことでは無いが、しかもカルチュアーされてゐない我國の銀行業者の如く、就中、昔の高利貸そのまゝの根性を繼承してゐる『安田』をして、今後ます〳〵銀行の合併を行はしめ、惹いて金融上の有力なる實權を握らしむることは、一般に甚しく不安の念を抱かしむるものと言はなければならぬ。

會社の買潰し

一 安田關係の各會社

殊に最近の『安田』は其の得意とする銀行業のみならず、會社の經營に對しても相當手を伸ばし、しかも是等の會社を殆ど銀行と同じ方法を以て買潰して居るのである、卽ち二十近くの會社の中、『安田』が自から創立したものは『安田商事』『共濟生命』『東京建物』『帝國海上』『東洋再保險』の五社に過ぎず、他は悉く安田式戰法で買潰したものであつた。今『安田』關係の各會社を示せば左の如くである。

◇保險會社

(商號)	(資本金)	(拂込資本金)	(出資割合)	(關係年月)	
「共濟生命」	三〇〇千円	七五千円	一〇〇%	創立	
「東京火災」	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	三〇	明治二十五年	
「帝國海上」	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	三〇	創立	
「東洋再保險」	五、〇〇〇	一、二五〇	二五	創立	

◇事業會社

「京濱電鐵」	一五、〇〇〇	一〇、〇四五	二〇	明治四十二年	
「中國鐵道」	四、三〇〇	四、三〇〇	二〇	——	
「小湊鐵道」	一、五〇〇	一、四五五	七五	大正九年	
「水戸鐵道」	五〇〇	五〇〇	一〇〇	大正九年	
「東京建物」	一〇、〇〇〇	六、二五〇	二五	創立	
「滿洲興業」	五、〇〇〇	二、五〇〇	二〇	大正六年	
「興亞起業」	一〇、〇〇〇	四、九九五	七五	創立	
「東京電力」	四二、二五〇	二八、〇〇〇	五〇	大正八年	
「安田商事」	二〇、〇〇〇	五、八四三	一〇〇	創立	
「日本紙器」	一五、〇〇〇	七、五〇〇	五〇	大正十年	

「帝國製麻」	三一、七五〇	一八、八五〇	二五　明治四十年
「奉天製麻」	一、五〇〇	七五〇	二二　大正八年
「臺灣製麻」	二、〇〇〇	一、〇〇〇	二〇　――

此外に『秋田電氣』『秋田瓦斯』『熊本電氣』『東京灣埋立』『中央開墾』『横莊鐵道』『博多灣鐵道』及び『越後鐵道』等も『安田』と密接なる關係はあるが、『安田』の直系會社とは言はれないから、是等は『安田』關係から除外すべきものである。而して『安田』關係會社は前表によつて見る如く、其の大部分は買收したものであつて、このうち所謂安田式戰法で買潰した會社の中の主なるものでは、先づ『帝國製麻』である。此の『帝國製麻』といふのは、元々『下野紡織』『下野製麻』『近江麻糸紡織』及び大阪の『日本織糸』が四社併立の關係上、互に販路の爭奪をなすために盛んに投賣を行はねばならず、これがために此の四社は殆ど共倒れの姿であつた。此の間隙に乘じたのは例によつて「善次郎翁」であつた、先づ是等四社の自由競爭を防遏するために、日本橋に共同販賣所を設くることゝなつた。そして其の資金として『安田銀行』から百萬圓を融通することになつたのであるが、かうなれば此の四つの麻糸會社の勢力は當然『安田』の掌握するところとなつた譯であつて

是等四社は始めから自由競爭で立てなくなつて居たので、此の悲境から免るゝために『安田』の提議に百萬圓の資金といふ餌に釣られて、どのみち四社とも其の生命を無くして合併し『帝國製麻』となつたのである。そして其の實權は百萬圓を借りたばつかりに、殆ど『安田』に移つてしまつたのであつた。今日『帝國製麻』といへば、『日本製麻』と對抗して我國に於ける二大製麻會社の一となつてゐるが、斯の如き大會社を僅々百萬圓の餌で、其の掌中に收めたのであつた。

二　會社乘取りの慣用手段

次は『京濱電氣鐵道』である。此の『京濱電鐵』は「立川勇次郎」の『太子電氣』が其の始まりで、其後事業を擴張して『京濱電氣鐵道』となつたが、お定まりの如く事業の急激な擴張は資金難に陷り、そして其の資金として『安田』から百五十萬圓を借入れたのであつた、しかも其の條件として、『安田』を代表せしめて「櫻井梅太郎」なるものを入社せしめて取締役とならしめ、こゝに『京濱』乘取の第一期は完成したわけである。其後明治四十四年擔保付社債二百八十萬圓を發行する時、これも『安田』が全部引受くることゝなり、其の代り眷族の一人たる「安田善兵衛」が入つて重役となり、斯

くて名實共に『京濱電氣鐵道』は『安田』のものとなつたのである。

それから同じ鐵道會社では、『小淺鐵道』も其の創立當時から資金難に陷り、加ふるに歐洲戰爭が勃發した當時であつたから、建築材料は騰貴し、鐵材は米國の鐵輸出制限等のために益々窮境に陷り、或は中途にして挫折しようとしたのを、例によつて『安田』が百五十萬圓を貸付けて乘取つたのであつた。

次は例の『日本紙器會社』である。『安田』は彼の『三井』『三菱』若くは『高田』『大倉』等の如く政黨もしくは政府との關係は比較的少く、今日の大は殆ど其の獨自の力を以て爲したと言つても善いのであつて、此點は他の富豪に比し大いに誇るべきものありといふべく、しかし、また一方から見れば「善次郎翁」の病的尊金主義は、彼等政府者や政黨者に對して金をバラ撒くことが惜しくて爲ようがないので、隨つて政府にも政黨にも餘り關係が無かつたと言はれて居るのである。然るに此の『日本紙器』のみは最も濃厚なる政黨的色彩を有するのである。從來政府の低利資金を出して救濟するのは、事業そのものが少くとも財界に甚しき影響を與ふる特殊もしくは有力な銀行會社とか、或は對外的關係を有するものとか、或は國防上もしくは內國產業の發達上に重要なる意味を

有するものに限られて居たのであるが、たゞ此の『日本紙器』に對する政府の低利資金六百萬圓を融通せるが如きは、無意義極まるものであつた。

『紙器』なるものを如何なる點から考へても、國財上もしくは內地產業の重要なるものであつて、これを特別に保護しなければならぬとは、誰しも考へ得ざるところであり、また此の『紙器』が倒產するからと言つて、日本の財界に、それほど影響するものでは無い。時の政府たる高橋內閣は、しかも此の『日本紙器』に對して臨時工業救濟資金なる名目の下に、六百萬圓を五分七厘の低利、五ケ年期間で融通したのであつた。

元來此の『日本紙器』なるものは明治四十五年一月に『日本紙器製造所』といつて神田に設立せられたものであるが、大正二年八月に一千五百萬圓の『日本紙器株式會社』に組織を變更し、「鳩山一郎」が社長となつて居たが、大正九年の大恐慌に祟られ、翌十年二月には遂に破產しなければならぬ窮狀に陷つた。『安田』は此の破產以前に多少の株式を所有して居たのであるが、破產の段取となると『安田』も一肌脫ぐが政府も何とか救濟せよと頑張り、これに例の「鳩山」が駈け廻つて、遂に巧々と六百萬圓からの大金を政府から無代のやうな利息で借入れ、そして『安田』は大した金を出さずに見

事『日本紙器』といふ大會社を我物としたのである。

三　會社乘取りに失敗した例

こんなのを書き立つれば際限は無いが、つまり被合併銀行會社の大部分は其の程度の差こそあれ概ね以上のやうな方法、即ち貸して打奪る主義で、まんまと乘取つたものである。

併し、いくら『安田』だといつても一から十まで貸して打奪らうとはしない。たとひ又しようとしても色々な故障が起きて來て、それが出來なくなつたのも多くある。就中『東京電燈』の如きはそれである。『東京電燈』は今でこそ電力界の覇王と稱せられてゐるが、明治二十四五年頃には非常な悲境に陥り、或は解散しなければならぬ狀態となつたのである。こゝに於て「善次郎翁」が乘込んで救濟に當り、自から經營者の中心となり、滿五ケ年間といふものは、整理恢復に努めたのであるが其後の營業の根本的改善策として電燈料金の値下を主張したのであつた。即ち當時の電燈料金は餘りに高率であるために、其の使用者は主として中產階級以上に限られて居るから、此際値下をして中產以下廣く一般に電燈を使用せしめようといふのである。かくする時は所謂薄利多賣で、需要者

は四五倍にも增加し、隨つて會社の利益は大に增加するであらうといふのである。之に對し當時の他の重役は極力反對したので、遂に翁は其の會社と關係を絕つことゝなり、其後『日本電燈』なるものを創立して、『東京電燈』に對抗するところあつたが、其後『東京市電氣局』も現れて、こゝに巴狀戰となり、『日本電燈』は愈々苦境に陥つたので、其後遂に『東京電燈』に併合せらるゝに至つたが此の電燈問題だけは翁の主張が善いやうでもあり、また當時世間の批評では、『安田』が東京市の電力の獨占を企てゝ失敗に終つたのだとも言つてゐた。兎に角此の電燈だけは流石に餘りに公共的性質を多く有して居るから、遂に『安田』の買つて打奪る式の祕法も失敗に終つたわけである。

以上の如き方法で、今日まで『安田』系の事業は『安田』傘下に集められたのであるが、是等の事業が今日悉く利益を擧げて居るものでは無い。今日のところ保險會社は何れも相當の利益を擧げ、成績先づ良好と見らるべく、又他の事業會社も、『京濱電氣鐵道』『中國鐵道』の如き一割二分からの成績を收めてゐるが、これに反し『小湊鐵道』『奉天製麻』『滿洲製麻』の如き、往々損失を蒙り又『臺灣製麻』『滿洲興業』『興亞企業』の如きも何れも無配當の狀態であつて、是等は『安田』として整理の意志があり、現に『秋田瓦斯』及び『秋田電氣』の如きは大正十四年春から、全く關係を絕つ

て他に讓歩してゐる有樣である。

大思惑師の安田

一　堅實の裏に此の太つ腹

『安田』は堅實を生命とする。就中『安田系銀行』に至つては、堅實そのものゝやうだと言はれてゐる。なるほど貸出や回收に際しては頗る手堅くやつて居るやうであるが、これも『善次郎翁』が殘した家風の一つであり、翁の性格の然らしめたところであらう。ところで、巨億の金を地道一方で儲けたかといふに、決してさうではなく、前回までに既に述べた通り、ボロ銀行やボロ會社を買集めては、それを丹念に整理して、積み上げたのが今日の富の大部分である。しかして又同樣に堅實を生命のやうに標榜する『善次郎翁』が、其の半面に大思惑師であつたことも、少くも彼の過去を知つた者は誰しも首肯し得られるところであり、且つ此の大思惑で今日の大をなしたことも又事實である。勿論、彼は口に相場を說かず、行爲に堅く警むと雖も、彼の生涯に於ける銀行經營に際し、亂

暴なやうな貸付もやれば、又資金の運轉をなし、或は所有株式の賣崩し、買煽りといつたやうなことを遣つて來たのである。しかも有餘る金を有することとて、是等の大賭博が殆ど思ふ壺に當つたのである。

彼の明治三十九年に於ける成金時代に、鈴久こと『鈴木久五郎』が『鐘紡株』に大バリをやらすために、三百萬圓からの資金を貸出したるが如き、或は『阪神電鐵』の營業困難に際し巨額な資金を融通した如き、其の條件は將來『阪神電鐵』が利益を得て新に增資株式を募集する場合は、其の大部分の權利を『安田』に與ふることを以てしたのである。蓋し彼は同會社が戰後增資株を募集するに當つては、必ず大盛況であることを豫想して居たからである。果して此の思惑は見事に的中して非常な利益を贏ち得た。

次は明治三十一年、時の政府が日清戰後の經營を誤つたがために財界は大混亂に陷り、株式は大崩落を喰つたのであつた。そして當時の財界の中心人物たる『雨宮敬次郎』の如き破產の風說を傳へたのであつた。此時に際し『安田』は『雨敬』が所有する一切の有價證券と不動產まで擔保に取り、負債の償却を引受けたのであつたが、これが爲めに市場は『安田』の勇氣に安心し、漸く沈靜に歸し

たのであつた。一方「雨敬」は此時其の財産全部を確實に『安田』にしてやられたことは勿論である。

二　株式界動搖の張本人

併し以上のやうなことは其の目的は兎に角、其の行爲は大に勇氣あり且つ一會社若くは一個人の窮境を救ふのみならず、惹いては一般財界を救ふ所以であるから推賞こそせよ、決して貶す理由を發見しないのであるが、しかも之が銀行家として爲すべきことか如何かといふことになれば大に疑問とするところである。殊に「鈴久」に投機資金を融通するが如きことは、決して正氣の沙汰とも見られないのである。

それは兎に角として其後かの大正九年三月十四日に端を發した大恐慌に際し、彼が殆ど財界攪亂に等しきことをしたことである。當時の恐慌が、あのやうに急激に來たのは『安田』が之を誘引したのだと傳へられてゐる。即ち恐慌來の聲を聞くや、『安田』は其の手持の株式を一齊に賣放つたのであつた。即ち是等の株式は高値時代に背負ひ込んだものであるから、市場崩落の聲を聞けば、之を處分賣をしなければ成らぬのは當然のことかも知れぬが、兎に角『安田』が賣に廻つたがために、

市場は崩落また崩落、實に慘澹たる狀勢を呈した。此の當時『安田』が賣つた株式の總計は三億圓に達しただらうと言はれてゐたが、事實は一億七八千萬圓乃至二億圓近くであつた。しかして其の賣つた株の總計が幾何であらうと、みす〳〵損をする譯に行かないから『安田』とても賣らざるを得なかつたであらうが、たゞ其の賣崩して間もなく買に廻り、さきに賣放した株の大體の底値を見定めて、其の大部分を始めの三分の一、即ち六七千萬圓を掬ひあげて擔保の差換をしたことである。即ち彼は恐慌來、株式崩落を利用して一億圓以上の利喰をしながら、一方擔保差入者に對しては下落に相當する增擔保を請求した如きは、餘りに惡辣な遣方であつた。財界の一部に於て彼を財界攪亂者といふも無理もないことであつて、斯の如き行爲は苟も大銀行として爲すべきことでは無いのである。

尤も斯の如きことで『安田』を責めることは甚だ間違つたことで、『安田』の『安田』たるところは、苟も益を得るためには、敢て財界に及ぼす影響の如何とか乃至は平常の顧客を選するの途如何といふが如きことは少くも顧慮しないところであつて、利益を得るためには、何者をも犧牲にして驀進するのが善しとせられてゐるのである。

勿論『三井』『三菱』を向に廻し、我國に於ける第一流の銀行を以て自認する今日の『大安田銀行』は、往時「善次郎翁」が取つたやうな大思惑を敢てしないであらうが、「善次郎翁」存命時代は、必ずしも堅實一方の營業を續けて居たとは言はれぬ。此點、世間が欺かれてゐた感がある。

しかし今日の『安田』が如何に堅實であるかは知る人ぞ知るわけであつて、預金協定違反を大ビラにやり、組合銀行からギュー〳〵締めつけられて、やつと委員會總會で謝罪しなければならぬ不體裁や、或は『東京火災』が火保協定率を無視しての顧客集めをなし、一般火保界から爪彈きされて先年委員選擧の際、見事落選した如きは、決して堅實で且つ眞面目であるとは言はれないのである。そして若し往年の『安田』の如く株式に手を出し株式界動搖の下手人となるが如きことあらば、それこそ折角贏ち得た一流銀行の名を汚すのみならず、其の根柢に或は一大陰影を投げるかも知れないのである。

結城豐太郎の安田入り

一　彼が安田入りの原因

こゝで一寸「結城豐太郎」の安田入に付いて述べて置く必要がある。

「結城豐太郎」は人も知る如く、東北山形の產、明治三十六年の帝大政治科の出身である。恩師「穗積陳重」博士は、彼の秀才に囑目し、彼をして財界に活躍せしむるために、先つ『日銀』に推薦した。『日銀』に入つた彼は、累進して福島支店長に擧げられ、こゝで意外の成績を示したので、破格の拔擢を受けて理事となり、商業の中心地なる大阪の支店長として榮轉したのであつた。これが齡未だ不惑に達しない頃であつたといふから、以て彼の才能が如何に非凡であつたかを知ることが出來る。

尤も時の總裁「井上準之助」が强く彼の才を愛し、其の背後に在つて、推輓措かなかつたことも、彼の出世を早からしめた有力な原因にも相違なかつた。而して、大阪に於ける彼の活躍は頗る目覺しきものがあり、殊に彼の大正九年三月に起つた一大恐慌は、本來ならば其の端緒が商業の中心地たる大阪に依つて開かるべき筈であつたが、彼が『日銀』支店長としての處置宜しきを得たため、最初の颱風は大阪經濟界の上空を掠めて、音もなく過ぎ去つた。其の當時に於ける彼の手腕と功績とに對しては、何人も推稱措く能はざるところであつた。これが後年、彼をして『安田王國』入りを爲

さしめた大なる原因である。

二　因果應報！　酬いは覿面

彼が『安田』に入るや、先づ第一着手として全安田系銀行の總括統一を圖つた。卽ち「結城」の『安田』入りは大正十一年であつたが、翌十二年十二月には、安田直屬の銀行である『第三銀行』外十一行を合併して、資本金一億五千萬圓、拂込九千二百七十五萬圓の大銀行を組織し、此外に、なほ『安田貯蓄』外十一銀行を統括したのである。それからまた例の『安田保善社』は、合法的脫稅機關の先驅と云はれてゐたものを、全安田王國の參謀本部たらしめ、安田王國の一切の事業、一切の計畫、若しくは方策は之より出づることにし、銀行も會社も、全部統括することにした。

玆に於いて從來猶太人式の商法を營んで來た『安田』は、所謂新知識を加へて著しく面目を改め、新時代的經營の精神が注入されたやうであるが、しかもこれは單に舊き形體の外皮にペンキを塗沫したに過ぎず、其の實質に至つては故態依然として金貸根性の域を脫することは出來なかつた。

併し「結城」は『安田』に入つてから、從來の猶太人式の商法を改め、正々堂々たる、天下に恥ぢ

さる『大安田』たらしむることに腐心したことは事實である。彼は他の善づくしの眷族共に比し、較べものにならぬ程の教養と抱負とを持つてゐた筈であつた。しかも其の努力は多くの場合無駄となり、安田系統の銀行會社がやること爲すことは、依然として昔ながらの『安田』のいきたりを、傳統的に繼承するに過ぎなかつた。

たとへば彼の預金協定違反事件を惹起した如きも其の一例である。預金協定は、大正七年、時の藏相「高橋是清」が預金爭奪の弊を痛感し、有力銀行の主腦者と協議の上制定したもので、『安田』は確預金協定の幹事銀行であつた筈だが、意外にも其の幹事銀行たる『安田』の淺草支店が、協定違反の鎗玉に擧げられるといふ椿事を捲起した。それは同支店が淺草區の公金約三萬圓を協定率より五厘高の六分五厘で預つたといふのである。此事が一區會議員に摘發され、事實明瞭のため支店長某は引責辭職した。預金協定の規約に依れば、違反銀行は組合から除合されることになつてゐるが『安田』が幹事銀行であるばかりに、一支店長の申譯的罷免と『安田』の謝罪とに依り、事件は線香花火的の結末を告げた。とはいへ、これがために『安田』が器量を下げたことは一通りや二通りでなかつたのである。

尤も『安田』としては、協定違反は初犯では無かつた。前にも九州の小倉支店が、そのために問題になつた。また東京の小石川支店にも同様の事實があつた。以上は單に表面に現れた犯罪事實で、若し峻嚴に檢察の手を下したならば、他にも無數の事實が發覺さるゝことは想像に難くない。これはたゞ一『安田』をのみ責むべきで無いことは云ふまでもないけれども、素性が素性だけに、『安田』の場合に限つて、小事故さへも大事件化せらるゝ傾きのあるのは、因果應報覿面とでも云ふの外はないのである。

三　猛烈なる結城閥結成慾

「結城」は『安田』に入つて間も無く銀行の統一を圖ると共に、新舊人物の差換を行つた。そして、自己中心の安田王國改造に腐心した。即ち先づ手を染めたのは『東京火災』で、「南莞爾」を『千代田火災』から引抜いて常務に据ゑ、「南」の手を通して社員の大異動を行ひ、舊安田系に屬する「長松篤斐男」常務、小松林藏」は何れも事實上社務の樞機から追はれ、「新井智三郎」を平取締役に下らしめた。次いで『帝國海上』の「村松春雄博士」「古門林太郎」の兩名は同社創立當初からの功勞者であつ

たにも拘らず敬遠され、「古門」は常務から平取締役に下り、之に代るに結城派たる「岩崎恒二郎」、「千々岩英一」が入つて全く實權を掌握し、ために社内は一年近くも動搖した程である。

また再保險會社たる『東洋火災海上』も、これと同時に「結城」の腹心たる「南莞爾」の手に依つて、完全に彼の勢力範圍に歸してしまつた。而して安田系の保險會社たる『東京火災』『帝國海上』『共濟生命』及び『東洋海上火災』の四社の中『共濟生命』を除く他の三社は確實に結城閥内に入つたので、魔手が次いで『共濟』に及ぶのは自然の勢ひで、遂に社長たる「安田善四郎」を『晝夜銀行頭取』たらしめて、體よく『共濟』を逐はんと計り、或は其の以前に「善四郎」社長の信任厚かつた秘書課長「田中某」を榮轉に名を藉りて、『共濟信託』に移さんとするなど、態度頗る露骨を極めたので社内の反感を買ひ、所謂『共濟生命』ストライキ事件なるものが持上つた。

此の事件は思つた程のこともなく、小火で鎭火したけれども、溫柔猫の如く飼ひ慣らされたる『安田』の圏内に、斯くの如き不祥事を發生したことに依つて見ても、當時「結城」の改革策、言葉を變へて云へば、結城閥結成慾が猛烈を極め、從つて其の反面に反結城熱を煽ることの大なるものがあつたことを親ひ知らるゝのである。

安田と政權

一　罪障消滅のため出費

前にも一寸書いた通り、『安田』は政權とは比較的疎遠であつた。『三井』『三菱』若くは『大倉』『高田』等が政商として、今日の大をなしたことは餘りに明かな事實である。然るに『安田』に至つては、今日まで政商と目さるゝ程のことも無く、政權とは案外疎遠して來たのである。元來富豪にでもならうといふものは、政權に接近することの嫌ひなものは少いやうであるが、『安田』が今日まで其の政權に比較的疎遠であつた所以は、經營する事業そのものが、銀行とか保險會社とかいつたやうなもので、政權を利用して金儲けをしようといふ機會が無かつたことゝ、それから今一つは「善次郎翁」が非利殖的な政治に金を投ずることは、溝の中に金を捨てるのと少くも同樣だと思つてゐたからである。

それでは『安田』は政權とは全然緣が無かつたかといふに、必ずしも左樣ばかりとはいへぬ。現に

政變毎に牡丹餅が落ちて來るのを夢想してゐる「後藤新平」からは流石の「善次郎翁」も浮されたことは事實である。殊に「後藤」の隱れ場所たる『市政調査會』に三百萬圓も打奪られたことは晩年稍佛心を出した爲でもあらうか、「善次郎翁」としては似合はしからぬことをしたもので、「後藤」は之によつて政權を窺ひ且つ子分を養ふの梁山伯たらしめようとして居るのである。

「善次郎翁」時代に於ける政權との緣は先づ「後藤」ぐらゐのものであるが「結城」時代に入つては漸く政治色が濃厚となり、殊に「井上準之助」が大地震に搖ぎ出されて『日本銀行』から『大藏省』に鞍替へした後に於ては、「善次郎翁」と「井上」との關係も相當密接であつたのに、其上に「結城」と「井上」とは所謂親分子分の關係あり、「結城」が今日あるのは職として「井上」のお蔭だとも言へる位であつて、しかも此の「井上」は今や經濟界と政治界との兩棲動物の觀あり、「井上」の其の背後には「高橋是清」あり、或は「山本達雄」あり、或は「山本權兵衞」乃至「田健次郎」ありて、是等は多少の親疎の關係はあるにしても、一度軍資金の調達を賴まるれば、いづれも嫌とはいへぬ關係にあり、そして其尻は必ず「結城」に廻つて來ることは餘りに明かな事實である。

それかあらぬか「結城」が安田入して間もなく、安田王國內は餘りに政治的色彩が濃厚ならんとす

るの形勢あり、今日まで餘りに帳簿に記載されたことのない變な性質の金が隨分流れて行くので、今更ながら狼狽した模樣であつた。そして眷族共は私に「結城」に對して、『安田』は元來政治とは緣遠いものであることを注意し、恰も婿養子が小姑から酷められたやうな氣不味さで、爾來出來得る限り政治とは遠ざからんとしたことが、同時に言論機關からも疎隔されたかの感あり、しかして言論機關との疎隔の結果、先年のやうに天下の新聞紙が擧つて『共濟生命』問題に、若くは預金協定違反に、猛烈なる攻擊の矢を向けられたのである。家憲を振廻してチク〳〵小當りする小姑と、五月蠅い世間との板挾みになつてゐる「結城」も、こゝは頗る苦惱の態であるが、どうせ「善次郎翁」が積んだ惡錢だ。身につかぬのは寧ろ當然のことであるから、親分連の仰せを畏みて之を將に政界に獻ずべきであらう。たゞそれが如何なる程度に蒔いたら種が實るかといふことである。『三井』『三菱』も時に政界に對して惜げもなく財を散ずる代り、これは幾月か若くは幾年間の後に利が利を生んで歸つて來るのであるが、『安田』のは恐らく今のところ利が生んで歸ることは六ヶ敷かるべく、とれは恰も罪障消滅のために回向をするの類である。

二　前途恐るべき安田の政權接觸

尙『研究會』の「前田利定」は先年來『大安田銀行』の重役として名を列することになつた。勿論これは加賀百萬石を代表して入つた譯ではなく、曾て『明治商業銀行』の重役であつたが、遞信大臣となつた時、是等の重役を引いたのである。併し其後の政情では到底臺閣の椅子も轉げて來さうにも無いのと、それまで金穴を充分養つて置かねばならぬ必要上からして、斯くは『研究會』を背景とし、且つ其のお使番を兼ねて乘込んで來たものであつて、或は今後『研究會』と『安田』とは或密接な關係が出來るのでは無からうかと、頭痛に病んでゐる者もあるやうである。

世に何が恐しいかといへば、政權と金權と、そして言論機關が聯結した時より恐しいものは無いであらう。それは如何なることをも爲さんとして爲し得ざるなきがためである。國家が往々〳〵他國に對して戰端を開く場合は、此の三者の一致を見た結果である。しかしてそれ以上の場合に於て政權と金權とは殆ど常時聯結するのであるが、たゞ言論機關が之に加擔することは大抵の場合無いのである。即ち言論機關は寧ろ是等と對抗し論難攻擊の態度に出づるを常とするのである。しかして鼓

に『安田』が今後或期間の後に於て、若し確實に政權と接觸し提携するが如きことあれば、それは少くも恐るべきものがあるのである。成程『三井』も『三菱』も常に政權に接觸して來たのであるが、それは『三菱』の興祖「彌太郎」が、少くも武士的根性に富み、『三井』の中興「高房」が道德的信念に篤かつたために雙方とも常に政權に接觸すると雖も、甚しき邪道に陷ることなくして今日に至つたのである。然るに玆に『安田』が今日の富力を以てし、しかも其の富力の中心が金融上にある以上に於ては、將來或は『安田』の一顰一笑が大いなる結果を齎らすかも知れないのである。現に日露戰爭も既に終末に近く、軍費漸く涸渴せんとするに臨み、「兒玉大將」は急遽戰地より歸り、軍資金調達について「善次郎翁」に相談し、更に此上五六千萬圓の資金の調達を依賴したところ、翁は色をなし、

「財界は既に疲弊してゐるから、これ以上に軍資金を調達する餘裕は無い」

と答ふるところあり、こゝに流石の「兒玉大將」も最早講和の外なしとの決心を爲したといふことである。即ち彼は金權を以て講和に導いたものであつて、斯くの如き勢力が若し今後機會ある毎に猛威を揮ふが如きことあるに於ては、それは恐るべきことでは無からうか。現に黃金萬能主義の米國は既に金權政治化せんとするの形勢にあり、我が『安田』の如く傳統的に金錢上の惡魔主義を尊奉す

るに於ては、それがもし政權と接觸した曉に於ては、恐るべき結果を齎すのでは無からうか。

併し一方に說をなす者の中には、そんな心配は無用、銀行が政權と接觸するやうになれば、『鮮銀』『臺銀』の二の舞ひをするものだと。或はさうかも知れぬ。或はさうで無いかも知れぬ。

人物の缺乏

一　重心を失つた安田王國の改造

安田王國は、いふまでもなく先代「善次郎翁」によつて建設せられた。しかし王國の規模が完成したのは、「善次郎翁」歿後のことである。翁は其の最後の日までも猶ほ領土慾は熄めず、手段と方法との如何を問はず、或は救濟の名に藉り、或は協同の名の下に買收し併合して飽くことを知らなかつた。隨つて其の當時に於ける銀行も會社も其の組織雜然たるものあり、恰も寄合世帶のやうな觀があつた。加ふるに其の個々の銀行もしくは會社の首腦者は、或は安田譜代の者を以てせるものあり、或は銀行もしくは會社の合併と共に其の首腦者も同時に王國內に入れて外樣たらしめたもののあ

り、且つ人物に於ても丁稚上りあり役人の古手あり、また稀には大學出身もあり專門學校出身もあると云つたやうに雜然として居り、隨つて其の經營方法の如きも、安田傳來の高利貸式前垂式の外に新らしき商法もあると言つたやうな風であつた。

然るに「善次郎翁」の變死は安田王國に取り、眞に青天の霹靂であつて、「善何々」の眷族共は、たゞ呆然たるの外は無かつた。しかも「善次郎翁」の變死は、少くも安田王國に取り劃時代的なショックを與ふるものであつて、「善次郎翁」の因業を以てして、始めて惡魔主義を發揮し得るものであるが、他の如何なるものを以てするも、到底彼の惡魔主義に追隨することは出來ないのである。勿論、傳統的には不知不識の間に今も猶惡魔主義を繼承いでは居るが、たゞ以前のやうに露骨に遣り得ないのと、遣るにしても、二重にも三重にもヴェールを被つて遣るのであらうが、それにしても兎に角、其後『安田』が取るべき方途に就いては是非何等か適當に考慮しなければ成らなかつた。さて、それならば如何して其の方途を定むべきかといふことになつて、先づ先決問題として「善次郎翁」亡後の『安田』は重心を失つた獨樂のやうなものであるから、これに重心を與へねばならぬといふことになり、こゝに「結城豐太郎」の入社となり、そして彼は王國の最高機關たる『保善社』の專務理事に納

まり、重心を失つた王國に重心を與ふることゝなつたのである。

斯くて「結城」が入社して以後、雜然たる王國が其の規模を漸く組織的に統一し、若くは少くも一新生命を與へたことは事實である。卽ち「結城」が入つて間もなく、系統銀行の合同を行ひ、或は行員もしくは社員にして、從來の丁稚上りの代りに、大學もしくは專門學校出身の新進を出來得る限り入社せしめ、又從來の幹部が前垂式・高利貸式であるからといふので、出來得る限り之を新進の者に更迭せしめ、或は如何しても傳統的に古いもので新らしき者に更迭することが出來ないやうであれば、古い者を社長といつたやうな名義で上に据ゑ、其下に新進な者を專務・常務といつたやうな方法で据ゑて置いて、實際の仕事は新進氣鋭の者に遣らせることにした。かくて形態にも內容にも『新安田王國』を創設し、且つ完成せんとしたのであつた。たま〳〵先年の『共濟生命事件』が王國改造の反逆者となり、惹いて外部にまで波及し、預金協定問題を起し、そして其の改造計畫に一頓挫を與へたかの觀がある。

二　大人物を招聘する必要なきか

併し『安田』が形體にも內容にも眞に完成を見るまでには、相當の年月を要するものと見なければならぬが、何といつても『安田』は人的要素に缺くるところがある。そして其の缺陷を補ふためには社員もしくは幹部級に優秀者を採用することの必要あるは勿論だが、それよりも更に痛感するのは眞に中心となり得べき大人物を得ることである。成程、現在「結城」は『保善社』の專務理事として王國の中心をなすと雖も、彼は到底『安田王國』の中心人物たるには荷が重過ぎてゐる。このことは「井上」の推薦により安田入をした時に、誰しも感じた事であるが、先年の『共濟生命事件』について、預金協定違反問題が出でて益々其の然る所以を立證した。元來彼の銀行業務に於ける經驗若くは廣く處世上に於ける經驗といふものは、明治三十八年に大學を出て直ちに日銀に入り、それから比較的昇進が早く、祕書役から理事となり大阪支店長となつたに過ぎず、他に特異の處世上の經驗を有しないのである。それで單に『安田銀行』の『副頭取』としてならば、或は其任であるかも知れないが、それ以上に『保善社』の專務理事として王國の總てを總攬しなければならぬといふことは、到底彼の克くすべきことでは無い。尤も彼は之を處理し統括すべき事務的才能は持つて居るかも知れぬ。併し苟も『安田』ぐらゐの大きな家臺骨を背負つて立ち、これを巧みに總攬するといふことは、寧ろ事

務的才能よりは所謂將に將たる德の力が無ければならぬ。此德の力に至つては如何に努力しても到底企及し得べきものでは無く、それは自然に備はる人格の閃きであつて、「結城」輩の及ぶところでは無い。

先年の『共濟生命事件』、若くは『預金協定事件』が、「結城」の不德の致すところであることは、恐らく彼も痛感したことであらう。彼は到底德を以て人に接するの資格なく、人の頭目たるの資格を有しないものである。それで宜しく彼は現在の專務理事たるの地位を退いて、單に王國の事務を統括し處理するか、或は現在の專務理事の上に眞に人の頭目となり得べき人物を招聘して其下で働くといつたやうな方法を取る必要がある。卽ち『安田』が今後其の形態にも內容にも從來と其の面目を一新して彼の『三井』『三菱』と肩を竝べようとするには將に將たるべき人物を招聘することが急務中の急務であり、且つ緊要のことである。

例へば彼の『三井』にしたところで、明治の初年、彼の「中上川彥次郎」の人物を以てして、彼の大改革を全うすることが出來、そして今日の大をなしたのである。そればかりでなく、今日『三井』を背負つて立つてゐる「池田」にせよ、「米山」にせよ、皆、「中上川」が今日あらしめたものであつて、

「中上川」の人物と手腕とは克く情實纏綿の「三井王國」をして整理し、且つ難問題とせられてゐた彼の「三井」對「東本願寺」の八百萬圓事件をも、圓滿に解決し得たのである。況んや人事の問題に於ては、快刀亂麻を斷つの慨を以て縱横に手腕を揮ったのであるが、其の人格の力は何等の波瀾をも起すことは無かつたのである。「結城豐太郎」が「安田」に入つて、「ネオ中上川」たらんとして、しかも、其の中途までも行かない中に、內外の反感攻撃を受け、其の內情暴露の醜態に比すれば思ひ半ばに過ぎるものがあるであらう。況んや「安田」のそれは「三井」の如く情實纏綿せず、簡單に形體の整理と內容の改善にあつたのであるが、これをしも爲し遂げ得なかつたに至つては、これを「中上川」のそれに比して其の人格は勿論、其の手腕に至つても問題とならぬ程である。

こゝに於て「安田」が今日の大を益々持續せんとすれば、それは先決問題として其の頭目たるべき人物を招聘することである。若しそれが出來ず、今日の「結城」を以て之に當らしめようといふのならば、それは「安田」が將來大をなす所以で無いのみならず、或は「善次郎翁」が爪に火を點すやうな辛苦も或は水泡となる時が來ぬとも限らぬと思はれるのである。「結城」も又どうせ財界の穢多村である「安田」に飛び込み、それを背負つて起たうとするの決心があつたとするならば、今日となつて

は其の不德を恥ぢて、更に自己の上に頭目たるべき人を聘することが、自己を大にするのみならず、自己の當初の目的を達成すべき所以では無からうか。

銀行業

一 全國津々浦々までの銀行網

現在の「安田」の事業は、銀行業に於て其の公稱資本金二億二千六百十七萬五千圓、拂込資本金一億三千三百九萬二千圓、保險事業公稱資本金二千五百三十萬圓中拂込資本金六百三十二萬五千圓、製造工業資本金七千二十五萬圓、拂込三千三百九十四萬三千圓、鐵道事業資本金二千百三十萬圓、內拂込一千六百三十萬圓、土地建物資本金二千五百萬圓、內拂込一千三百七十四萬五千圓、電氣事業資本金四千二百二十五萬圓、內拂込二千八百萬圓、全事業の總計公稱資本金四億九百四十三萬圓、內拂込資本金二億三千百四十萬五千圓に達してゐる。

是等のうち「安田」の生命ともいふべきものは、いふまでもなく銀行業であつて、「三井」の物產に

於ける、『三菱』の鑛山に於けると同樣である。尤も『三井』にも『三菱』にも銀行業あり、これが重要なる役目を盡してゐることは事實であり、且つ我國に於ける一流銀行中の一流銀行である。『安田銀行』を此の兩銀行に比較する時は、成程其の資本金に於ては此の兩者を拔き、或は又其の預金額に於て時に此の兩銀行を拔くことありと雖も、其の信用の程度に於て、業態の堅實さに於て、若くは其の規模に於て、兩銀行に比し少くも見劣りするやうである。併し何といつても『安田銀行』は一流中の一流であつて、『安田』の生命が銀行業にあるだけに、銀行業に對しては全力を傾注してゐるの感がある。殊に數多の地方銀行を直系とし、また全國いたるところに支店若くは出張所を有し、其數三百七十七ヶ所といふに至つては、『三井』『三菱』も及ばず、況んや他の何れの銀行をも遠く及ばないのである。しかし『安田』の理想とするところは、全國いたるところに支店若くは出張所を設けて所謂銀行網を張ることである。それで今後も猶地方銀行の合併、買潰しは熄まないであらう。今安田系の銀行の概要を見れば左の如くである。（昭和元年十二月三十一日現在）

（商號）	（公稱資本金）	（積立金）	（預金）	（貸付金）
「安田銀行」	一五〇、〇〇〇千円	五五、六九四千円	六一九、三二五千円	五八五、二七六千円

「十七銀行」	一〇、二〇〇	一、〇三八	四三、二八六	四一、八一三
「第九十八銀行」	一、三〇〇	二三七	一二、三二九	九、三〇二
「四國銀行」	一二、〇〇〇	六八九	四一、四〇八	三七、八六〇
「大垣共立銀行」	三、〇〇〇	一、〇九〇	一九、四九六	一六、五九五
「正隆銀行」	二〇、〇〇〇	二、六〇〇	五三、六四五	七一、二五四
「第三十六銀行」	三、〇〇〇	三二六	一二、六一五	一〇、八七九
「關西銀行」	三、〇〇〇	一四八	八、〇九九	九、〇一七
「安田貯蓄銀行」	五、〇三五	一、六二八	一〇九、三〇二	一五、〇六〇
「栃木農商銀行」	一、〇〇〇	八六	四、二〇二	五、〇六三
「日本畫夜銀行」	一〇、〇〇〇	四六五	七四、一四一	五〇、六五三
「第三銀行」	五、〇〇〇	二六	一六、六〇八	五四、一五一
「富山銀行」	二、六四〇	九四	四、〇五二	六、二〇〇
計	二二六、一七五	六四、一二一	一、〇一八、五〇八	九一三、一二三

このうち『安田銀行』が中心であることは勿論であつて、これに就いては別項に詳述することゝし、其他の銀行に就いて見れば左の如き色分けを見る。

二　安田系銀行の種々相

十七銀行　本店を福岡に有し、明治十年國立銀行條例により設置せられたが、明治三十五年に營業狀態が不良に陷り、翌三十六年に一旦減資して整理を圖つたが、到底挽回の方法が無いといふので、舊藩主「黑田家」より「金子堅太郎子爵」を通じて、『安田』に之が救濟を頼んだので、同年『安田』が引受け、其後營業も漸く恢復し、斯くて大正十年には同縣下の『宗像銀行』を合併し、次いで十二年には『福岡銀行』、十四年には『三瀦銀行』を合併して、今や資本金一千二十萬圓、拂込金四百六十八萬七千圓、預金四千三百二十八萬六千圓、貸出金四千百八十七萬三千圓、支店及び出張所數二十六ケ所といふ地方銀行として第一流の銀行となつた。

第九十八銀行　千葉に本店を有し、同じく國立銀行條例で設置せられたものであるが、明治十五年中、同行の大株主たる「平岡喜一郎」より「善次郎」が實權を握るやうになり、其後大正六年には

「一ノ宮商業銀行」、同七年には『長南銀行』、同八年には『花房銀行』を合併して、今日に至り、其の資本金は僅に百三十萬圓に過ぎないが、預金は千二百萬圓ある。

四國銀行　高知市にあり、明治十一年に『第三十七國立銀行』及び『第百三十銀行』を合併したもので、更に明治三十年には『高知銀行』、大正十二年に『土佐銀行』を合併して『四國銀行』と改稱したのである。資本金一千八十萬圓、支店所在數二十八ケ所、安田系の地方銀行中最も多くの支店を有する銀行であつて、預金四千百四十萬八千圓といふのだから、地方銀行としての大銀行であることは勿論である。

大垣共立銀行　大垣に本店を有し、明治十一年十二月『第二十九國立銀行』としての營業期限が滿期になつたので、明治二十九年に『大垣共立銀行』を設立して其の營業權を繼承することゝなつた。然るに其の經營者に適當な人を得ないので營業は思はしからず、遂に明治三十七年に取付けを喰ひ、まさに破產に瀕せんとしたのであるが、幸ひに『安田』の『第三銀行』と取引關係があつたので、『第三銀行』の救助を乞ふことゝなり、そのために取付は納まり、辛うじて破綻を免れたのであるが、其後又もや明治四十二年に取締役支店長某が、十五萬圓からの行金を費消した事件が世間に曝露

して營業困難に陷り、遂に『安田』に合併する事となつた。其の以前に同行は『美濃實業銀行』と合併し、又四十三年には『眞利銀行』、大正八年には『五六銀行』、十年には『養老銀行』、十二年には『農産銀行』と何れも合併して、現在では營業も漸く堅實となり、資本金は三百萬圓、預金一千九百四十九萬六千圓を有し、支店二十三ヶ所を有する銀行となつてゐる。

正隆銀行　元營口に本店を有してゐたが、其後大連の『正隆支店』と合併した。明治三十九年七月に日支合辨で創立したが、四十四年五月不良貸付及び資金固定して營業困難に陷つた。然るに同銀行は日支合辨であつて、其儘放任して若し破產でもするやうになれば、對支關係上面白くないといふので、『關東廳』は之が救濟に當る事とし、種々斡旋の結果、結局『安田』をして救濟に當らしむることゝなり、明治四十四年一月「原田虎太郎」なるものが『安田』を代表して調査に當り、遂に『安田』が引受くることゝなつたのである。其後『龍口銀行』を合併するに至つて營業狀態は漸時良好となり、今日に於ては資本金二千萬圓、諸積立金二百六十萬圓、預金五千三百六十四萬圓あり、滿鮮地方に於ける金融上の勢力は到底『正金』『鮮銀』の及ぶところでは無い。

三十六銀行　八王子に於ける生糸を主とする銀行であつたが、大正六年に營業困難となつて

『安田』の手に買ひ取られて今日をなしたのであるが、資本金は三百萬圓、預金一千二百六十萬圓の銀行である。

關西銀行　德島市に本店を有し、以前『關西貯蓄』といつてゐたが、頭取「高木次郎」の不良貸付續出のために遂に大正九年の大恐慌に愈々破綻曝露し、貯蓄銀行だけに零細資金の預金者多く、影響が相當大きかつた。『安田』は預金者救濟といふ名義の下に救濟に當ることゝなつた。資本金三百萬圓、預金は八百五十萬圓で安田系統銀行としては『富山銀行』に次ぐ小銀行である。

安田貯蓄銀行　いはゆる『安田銀行』とは姉妹銀行であつて、我國の貯蓄銀行中で有數なるものである。『安田貯蓄』の前身は加賀の金澤で『金上貯蓄銀行』と稱へてゐた。然るに大正九年八月お定まりの營業困難を理由として『安田』に買收せられ、そして『安田貯蓄銀行』と改稱した。其後『八王子貯蓄』『中加貯蓄』『小石川貯蔵』及び『横濱中央貯蓄』を合併し、又大正十年には『神奈川貯蓄』、十一年に『淺野畫夜貯蓄』、大正十三年に『福岡貯蓄』を合併した。即ち現在の『安田貯蓄』は八行の貯蓄銀行が合併したものである。それで支店及出張所數の如き、四十八ヶ所に及び、資本金は五百三萬五千圓、預金一億九百三十萬圓といふのである。

栃木農商銀行　明治二十七年に創立せられ、大正九年の大恐慌襲來と共に一も二もなく破綻曝露して同年四月一日には休業したが、幸ひ親銀行が『安田銀行』だつたので、二百萬圓の資金を借入れて兎も角一週間目には開業したが、大正十年には又々困難となり、遂に同年十二月に『安田』に買取られたのである。資本金は僅百萬圓、預金四百二十萬圓に過ぎない。

日本晝夜銀行　以前『淺野晝夜銀行』といつて居たのが、大正十一年に貸金の抵當に取られたものであることは既に書いた通りである。資本金は一千萬圓、預金七千四百十四萬圓といふ安田系の銀行としては相當なものである。

第三銀行　前身は『帝國商業銀行』である。『帝商』は破綻銀行としては一時有名な銀行で、「高山長幸」が頭取時代、即ち大正十一年十二月に營業困難、行員の背任行爲事件等が曝露した。それは深川支店長某が貿易商「森川鹿藏」と結託して輸入爲替二百萬圓の支拂保證をやつたことに端を發したのであつた。斯くて大正十二年一月に『安田』が整理に當り「鄕誠之助」や「藤山雷太」などの巨頭を引張つて來て、こゝにどうやら整理もついたが、遂に『第三銀行』と改稱し、頗る陣容を立て直した。併し同行の預金が一千六百六十萬圓に過ぎないのに、貸出は五千四百十餘萬圓もあるといふことからでも、同行の內容は猶整理の中途にあることを知るであらう。

富山銀行　大正十三年九月に營業困難となり、大正十四年一月に『安田』に減資の上で買取られた新米銀行である。

以上各銀行を總括するに、『安田』は別とし『十七』『四國』『正隆』『安田貯蓄』『日本晝夜』等は既に其の業態に於て堅實にして、地方銀行としても又貯蓄銀行として有數なるものであるが、其他の銀行に至つては何れも猶ほ整理の中途にあり、今後相當期間の整理を要するものあり、又は『大安田銀行』か若くは他の安田系銀行に合併するの必要があるものがある。恐らく結局は安田系の銀行は『安田銀行』の一つに統括さるべき運命にあるであらう。若しそれが實現する事になれば、資本金は實に五億餘圓に達し、預金十數億圓といふ世界有數の大銀行となるであらう。

安田銀行

一　五大銀行との比較

現在の『安田銀行』は前にも概略述べた通り、大正十二年十二月に安田系銀行二十三行の中、最も色彩の濃厚な十二行を第一次計畫として合併したものであつて、これは先代「善次郎翁」の意志であつたのを、今の「善次郎」が其の意志を繼承し、且つ之を專務理事の「結城」が實現せしめたのである。

此の十二行の中『保善銀行』は合併の主體銀行であつて、便宜のために新設せられたものに過ぎず、他は悉く例の買潰し策によつて買潰したもので、しかも比較的永い間『安田』で練つたものだけに、何れも內容は相當に堅實であり、從つて何れも對等の條件を以て合併せられたものである。其の合併せる十二行といふのは左の如くである。

（商號）	（公稱資本金）	（拂込資本金）	（本店所在地）
「保善銀行」	二〇、〇〇〇千円	五、〇〇〇千円	東京
「安田銀行」	二五、〇〇〇	一七、五〇〇	東京
「第三銀行」	三〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	東京
「明治商業銀行」	一〇、〇〇〇	八、七〇〇	東京
「日本商業銀行」	一〇、〇〇〇	六、二五〇	神戸
「百三十銀行」	二〇、〇〇〇	一二、五〇〇	大阪
「二十二銀行」	七、八〇〇	二、八五〇	岡山
「京都銀行」	五、〇〇〇	三、〇〇〇	京都
「肥後銀行」	一〇、〇〇〇	七、五〇〇	熊本
「信濃銀行」	七、〇〇〇	六、〇〇〇	長野
「根室銀行」	五、〇〇〇	三、二五〇	根室
「神奈川銀行」	二〇〇	二〇〇	神奈川
合計	一五〇、〇〇〇	九二、七五〇	

斯くて公稱資本金に於ても、又拂込資本金に於ても、所謂我國五大銀行と稱せられる中にあつて其の第一位にある。

（商號）	（公稱資本金）	（拂込資本金）	（預金總額）
「安田銀行」	一五〇、〇〇〇千円	九二、七五〇千円	五八五、〇〇〇千円
「三井銀行」	一〇〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	四八七、〇〇〇

「住友銀行」	七〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	四三五、〇〇〇
「第一銀行」	五七、五〇〇	五七、五〇〇	三八七、〇〇〇
「三菱銀行」	五〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三六七、〇〇〇

尤も公稱資本金や拂込金が多いからといつて、必ずしも其の銀行が、資本金や拂込金の少い銀行よりは優良だとは言へぬ。銀行は資本の大といふよりも寧ろ信用の程度如何といふことが重大な要素である。然らば其の信用程度は何によつて知ることが出來るかといふに、其の最も手近な方法としては、其の銀行の資金がどれだけあるか、就中定期預金がどれだけあるかといふことに歸する。しかして以上五大銀行の比較に於て預金額は『安田』が第一位にあり、次いで『三井』『住友』となつてゐるが、しかも之を拂込資本金の割合から見れば、『安田』が最下位に在るのは、從來『安田』が分立主義を採り、集中後、年猶ほ淺く所謂新店であるから、又止むを得ないのである。又其の定期預金にしたところが、『三井』の三億一千三百萬圓、『住友』の二億九千六百萬圓、『第一』の二億四千五百萬圓、『三菱』の二億三千五百萬圓に對し、『安田』は三億二千九十萬圓といふのであるから、成程其の絶對數に於ては多いのであるが、之を拂込資本金から見た相對數に至つては甚しく遜色あることを知らねばならぬ。

二　對外的信用の稀薄

次に『安田銀行』の『三井』『三菱』等に比して甚しく遜色あるのは、それが新店であるだけに對外的の信用の點である。現に『安田銀行』は海外に於ては全く支店若くは出張所といつたやうなものも無く、三百八十からの支店及び出張所は、全部內地若くは朝鮮・滿洲に限られてゐるのである。即ち『安田』は未だ眞の爲替業務といふものをやつて居らぬ。即ち『三井』や『三菱』は外國に支店を置いて一面に爲替銀行としての業務をやつてゐる。尤も爲替ビルの賣買は『安田』とてもやつて居るけれども、只だ其の賣買によつて利鞘を取るに止まり、自行で輸出手形を取組んだり、輸入手形を賣つたりすることが無いから、輸出入手形が殆どカバーされてゐるのである。然るに『三井』『三菱』になると輸出手形を取組んで居るから買爲替は賣爲替に比して非常に多いわけであつて、これは外國に支店を有する銀行ならでは出來ないことである。『安田』も漸次海外に支店を置き爲替業務を取扱ふ方針であるといふが、これは一朝一夕に出來る仕事では無い。內地に於ける銀行業務は多くの

預金を集めて、これを貸付さへすれば善いのであるが、爲替業務に至つては先づ海外から『安田銀行』に對する信用を得なければならぬ。これが容易のことでない上に、いざ爲替業務をやるにして第一其の業務を取扱ふ人物が無い。爲替のエキスパートといふものは日本でも數へる位であつて、これを養成するために五年乃至十年の年月を要するであらう。『正金』からでも引つこ抜けば兎も角、此の人の問題が容易ではない。

三　改善の餘地ある安田の業態

次に『安田』の業態を見るに、我國に於ける大銀行でありながら、其の貸付業務の如き、依然として昔の金貸式であることである。即ち貸付の範圍を見ると、證券の擔保貸が多いことである。一體『安田』程の大銀行になると證券貸をなすが如きは、其の營業として拙の拙なるものである。證券貸は資金が固定することは自明の理であつて、資金が固定すれば、それだけ利鞘が減ずることも當然なことである。故に大銀行としては手形割引が當然の業務であつて、苟くも第一流の商業銀行たる以上は、貸付の大部分が商業手形の割引であらねばならぬ。これを『三井』『三菱』に比較すれば左

の如くである。

	（安田）	（三井）	（三菱）
證書貸付	二三一、六五二千円	二、三八八千円	一五、三四一千円
手形割引	二二二、二五六	三〇七、五四三	一二七、八九三

即ち『商業銀行』として發達せる『三井銀行』が、『手形割引』が最も多いのに對し、『證券貸付』は最も少いのである。『安田』の如き若し『證券貸付』の多いことを自慢するやうでは、飽くまでも金貸根性より脱し得ざることを證するものと言はなければならぬ。

最後に三行の積立金を比較すれば、『三井』の諸積立金は五千五百四十一萬八千圓で拂込資本金の六千萬圓に對し、九割二分に相當し、『三菱』は積立金二千四百五十萬圓で、拂込資本金三千萬圓に對して八割强に相當して居る。然るに『安田』の諸積立金總計は五千六百六十九萬四千圓であつて、拂込資本金九千二百七十五萬圓に對し、六割一分に相當して居る。

預金總額と積立金總額とは、よく銀行の自慢の種となるものだが、『安田銀行』は未だ其の何れの點からするも、他の二銀行に比し自慢する點まで行つて居ないのである。併したゞ『安田』で自慢し

得るのは、銀行以外に他の事業を餘り手廣く遣つて居ないことである。銀行が事業を兼營することの如何に危險であるかは、我國の銀行破綻史が之を如實に語つて居るのである。彼の『高田商會』の『永樂銀行』に於ける、或は一寸以前には『增田ビルブローカー銀行』の如き、或は『積善銀行』の如き、皆それである。尤も『安田』とても手廣く事業を兼營しないからといつて、安心は出來ぬ。それは『安田』の唯一の道樂とも言つてよいボロ銀行の買收である。餘りボロを寄せ集めて居ると、どこから腐れかゝらんとも限らない。もうボロ買ひも大抵このくらゐに止しにして、精々『安田銀行』の內容の充實に意を用ひ、爲替業務等名實共に大銀行となるやうに心掛けねば嘘だと思ふ。「結城」といふ男は根が馬鹿でないから、もうこれ位のことは判つて居る筈である。

滿洲の金融權侵略

一　滿洲に於ける銀行の勢力分布

然し『安田』は何時まで經つても銀行の蠶食慾は忘れ得ぬやうである。「善次郎翁」が銀行の破綻だ

と聞けば、何ものを措いても飛んで行つて噛りついたやうに、今も猶ほ此慾のみは捨てられぬやうである。今後も屢々起る破綻騒ぎには屹度乘り出すであらう。

元來銀行の合併といふことは、現在の我國の狀態では必要なことには相違ないが、しかも『安田』の場合に於ける如く中央に於ける一大銀行が地方の銀行を合併するといふことは、決して喜ぶべきことでは無い。卽ち斯くの如き合併は資金の都會集中を意味し、且つ資金の偏在を意味するものである。若し資金が餘りに都會に集中する場合に於ては、地方は徒らに資金涸渴して、惹いては地方の產業を萎縮せしむるものである。故に其の地方の資金は、なるたけ其の地方に保存し且つ運用し、以て產業に絕えず活力を與ふるといふことが理想である。これがためには銀行の合併の如きも各地方々々に於て行ふことが策の得たるものであつて、『安田』の銀行大合同の如きは國家として取るべきことでは無い。若し此儘にして趨移するに於ては、『安田』のために金融上の大トラストを形成される惧れあるやも知れないのである。しかも『安田』の銀行合同慾は先年福岡縣下だつたかの銀行大合同などを企てたこともあり、其他各地方に於て其の機會を狙つてゐるかの觀がある。

しかして滿洲に於ける『安田』の金融上の勢力は愈々顯著なるものあり、或は此儘にして推移する

に於ては、滿洲の金融權は『安田』のために壟斷されるやも圖られぬのである。從來滿洲に於ける銀行は『正隆』『大連』『遼東』『龍口』『大連商業』及び『敎育』の六行であつて、此外に支店銀行として『正金』『鮮銀』『東華』『旅順』『平和』『日華』の六支店あり、これだけを以て滿洲地方の金融は行はれて居たのであつた。このうち『大連』『遼東』の二行と、此外に『奉天銀行』とは大正十二年七月に『滿洲商業銀行』に合併して『滿洲銀行』となり、隨つて滿洲に本店を有するものは、此の『滿洲銀行』と『正隆』『龍口』『大連商業』及び『敎育』の五行となつたわけであるが、このうち頭角を現し所謂滿洲の金融權を握つて居たものは此の『滿洲銀行』と他は『正隆』及び『龍口』とであつた。然るに『龍口銀行』は大正十三年八月に破綻して『正隆』に合併したから、結局滿洲に於ける有數なる銀行は『滿洲銀行』と『正隆銀行』の二行となるわけである。尤も此外に支店銀行として『正金』『鮮銀』の二行があるわけであるが、『正金』は爲替銀行として、『鮮銀』は滿鮮地方に於ける中央銀行として、何れも特殊の地位を有して居るから、普通一般の金融を掌るものは主として是等『滿洲』と『正隆』の二行である。

二　滿洲經濟界の覇王

『正隆銀行』は前に述べた通り、明治四十四年から安田系の銀行となつたものであるが、安田系銀行中其の積立金は『安田銀行』に次いで多く、又預金の如きも『安田』『安田貯蓄』及び『日本晝夜』に次いで大なる成績を示して居る程であつて、勿論滿洲に於ける此の銀行の地位も『正金』『鮮銀』等の特殊銀行を除き普通銀行として第一位にある。卽ち試みに『龍口銀行』の破綻若くは『大連銀行』其他四行を合併して『滿洲銀行』が創立せられなかつた以前の滿洲銀行界の趨勢を見れば左の如くであつて、これによつて『正隆銀行』の地位を知ることが出來る。

（商號）	（資本金）	（拂込金）	（諸積立金）	（預金）	（貸出）
「正隆」	二〇、〇〇〇千円	九、五〇〇千円	二、二二五千円	二四、八八六千円	三六、六〇三千円
「大連」	三、〇〇〇	二、五〇〇	六八八	三、七二二	八、六九〇
「遼東」	三、〇〇〇	一、五七五	三七三	二、四一九	九、四三六
「龍口」	一二、〇〇〇	五、一一三	三六七	九、九八九	二〇、八三七

「大連」	二、〇〇〇	二、〇〇〇	一〇七	九二六	二、八四五
「教育」	五〇〇	二〇〇	三〇	一、四九〇	四、一八〇

これによつて見れば『正隆銀行』が他の銀行に比し嶄然頭角を現して、其の資本金に於ても積立金に於ても、或は預金に於ても、殆ど問題とならざることを知るのである。然るに『奉天』『大連』『遼東』及び『滿洲商業』の四銀行は大正十二年七月三日合併して、資本金二千萬圓の『滿洲銀行』を創設することゝなつた。一方『教育銀行』は大正十一年八月に頭取「石本某」の關係事業の蹉躓に依つて、親銀行である『朝鮮銀行』幹部の更迭、手許資金の逼迫、『交通銀行』大連支店の引揚げによる同行預金銀約四十萬圓の引出等により其の內情を曝露して遂に取付騷ぎとなり、同地銀行團の『滿鐵』等に縋つて漸く百十萬圓の融通を受け、取付前の預金二百四十萬圓のうち其の二分の一、百四萬圓を支拂に應じたのであるが、猶ほ取付は熄まず、事態遂に收拾すべからざるの狀態となり、同月二十八日休業の止むなきに立至つた。其の後整理委員の設置となり、「石本頭取」の私財全部を投出して只管救濟に努めたる結果、『東拓』から八十七萬圓、『鮮銀』から五十七萬圓、『滿鐵』から十五萬圓及び『政府』が百萬圓の低利資金を貸出すことゝなり漸く整理を完うして大正十二年三月一日から商

號を『興信銀行』と改稱して今日に至つたのであるが、其の勢力は猶ほ微々たるものに過ぎず。又『龍口銀行』は前にも述べた通り、これまた大正十三年八月に破綻して遂に『正隆銀行』に合併されることゝなつたわけである。

玆に於て滿洲に於ける金融上の勢力は『正隆』『滿洲』及び『興信銀行』の三行によつて分割せられることゝなつたのであるが、しかし『興信』は今いふ如く振はず、『滿洲銀行』は比較的優勢なりと雖も合併して間も無いことではあり、到底『正隆』の敵では無いのである。殊に『龍口銀行』は破綻前までは滿洲に於て「正隆銀行」に次ぐ有力なる銀行で、之を合併した後の『正隆銀行』は正に滿洲經濟界に於ける覇王となり、斯くて滿洲に於ける經濟的勢力は『安田』によつて確實に獨占せられ、「善次郎翁」の理想たる我國に於ける金融上の獨占權が先づ滿洲に於て實現を見たのである。

此の點になると、『三井』も『三菱』も、もう駄目で、『第一銀行』の如き漸く朝鮮までは伸びてゐるが、滿洲方面に於ては『安田』の勢力に押されて手も足も出ません、殊に滿洲・蒙古に活躍することを以て無上の得意として居る『大倉組』でも、直系の金融機關を持つて居ないために、如何に滿洲に於て活躍しようとしても『安田』の一睨みにあつては到底物の數では無いのである。「善次郎翁」が明治

四十四年に『正隆』の缺陷に附入つて到頭『正隆』を我物としてしまつた其の先見の明に至つては、流石は「善次郎翁」と言はざるを得ないであらう。

事業會社

一　豐富なる資金の證券化

以上の如く『安田』の金融上の勢力は啻に內地のみならず、滿洲方面に於ては驚くべき勢力を有しつゝあり、今後猶ほ合併に次ぐに合併を以てして、我國內地に於ける彼の勢力は年と共に更に增加し、我が財界に取り若くは政界、或は一般社會生活上、甚だ怖るべき驚異となるやも知れないのである。

しかして、それが怖るべき驚異であると無からうと『安田』が將來に於ても依然銀行業に主力を集中することは事實である。卽ち『安田王國』が存續する限り、銀行業が王國に於ける中心勢力となるものであつて、隨つて銀行業にあらざる他の事業會社は『安田』の眞の目標とするものでは無いので

ある。さればといつて『安田』は銀行以外の事業會社の發展を決して閑却するものでは無く、殊に銀行と密接なる關係を有する保險會社は銀行に次ぎ力を注がるべきものであり、殊に最近に入つては『三井』が『三井信託』を起し、『住友』も亦、『信託』を起すに當つて之に拮抗して同じく『共濟信託株式會社』なるものを起したのであつた。尤も保險會社と云ひ信託會社と云ひ銀行業の別働隊の意味に於て力を注いでゐる譯であるが、其他の事業に至つては恰も副業に過ぎない位のものである。蓋し『安田』が銀行以外の他の事業に手を伸ばすやうになつたのは、其の豐富なる資金の證券化といへば、如何にも體裁が善いが、實は其の大部分金を貸して其の貸金の回收が出來ないために抵當流れとなつたものに過ぎないのである。卽ち止むを得ずやつて居る事業もあり、又是非やつて見たいために例の手段で以て特別に金を貸し、其上で引奪つたものもある。斯くて是等の事業會社が積り積つて現在では十七會社に及び、其の投資額からすれば銀行の總資本金二億二千五百萬圓に對し事業會社の總資本金は信託會社を入れ二億四百萬圓といふのであるから、殆ど對等の割合にあり、單に資本額から見れば事業會社も相當の勢力ありと言はなければならぬ。今安田關係の全事業を見れば左の如くである。（大正十四年上半期）

◇保險會社

（商號）	（資本金）	（契約金）	（收入保險料）	（準備金）
「共濟生命」	三〇〇千円	一四五、九一四千円	五、六八四千円	二五、六七一千円
「東京火災」	一〇、〇〇〇	一、七二九、一六八	六、四五八	七、六四五
「帝國海上」	一〇、〇〇〇	九八〇、七九八	四五〇	四、九四四
「東洋火災」	五、〇〇〇	二三〇、八〇九	一、一〇九	八一七

◇製造工業

（商號）	（資本金）	（積立金）
「安田商事」	一一〇、〇〇〇千円	八一八千円
「日本紙器」	一五、〇〇〇	〇
「帝國製麻」	三一、七五〇	一、三五六
「奉天製麻」	一、五〇〇	二五
「臺灣製麻」	二、〇〇〇	二六

◇鐵道

「水戸鐵道」	五〇〇	四〇八
「小淡鐵道」	一、五〇〇	〇
「中國鐵道」	四、三〇〇	一、〇〇〇
「京濱電氣」	一五、〇〇〇	一、二四五

◇土地建物

「東京建物」	一〇、〇〇〇	六、二五〇
「滿洲興業」	五、〇〇〇	四二三
「興亞企業」	一〇、〇〇〇	〇

◇電氣

「東京電力」	四二、二五〇	四三一

以上によつて事業の種類別に見れば生命保險が主要なるもので、次ぎは鐵道事業である。しかし之を各會社別に見れば、保險會社では「共濟生命」「東京火災」が主要なものであり、製造工業では

『帝國製麻』、鐵道では『中國鐵道』『京濱電氣』及び『水戸鐵道』である。土地建物では『東京建物』及び『東京電力』等である。猶ほ之を個々の會社に就いて見れば、

共濟生命　我國に於ける生命保險會社の元祖ともいふべきもので、「善次郎翁」が知人五百名を以て『共濟五百名社』なるものを組織して不慮の際に相互扶助主義の下に備へたのに始まる。今日に於ける生命保險會社として『愛國』『明治生命』等に及ばずと雖も、兎に角バックが『安田』だけに斯界に於て相當信用あることは勿論である。

東京火災　火災保險會社としては『東京海上火災』に次ぐ有力な會社である。創立は明治二十年で當時資本金二十萬圓であつた。然るに明治二十三年の横濱の大火及び二十五年に於ける神田の大火は同會社に取り大損害を與へ、當時の社長「安藤則命」及び前社長「林有幸」の私財を投げ出しても金額の支拂ひに應じ得ない程であつた。斯くて其時から『安田』が引受くることゝなり、先づ資本金を五倍に增資して百萬圓となし、そして其後の社務の發展と共に增資に增資して今日に至つた。

土地建物　「善次郎翁」が不動産金融機關として設立したものである。尤も關係銀行の不動産擔保の擔保流れ處分に利用されたことも事實であるが、兎に角これは我國に於ける土地建物の元祖であり、且つ今日に於ける最も有力なる土地建物會社たることも事實である。今日は東京の外に横濱・天津・京城・漢口に各支店を有して居る。

帝國製麻　『日本製麻』と共に製麻會社中の優なるものである。前にも述べた通り『下野紡織』『下野製麻』『近江麻糸紡織』『大阪日本織糸』『北海道製麻』等と合併したものであつて、『安田』の唯一の有力なる製造工業である。しかし近年に於ける麻糸紡績界の不況は同會社にも相當打撃あり、且つ『日本製麻』との競爭は雙方に不利であるとの理由で屢々此の兩會社の合併説が傳へられて居るが、未だに實現するに至らない。しかし早晩其の機運が到來するであらうが、それは『帝麻』が『日麻』を合併するの形式となり、こゝに『安田』は本邦に於ける製麻事業の獨占といつた形になるであらう。

東京電力　「善次郎翁」が電氣事業に對しては始めから關係を有し、今日の『東京電燈』の如きも彼が與つて力あることは前に述べた通りであるが、しかも電氣事業に對してのみは彼の最初の志とは稍相反して思ふやうにならなかつた嫌ひがある。『東京電力』は『群馬電力』『早川電力』が大正十四年三月合併されたものである。元來『群馬電力』は利根川の上流吾妻川に發電所を有し京濱一體

を供給地として居るのである。明治三十九年水力權を得て創立に着手したが、實際創立されたのは大正八年七月の事であつて、其後九年に『吾妻川發電所』と合併して貸本金一千二百萬圓の『群馬電力』となつた。一方『早川電力』は靜岡縣と山梨縣とに發電所を有し靜岡縣濱松を中心として供給地として居た。然るに『早川電力』は發電力に對し供給地狹きために過剩電力を生じ、此の過剩分の處分方法として京濱一體に侵入せんとするも競爭激甚のために侵入することが出來ず、又一方『群馬電力』は折角京濱一體に廣大なる供給地を有すると雖も電力が十分で無いといふので、發電所を求めて居た場合であつたので、こゝに『早川』と『群馬』が有無相通ずるために始めて合併することゝなつたのである。

此外『京濱電氣鐵道』『日本紙器會社』に就いては既に述べたところであり、其他の會社に至つては別に大して見るべきものは無い。又大正十四年度から開始した『共濟信託』に至つては信託業法の改正に伴ひ、信託業が漸く一般に認めらるゝやうになり、これがために銀行の定期預金が信託會社のために漸次奪はるゝの形勢であるために、各銀行は少からぬ脅威を感じ、其の結果、有力なる銀行は所謂別働隊として信託會社を設立するやうになり、先づ『三井信託』を切掛に『安田』が『共濟信託』を設立し次いで『住友』もまた同じく設置した。『安田』の『共濟信託』は『三井』のそれの如く成績十分ならずと言はれて居るが、前途は必ずしも悲觀する必要は無い。

保善社

一　組織竝に出資額及び役員

『合名會社保善社』は『安田王國』の事業の統括機關である。『三井』に『三井合名』あり、『三菱』に『三菱合名』ありて統括機關であり參謀本部であること、變りはない。貸本金三千萬圓の會社として明治四十五年に設立せられたものであるが、其の組織は二十年前から存在したものである。『安田王國』の頭首たる「故善次郎翁」「現二代目善次郎」が之に總長として一切を統括して居る。他の社長は「善次郎翁」時代は單に其名を列し各自の持分を定めたに過ぎず、殆ど「善次郎翁」の獨裁制であつたのだが、現今では合議機關制となつて居る。苟も『安田王國』に關することであれば一切の事柄、それは少くも政策を加味せられたる事業は勿論、各銀行會社の幹部級の人物の任免黜直、一として之

より出でざるものは無い。しかして現在『保善社』の制度及び其の持分は次の如くなつて居る。即ち社員といふのは十一名であつて、當主「善次郎」以下本家直系の六名を『宗家』と云ひ、「善助」以下五名を『分家』と稱して居る。

(出資額)	(氏名)	(屋號)	(續柄)
五百四十萬圓	安田善次郎	桐の舍	
四百二十萬圓	安田善四郎	柏舍	
三百萬圓	安田善五郎	梅の舍	
四百二十萬圓	安田新	松の舍	善四郎息
三百萬圓	安田抑子	竹の舍	善次郎息、故善雄跡目
二百四十萬圓	安田善衛	菊の舍	
二百四十萬圓	安田善助	葵の舍	
二百四十萬圓	安田彦太郎	糸卷舍	
一百八十萬圓	安田善兵衛	桔梗舍	
六十萬圓	安田次郎	櫻舍	故善八郎息善衛の養子
六十萬圓	安田善造	瓢舍	
計 三千萬圓			

尙ほ『保善社』の役員は左の如くである。

總長	安田善次郎	
專務理事	結城豐太郎	
理事	安田善五郎	
理事	安田善兵衛	
理事	藪田岩松	

二「保善社」本來の使命

由來『保善社』に對し世間では脫稅を目的とする會社の如く考へられて居る。それは敢て『安田』の『保善社』のみでない。『三井』にせよ、『三菱』にせよ、富豪の所謂合名會社なるものは脫稅を目的と

する會社のやうに見られて居る。事實大正九年に新所得稅法が公布せられ、法人の配當金及賞與金に對して源泉課稅をして居たのを是等を受くる個人に對して綜合課稅をなし、又法人所得稅には留保所得稅・配當所得稅・超過所得稅・乃至清算所得稅等を課せらるゝやうになるや、富豪それは必ずしも「三井」「三菱」「安田」の如き大富豪のみならず、田舍の一寸した富豪でも、所謂合法的脫稅會社を組織するやうになつた。此の合法的脫稅會社といふのは「安田」の「保善社」のやうに親族知己を以て合名會社を組織するものである。即ち富豪が個人の名義で株式を所有して居れば、第三種所得稅により其の株式の配當を個人に綜合して課稅せられるのである。然るに此の株式を會社で所有して居る形式にすれば、即ち親族知己を以て會社を組織し、一切の株式を會社で所有して居るやうにすれば、如何に多くの株式の配當があらうとも個人に綜合課稅されることは無いのである。

こゝに於て慾といふことに對しては先天的に敏感な富豪共は、競つて此の合法的脫稅會社を組織したのであつた。こゝに於て世論は此の貪慾な富豪の態度と是等の事情を豫期し得ぬ程に野呂間な政府に對して非難の聲が高かつた。殊に「安田」は平常が平常であり、それに何處よりも率先して此の脫稅會社たる「保善社」を組織したといふので、相當に批難の聲が高かつた。併し事實は「保善社」

を組織したのは、それより十年も以前の明治四十五年の事ではあり、其の二十年も以前から既に之に類したものがあつたといふことであるから、必ずしも脫稅のために此の「保善社」を組織したのではなく、偶々これが一時脫稅の機關たることを得たのであつた。そして此の機關を利用して脫稅に惡用し得たのも多分「安田」が嚆矢では無かつたと記憶する。

それは兎に角として斯く合法的脫稅機關が公然と組織せらるゝといふことは、これ明かに稅法の大缺陷であり、政府の大失態であつた譯であるから、政府は大正十二年に之が改正を行ひ、斯くの如き稅法の缺陷を補うたのであるから、其後といふものは所謂合法的脫稅會社といふものゝ存在するの餘地なく、同時にまた當初脫稅機關として設置せられた富豪の保全會社も、皆一樣に富豪が事業を統括する最高機關といふ役目をするやうになつたのである。「安田保善社」の如きは元々から脫稅の機關として設置せられたでは無かつたが、中途からは便宜のために脫稅の目的に使用せられ、後また稅法の改正に伴ひ、一般同樣今日の如く「安田王國」の最高機關といふ重要なる役目をなして居るのである。即ち中途魔道に入らんとしたが、稅法の改正に從ひ其の本來の使命に立還つたのであつた。

安田の社員

一　舊社員と新社員

『三井』の社員には三井風のタイプがあり『三菱』には三菱風がある如く、『安田』の社員にも安田タイプがある。蟋蟀が宿る草の葉色に己が羽を變へる如く、人も亦其の周圍によつて其の風彩を備へるものである。といつて『三井』の社員が全部金離れがよく『安田』の社員は全部吝嗇であるといふのではない。たゞそこに『三井』は三井なりに『安田』は安田なりに、其の服裝からも其の心持からも、或は人に接するにしても何となく、そこに多少異つたところがあると言ふのである。

しかして『安田』の社員は概して『三井』などに比ぶると其の服裝が質素である如く、其の思想も、其の態度も地味である。それは『三井』の社員は大體、中どころ以上になると一回か二回は必ず外國に行つて外國の支店で働いて居り、其の思想の如きも極めて近代化して居る。それであるから平社員の端くれに至るまでも何となく其の態度にしても其の考へ方にしても派手である。然るに一方

『安田』に至つては外國に支店を有せず其の事業は主として內地に限られ、海外に行く機會を有しないのである。其上に「善次郎翁」は人物採用の主義として社員は安い月給でも苦情をいはずに働く者に限り、社員は別に『安田』の銀行を如何しようとか事業を如何擴張しようといつたやうなことを考へないでもよい。そんなことを考へ計畫するのは自分一人であつて、他の者は自分の言ふなりに右にするとも左にするとも、たゞ命のまゝに隨ひ且つ働けば十分であるといふのであつた。

此の思想によつて養はれて來た者が現在の『安田銀行』なり會社なりの幹部級であつて、是等の幹部は『安田』に入つたが最後、『安田』から一歩他に歩み出さうなどと思つたことは無く、たゞ『安田』の中にあつて、『安田』の事業を、それからそれとやつて來たのであつた。それで世間では殊に我國今日の經濟界では所謂『三井閥』だとか『三菱閥』だとか現に『三井』や『三菱』に關係なくも、以前『三井』か『三菱』に居つたといふので、そこに自然の閥が出來て居るやうであるが、『安田閥』なるものは『安田』を一歩離れては有り得ず、所謂出身者は『安田』以外の處に於て働いて少くも頭角を現して居るものは無いのである。

斯くの如く地味な、斯くの如く引込思案の下に、『安田』の現幹部級は育つて來たのであるが、し

かし、それが平社員級若くは課長級位になると、兎に角「善次郎翁」が要求して居たやうなものとは稍趣を異にして居る。殊に『安田』が「結城」の入社によつて新組織の下に經營せられるやうになると、頻りに社員を『大學』出身若くは『高商』其他專門學校出身者を採用したので、そこに幹部級と平社員との間に思想上に於ても甚しく其趣を異にして居るのである。しかして「結城」も先代「善次郎翁」の如く唯だ働きさへすれば善いといふのでは無く、兎に角財界の中心たる『日本銀行』で育つて來たのであるから、如何に有意義に如何に經濟的、且つ有利に仕事をするかといふことを、社員の自由意志によつて決定すべく自然に要求したのであつた。それで漸く『安田』の社員にも其處に幾分の活氣を示して來たのである。

二　地味で堅實で誠意あるもの

兎に角「結城」が入社以來社員の毛色が非常に變つたことは事實である。といふのは從來『三井』『三菱』にせよ、『帝大』其他の專門學校の秀才を蒐むる事に殆ど競爭の姿であつたのに對し、獨り全然其の主義方針を異にして、全く別個の立脚から其の社員の詮衡採用をして居たものは『安田』であつた。これは「善次郎翁」の意志を織いだもので、兎も角『安田』の方針としては小僧上り、萬止むを得なければ『中學校』か『商業學校』程度の卒業生に限りて之を採用し、安田一流の養成教育を施して來たのであつた。故に當時各種の新聞紙に『安田』の人員採用の廣告を散見したものである。然るに「結城」の入社後は、必ずしも此の主義を以て金科玉條とせず、否寧ろ從來の方針を改變し、廣く教育ある者、『大學』若くは『專門學校』の出身者を採用して居るが、しかし採用方法に於ては、依然として昔と變らず、『三井』『三菱』が學校の成績順、若くは知人等の紹介によつて採用して居るのに對し、『安田』のみは、彼が傳來の方法を襲用して居る。即ち『安田』は學校の成績表といふことを大した問題とせず、地味で、堅實で、しかも誠意あることが第一の條件となるといふのである。此の方針で採用せられた社員であるから、以て『安田』の社員の氣風を知ることが出來るのである。

安田の資産

一　三井三菱との比較

『安田』の財産は、どれだけ有るだらうか。千里眼ぢやあるまいし人のポケットの中が有體に分るものでは無く、いくらあると言つても、それは極めて大ざつぱなものに過ぎない。しかし四五億ぢや無いかといふのが大體の觀であるが　四億と五億とは一億からの相違あり、其の根據の大まかなところは知ることが出來るが、恐らく『安田』自身でも、今の財産がどれ位あるかは正確に知り得ないであらう、富豪の財産といふものは、それくらゐ大ざつぱなものであるが、世間では、『三井』『三菱』及び『安田』の財産を比較するに當り、其の最高機關である『三井合名』乃至『三菱合名』等を標準として居るやうである。即ち『三井合名』の二億圓に對して、『三菱』は一億二千萬圓、『安田』の『保善社』は三千萬圓であるから、押して知ることが出來るといふものがあるが、必ずしも之は全體の標準では無い。

二　純財産三億數千萬圓

『三井』の財産が『三井合名』に依つて全體を代表して居るもので無い如く、『安田』の『保善社』は『安田』の財産の全體を統括して居るものでは無い。たゞしかし此の『保善社』が、『安田』の財産の少くも大部分を統括して居ることは勿論であつて、然らば『保善社』の統括する財産額幾何であるかといふに、大體に於て株式投資額が一億五十萬圓、會社債所有額が七千萬圓、土地三千萬圓、貸付額が五千萬圓、其他を併せ三億五六千萬圓と見られて居る。しかし此の三億五六千萬圓が『安田』の全財産ではない。此中から負債を差引かねばならぬが、此の負債額が幾何あるか、これは更に正確に知ることは困難であるが、大體に於て『安田』は負債といふものは少いであらう。しかし貸金の中に滯貸や回收殆ど困難なものも相當にあるから、これは資産勘定から當然切捨てねばならぬから、是等や回收困難なもの等を切捨つれば、差引『安田』の純財産は三億圓乃至三億二三千萬圓程度ではないかと見られて居る。

日本の富豪番付からすれば、第一位は何といつても『三菱』であつて、次位が『三井』となり『安田』は第三位程度であらう。

今から六十餘年前、「善次郎翁」が「岩次郎」といつた時、年齢僅に十七歳の小僧が、一兩足らずの錢を持つて上京したのが、六十年後の今日に於ては、積り積つて、それが三億餘圓の巨富を積まうとは、何人と雖も算盤の上からは考へられないやうである。しかして斯くの如き巨富を積んだ、

其の手段や方法の如何は兎も角として、人間生活に於ける一の驚異であらねばならぬ。

慈善事業

一　寄附嫌ひな善次郎翁

「安田」は一厘から一厘を生むために、苟も金が金を生まざる以上は、一厘の金をも無駄にしないといふのが、今日三億圓からの巨富を積んだ所以であつて、利殖といふことには天禀の才を有し、それは恰も「秀吉」が微賤なる一百姓の子から天下を掌握した如く、彼も亦一微賤よりして巨億の富を握り、「秀吉」とは、たゞ亂と治との時代に於ける差異に過ぎずとまで彼は自惚れて居たのであつた。

しかして彼は如何なる場合にも金を生命とし、金に比ぶれば世の所謂地位も名譽も兒戯に等しく、「恩賜濟世會」創立の時、世の富豪は百萬圓を投じて、華族の榮爵を得て、無上の光榮として喜んだものであるが、彼は華族などは子供だましに等しいのであると言つて、見向きもしなかつた。それ

ほど彼は金錢に對し徹底した考へを有して居たのであるから、世の所謂慈善事業に對しても容易なことでは見向きもしなかつた。「濟生會」の例もさうだが、また「芝協調會館」を設立するに當り「澁澤老」は彼に寄附を要求した。其時彼は、

「そんな俗受のするやうな寄附は御免だ、眞の社會事業ならば寄附しよう」

と言つて拒絶した。「澁澤」は今以て彼の所謂眞の社會事業の意味が分らぬ。苟も巨富の資產を有する以上は、それが眞の社會事業でなくとも、少くも社會事業の一端をなすものであれば、寄附しても善ささうなものだと思つて居る。其の寄附金は、よし十萬、五十萬にしたところが、彼の財產からすれば僅なものだ。其僅な金で社會事業の一端が遂げらるれば善ささうなものだ。世に一事業で以て、眞に徹底した社會事業といふものは遂げられるものでは無いと其時「澁澤」は思つた。

慈善事業に對しては、兎に角こんな考へであるが、それなれば全然是等の寄附はしなかつたかと云ふに、必ずしも左樣では無い。翁が兜刄に斃れるまでに寄附した額は左の如くである。

一、一　萬　圓　明治三十九年「幾兵院」へ
一、十　萬　圓　明治三十九年「幾兵報効會」へ

一、三萬圓　明治四十年『東京慈惠會』へ、外に『慈惠病院』に安田病床三十個寄付し、其の病床使用の患者の費用負擔

一、一萬圓　明治四十二年『早稻田大學』へ

一、三十萬圓　明治四十四年『財團法人濟生會』へ

一、十萬圓　大正三年『慶應義塾』へ

一、六萬圓　大正三年『富山縣立工業學校建築資金』へ

一、五萬圓　大正五年『帝國大學印度哲學講座設置』へ

一、一萬圓　大正五年『美術協會』へ

一、三萬圓　大正五年『帝國飛行協會』へ

一、三萬二千圓　大正五年『聯合軍恩典品』へ

一、六萬圓　大正八年『東京殖民貿易學校』へ

一、一萬圓　大正九年『勞働奬勵會』へ

一、三百萬圓　大正十年『安田修德會基本金』、これは財團法人として慈善事業を目的とし「武井守正男」理事長たり

一、三萬圓　大正十年『帝大佛教青年會館』へ

一、一萬圓　大正十年『乃木神社建築費』へ

一、二萬圓　大正十年『商工奬勵會館建設費』へ

一、二萬圓　大正十一年『芝增上寺』へ

一、三萬圓　大正十一年『本所區奬學資金』として

一、三百萬圓　大正十一年『東京市市政調査會設置』のため「後藤市長」宛（殘後實行）

大體以上の如くであるが、面白いことは「善次郎翁」が寄附行爲を始めたのは明治三十九年からであつて、それまでは之といつて目立つた寄附もなく、即ち此頃から彼も漸く老齡に達し、佛心を起したものと云はなければならぬ。しかして彼が歿するまでの寄附總額を勘定して見れば、合計六百九十一萬圓である。彼の歿後『安田保善社』は大震災寄附三百萬圓及び本所横網町地面五千坪を公園敷地として（價額三百五十萬圓）寄附した。

これを「善次郎翁」と同じ境遇を有し、同じく一代の富豪となつた「大倉喜八郎翁」の寄附行爲に比

較して見よう。しかも「喜八郎翁」の富と「善次郎翁」の富とは比較にならぬ程の相違があることは前以て斷つて置く。

一、『財團法人大倉集古館』の寄附、これは人も知る如く我國の美術の粹を蒐めたもの、敷地麻布奚町四千八百二十五坪、陳列館二千五十坪、維持基金五十萬圓

一、『財團法人大倉高等商業學校』『大阪大倉商業學校』『同善隣商業學校』基金初め五十萬圓、後五十五萬圓

一、『濟生會』百萬圓寄附

一、『神戸大倉山公園』寄附、時價四五百萬圓

等を主要なるものとして、其他の寄附行爲を合算すれば、實に二千餘萬圓に達するのである。これを「善次郎翁」の富と、其の寄附行爲とに比較して見れば思ひ半ばに過ぐるであらう。

二「市政調査會」へ三百萬圓

しかし翁の晩年を飾るものとして、少くも有意義なものは、『市政調査會』に對する三百萬圓の寄

附行爲であつた。たゞ之を託せられた「後藤新平」が、徒らに自分の子分の養成所たらしめ、翁の眞の意志を繼承いで居ないことを憾みとする。尤も現在『市政調査會』は此の三百萬圓を基金とし、之より生ずる一ケ年の利子二十餘萬圓を以て、都市行政に關する調査をなしつゝあり、震災後には米國の都市學者ビアード博士を招聘して、震災後の復興都市計畫を行ひ、「後藤子」が內務大臣たりし時これが復興に關する進言等を爲したと言はれて居るが、未だ『東京市役所』の一調査課たるの觀あり、都市問題に對する一權威たるまでは達しない。之よりも寧ろ『大阪市役所』の都市行政の研究が、より權威あるものゝやうである。

同調査會では當初の豫定通り、此の三百萬圓を以て日比谷公園の南東に當り、『市政調査會館』なるものを設置し、都市研究其の他市民の集會所に公開し、階上は貸事務所とし、之より生ずる利益を以て、今後都市行政の研究を續くるといふが、さうなれば始めて「安田翁」の意志も漸く繼承せられ、或は翁の晩年を幾分にても償ひ得るといふものである。

三井王國の解剖

一 三井家の祖先

三井の起源

日本三大財閥の一なる『三井』が富を成した徑路は、『岩崎』『安田』と大いに趣を異にするものがある。『安田』は初代「善次郎翁」が一代にして巨富を築き、當主「善次郎」は二代目の世嗣ぎであり、『岩崎』は「彌太郎」「彌之助」「小彌太」(當主)の三代しか經て居らぬ成り上りものであるのに對し、『三井』の鼻祖「長宗」は、近衛家と流れを同じうする北家御堂關白「藤原道長」の四男で、其の五代の孫、「右馬助信生」が大和の國三井村を領して、こゝに初めて『三井』の姓を冒した。そして十五代「成定」に嗣子が無かつたため、近江源氏に屬する「佐々木六郎高久」を養子として迎へ、爾來『丸三』の家紋を改めて、『四つ目』にし、子孫の命名に『高』の一字を附するやうになつた。「高久」は近江國鯰江に一城を築いたが、「高久」の嫡男「高俊」は、居城を捨てゝ伊勢の松坂に移り住み、はじめて商

賈の列に加はり、幾多の波瀾を經て今日に至つたといふ極めて舊い歴史を持つて居る。歴史が舊いだけに起伏の跡の甚しいことは、恰も世界の興亡史を讀むが如くで、幾度か倒壊の危機に瀕しながら、巧みに難關を突破し、遂に不拔の基礎を築いたのは偉とすべきである。

二 江戸から東京へ

江戸へ出てからは日本橋駿河町で兩替と呉服店とを開いた。これが今の『三井銀行』や『三越呉服店』の創まりである。其頃、主人「高福」は京都に常住し、江戸の店は大番頭の「齋藤純造」が總轄して居た。兩替店の方は常に幕府の御用金調達の役を勤めて居たが、幕府の末期に際し、財政極度に窮乏のため、同店に對し突如として金五十萬兩の現金を十日以内に上納すべく、嚴命されたことがある。それが今日であれば、『大三井』から視て、鼻糞ほどにしか扱はれぬであらう五十萬兩の金も、當時に於ては石臼を擔いだ猿にも比すべき重い負擔で、之を拒絶せんか幕府の怨みを買ひ、強いて調達せんか倒産の悲運に陥るの外は無いので一大狼狽を極めたが、不思議にも外間より「三野村利左衛門」なる傑物が現れ、其の奇才に依りて「小栗上野介」を説服し、前の命令を撤回せしめて

危機を脱することが出來た。「利左衛門」は此の殊勲に依り、迎へられて『三井』の最高幹部に列することになつた。

幕府が『三井』に對する無法の誅求は、これで沙汰止みになつたが、次いで朝廷から金穀出納所の御用達を申し付けるとの命令を受けた。これは『三井』が長らく幕府と共に裏の御兩替方、即ち金融方を勤めて來た關係からで、一面から見れば光榮のことではあるが、時恰も幕末、勤王・佐幕の論喧しき際で、此時に當り『三井』が朝廷に忠勤を抽んずることは、幕府に刃を向けることであり、さりとて幕府に左袒せんか朝廷を蔑にすることになつて、其の去就向背は延いて『三井』百年の運命を決すべき岐路となるのであつたが、「利左衛門」の明智は能く大勢を達觀して、勤王に『三井』を導き萬難を排して金穀出納所御用達を引受くるの擧に出でしめた。當時勢力微弱にして財政枯渇した朝廷は、『三井』の後楯に依つて辛うじて討幕の軍を擧げ、鳥羽伏見の戰に際し、軍餉に遺漏なきを得、また其後の形勢も有利に展開することが出來たのである。軍費の殆ど全部を雙肩に擔つた『三井』の負擔と責任の重大なるはさることながら、一面、軍需品の供給に依りて得たる利益も亦莫大なるものであつた。『三井』が始めて政商の味ひを占めたのは此時であり、富の礎を築いたのも亦此

の秋である。

此の勢ひに乘じ「利左衛門」は、當時『三井』に次いで財界に重きを成して居た『小野組』と『島田組』とを語らひ、三者連署で、時の政府の『會計局』を一手に引受ける建議書を其筋に提出した。『會計局』といふのは明治維新匆々の際、政府の金穀出納事務を取扱つて居た役所で、即ち『大藏省』の前身である。『大藏省』の國庫事務を私人の手に收めようといふのも亂暴の話だが、其の建議が聞き屆けられて、國庫事務を三私人の手に委ねるに至つたことも驚くべき出來事と云はねばなるまい。其の結果、彼等は、國庫に收まるべき巨額の現金を全然無利子にて保管し、且つ之を運用することに依つて、さん〳〵甘い汁を吸ふことが出來た。

此の「利左衛門」に子供が無く、大番頭「齋藤」の世話で、これも『三井』の小僧上りの「利助」を養子に迎へたが後年『三井銀行』の副長となつて手腕を揮ひ、また『三井』を代表して『日本銀行』の理事となつたのも此の「三野村利助」である。

初代の傑物三野村利左衛門

一　政商として活舞臺に立つまで

「三野村利左衛門」は現代で云へば、『鈴木商店』の「金子直吉」のやうな男であつた。「金子」は政府の要路に取入つて、『臺灣銀行』から三億五千萬圓といふ大金を引出して喰ひ潰したやうに「利左衛門」も亦一旦政商で味を占めてから、虎視耽々として政府のお臺所をつけ狙ふことを怠らなかつた。大きな金儲けは大きな所に在る。國家で一番大きなものは政府だから、此の政府に貪縁附託して利を漁るのが大きな金儲けの近道であると彼は悟つたのである。掃溜を漁る犬に大きな獲物の有り得よう筈が無い。これは古今を通じて誤らざる眞理だ。

世は早くも移つて時の大藏大輔には「井上馨」が坐して居た。「馨」の愛妾に「安子の方」があつた。これぞ「利左衛門」の下心ある贈り物であつたのだ。「井上」は兵燹既に收つたとはいへ、四民未だ其緒に安んぜざる狀態に鑑み、太政官紙幣五千五百萬圓を發行し、財政の運用に資すると共に、資金を民間に貸付けて、商工業の振興を計るため「商法司」なるものを設けたが、其の重要なる實務に關る役人は、「井上」のお聲がかりで『三井家』より多く選拔された。斯くて國家の財政を運用する鍵は

一私人たる『三井』の手に完全に把握されてしまつた。

商法司心得書中に、

「爲替會社を建てしむるは、各國バンクの法に倣ひて金銀融通自在ならしむるなり」

といふ條項のあつたのに基き、『三井組バンク』なるものが新に組織されたが、これも「利左衛門」の創案であつた。之に倣つて東京に『小野組バンク』、鳥取縣に『融通會社』、滋賀縣に『江州會社』等が起り、何れも當時の金融機關として、我が財界を利する所が多かつた。

これまで『三井』は呉服店を主とし、爲替店を從として居たが、此頃から位置を顚倒させ、爲替店を主として主任に「三井八郎右衛門」を据ゑ、呉服店を從として「得右衛門」を其の主宰者としたのも彼の英斷に出でたものである。

時の陸軍卿「山縣有朋」の岳父に「石川良平」といふ者があつた。元より有能の士では無いが、彼はこれを迎へて、『三井』の重要なる椅子を與へ、それを連鎖として「山縣」を藥籠中の者とすることが出來た。明治五年十一月國立銀行條令が發布され『東京第一國立銀行』は『三井』『小野』『島田』等の財界の巨頭連を中心として設立されたが、其の營業成績香しからず、殊に『三井』『小野』『島田』等

が、いはゆる爲替方として政府の國庫金を無利子にて保管し、これを鑛山・生糸・米穀等の投機事業に投資することに對して非難が起り、俄に『大藏省』より委託金の返還を命ぜられたが、之は恰も銀行が取付けに逢つたやうなもので、固定させた巨額の資金が卽座に現金化しよう筈なく、一時は『三井』を凌ぐ勢ひのあつた『小野組』も『島田組』も一たまりも無く倒產してしまつた。

併し『三井』だけは、事前に「山縣」から政府の機密を漏聞したので、應急策として當時著しく値下りのして居た公債を大あわてで四方八方より搔き集め、之を金庫に備へ付けて、巧みに檢査員の眼を晦まし、國庫金流用の汚名を免れたばかりか、國庫金は額面以下で買入れた公債を額面に計算して返還したから驚くべき巨利を獲得した。剩へ間もなく國庫金保管の特典を取戻すことが出來たから、結局、此の騷動に依つて他の競爭者を打倒し、自分獨りで漁夫の利を占めたことになつた。若し當時「山縣」や「井上」が政府の要路に居て、糸を引くことが無かつたなら『三井』も亦『小野』『島田』と同一の運命を辿つたことは想像に難くない。『三井』が今日あるまでには幾度か斯樣な危い橋を渡つて來たのである。

二 三井銀行の創立

政府が折角力を盡した『國立銀行』の成績は、意外に不良であつた。これは一に國立銀行條令に不備の點がある爲めだとの議が起り、明治九年八月「澁澤榮一」は時の貨幣頭「得能良助」と凝議の上、條令改正の草案を作成し、閣議を通過して直ちに發布されたが、此の改正條令の發布に依つて、一旦頓挫した『國立銀行』は忽ち生氣を吹き返し、逐月新設に亞ぐに新設を以てし、同十一年までに百五十三行の創立を見るに至つた。

此の機運を視て取つた『三井』は、長い歷史を有する組織を改めて、玆に我國に於ける私立銀行の鼻祖として『三井銀行』が現れた。當時の役員は、總長「三井八郎右衞門」、副長「三野村利左衞門」、大阪支店長「西村虎四郎」其下に「齋藤純迅」「今井友五郎」「中井三平」等いふ顔觸れが竝べられた。そして「山縣」の岳父「石川良平」が別に重要な地位に就いたことは、事新しく說明するまでも無い。

斯くの如くにして『三井家』の柱石の臣「三野村利左衞門」は數へ切れぬほどの多くの偉勳を貽して此世を終つた。時に明治十年二月十一日である。

幾度か危機に瀕す

一　内憂外患一時に起る

「利左衛門」の死に依つて缺員となつた副長の椅子は、嗣子の「利助」が襲ひ、「利助」の後任には大阪支店長の「西村虎四郎」が榮轉し、人事關係は何の苦も無く治つたが、實は其頃から「三井」の内輪が大分苦しくなりかけて居た。といふのは、政商たる弱味のため、官邊大官連に對する回收不能の貸金が五百萬圓といふ巨額に達したことと、また一は同十五年『日本銀行』の開業と共に今まで無利子で利用することの出來た國庫金を取上げられたこと等が主なる原因であつた。而も内に「利左衛門」の如き手腕家無く、無爲無策、たゞ戰々兢々として彌縫糊塗を事とし、荏苒日を送るうちに何時の間にか『三井』の大黒柱は搖つき出したのであつた。

兎角するうちに明治十九年となり、其年の一月一日より政府紙幣は正貨と交換されることとなつたので、通貨の價格も安定し、商況は回復すると共に、民間の事業は勃興し、翌二十年に至つて

正に白熱的狀態を呈したが、果然、同二十三年反動的恐慌を捲き起し、此の時既に龜裂の入つて居た『三井』は内憂外患を一時に受けて、水雷を食つた艦艇も同樣、あはれ覆滅の外なき狀態となつたのである。

「三井銀行」の大元締「石川良平」が、憂ひに沈んだ顏を頻々と愛嬢たる「山縣」の前に現したのも此時であれば、銀行副長「西村虎四郎」が愴惶として「井上馨」の私邸にお百度を踏んだのも此頃のことである。「利左衛門」の死後『三井』に對する官邊の守護神は「山縣」が主で、「井上」は從になつて居たが、用心深い「山縣」は、『三井』の危急を聞いて自ら其の渦中に投ずることを避け、世話好きな「井上」を說き伏せて後見役に祭りあげ、『三井家』整理の衝に當らしめることになつた。其の條件として、三井十一家連署の上、一旦、三井家整理の全權を侯に一任した以上、如何なる場合にも絶對に容喙せぬとの一札を差入れたのであつた。

斯樣にして「井上」は、いよ〳〵三井整理の全責任を雙肩に擔つたが、さて其の内部に立入つて檢べて見て驚いたのは、意外にも窮厄の度が甚しいことであつた。『三井銀行』設立當時二百萬圓と云はれて居た資本金も、實際は六十萬圓内外の融通力しか無く、それでも巧みに表面を糊塗して、ボ

口を出さずにやつて來ることの出來たのは、主として八百萬圓乃至一千萬圓の國庫金を無利子で運轉することが出來たためである。それだけに國庫金を取上げられ、剩へ財界の一大恐慌に出喰した『三井』の窮狀は言語に絶するものがあつた。政府の大官連に對する不良貸付金五百萬圓だけでも『三井』を倒産せしむるには充分であつた。斯うした內情が明白になつた時、流石の「井上」も困惑したが、さりとて仰々しく引受けた整理を今更ら斷ることは體面上出來ず、心祕かに肝膽を碎いたものであつた。

二　三井銀行の大整理

其頃、「中上川彥次郎」は『山陽鐵道會社長』として、彼獨特の快腕を揮つて居た。彼は「井上」の外務卿時代に其の知遇を受け外務書記官として醜下に働いて居たことがある。『山陽鐵道』では、あまり腕が利き過ぎて一部株主の反對を招き、嫌氣がさして居た矢先き、舊親分の「井上」が『三井』の後見役になつたと聞いて、逸早く「井上」に取入り、『山陽鐵道』社長の椅子を捨てゝ『三井家』の人となつた。

『三井』入社後の彼は『三井銀行』副長、『三井鑛山會社』理事、『三井物產會社』理事、『三井呉服店』調査委員、『三井元方』參事等の要職を兼任して、瀕死の『三井』に對し起死回生の大手術を施さんとしたのである。

彼は『三井家』の心臟は『三井銀行』であると觀た。大手術の成績が、心臟の强弱に依つて支配されることが多い如く、『三井』の根本的改革は先づ以て『三井銀行』を健全にしてからで成ければならぬと悟つた。其處には『三井』の死命を制する程の大きな缺陷が幾つも轉がつて居た。

そのうちで難件中の難件と目されたのは『東本願寺』に對する無擔保貸百萬圓、『第三十三銀行』の倒產に依つて生じた回收不能の貸金百萬圓、竝に『日本銀行』から矢の催促を受けて居る二百萬圓の手形拂戾の三件であつた。彼は先づ此の癌症を取除くために苦心を拂つた。事業は人に在ることを知つた彼は、配下を物色して見たが、當時の『三井』は「益田孝」「高橋義雄」等少數の士を除いては他は多く前垂掛の番頭連で、人材に缺けて居た。番頭相手で斯程の荒療治を成し遂げ得られよう筈が無い。其處で彼は思ひ切つて一齊に番頭連を淘汰し、之に代ふるに新進氣鋭の士を以てした。當時、彼の招きに應じて傘下に馳せ參じたものは、「藤山雷太」「武藤山治」「和田豐治」「鈴

木梅四郎」「小野友次郎」「波多野承五郎」「村上定」「矢田績」「朝吹英二」「西松喬」「津田興二」「日比翁助」「平賀敏」「伊澤良立」「岩本述太郎」等一騎當千の士で、何れも福澤門下の新進であつた。

第一に『東本願寺』征伐の使者として白羽の矢を立てられたのは「村上定」であつた。「村上」は新聞記者上りで、其の波瀾ある半生の閲歴は、此の重任を果すのに充分だと見込まれたからだ。併し「村上」もさるもの、瀬踏みの役を京都支店長「小野文次郎」に申し付けた。ところで人間も非常の場合には特別の力が出るものと見え、かなり氣支はれて居た『東本願寺』征伐も案じた程のことは無く、「小野」の手で綺麗に片が付いた。即ち同寺から枳殻殿を擔保として登記すること、一年後に若し元利金を皆濟せぬ場合には差押への上競賣處分を受けても異議が無いといふ法主直筆の覺書一札を銀行に差入れて折合が付いたのだ。此の百萬圓は末寺門徒の同情金で期限内に滞り無く完濟し、『三井』の一つの癌を除くことの出來たのは大手柄と言はねばならぬ。

「小野」が懸命に揮つた辣腕は、「村上」に取つての第一回の試金石とも云ふべき好問題を一擧にして解決し終せたが、彼の前には更に第二の難問題が待ち設けて居た。それは『第三十三銀行』に

對する百萬圓の不良貸事件である。事の起りは同銀行の前橋支店にあつた。其頃上州前橋に『上毛繭絲改良會社』があつて、二百萬圓の借款を同支店に申込み、同行が保證の地位に立つて『横濱正金』と『三井』とで半分づつ借出し『上毛繭絲』へ融通した。ところで同行は明治二十三年の財界恐慌の煽りを喰ひ、眞先に破産したため、『三井』の百萬圓も回收不能に歸したのだ。此の難件解決の重任を引受けた「村上」は、嘗て『下野新聞』の主筆を勤め同地方の地理人情に通じて居るのを幸ひ、夜陰に乘じ變裝して前橋に乘り込み、事情を調べて見ると、裏に融通した金は『上毛繭絲』の手から同地方の農民に轉貸してあるが、其の抵當として土地が提供され、其の土地は以前『上毛繭絲』の社長で此の地方きつての名望家「星野長太郎」の名義に書き換へられてあることから、同銀行支店長の背任行爲の數々までが瞭かになつた。そこで「村上」は先づ同支店長に面會して背任行爲を正面から攻撃して彼の肺腑を抉り、虚に乘じて『三井』の百萬圓事件を持ち出し解決を迫つたが、支店長は後闇い所があるばかりに、否應なしに「星野」名義の土地を全部取上げられ、「村上」は其の土地を轉賣して金に代へ凱歌を奏した。此の土地の賣上價格ざつと百萬圓、これで『三井』の二つ目の癌も除いてしまつた『村上』の腕前は決して凡庸では無い。

いま一つの『日本銀行』の二百萬圓事件といふのは、某大實業家が振出した二百萬圓の手形に對し、某大官の口添へで『三井銀行』が裏書し、『日本銀行』へ入れてあつた。ところで期日に振出人が支拂はぬため責任が『三井』に歸し、『日本銀行』の追求を受けて居たもので難件中の最大難件であつたが、これは「村上」の地方出張中、「中上川」自身共の衝に當つて案外遣作なく『日銀』當局を屈服せしめ、二百萬圓の大責任を鐚一文も拂はずに免れてしまつたのは、流石は親分格の大手腕である。

工業界躍進

一「中上川彦次郎」の辣腕

「中上川」は、これを動機として一切官邊と絶縁し、御用金の調達を刎付ける策を取つた。之に關聯して京都滯在中の「伊藤博文公」が大枚五百圓の借款を『三井』の京都支店に申込み、美事に刎付けられて赤恥を曝したといふ椿事もあつた。

併し死にかけた貧金を生かしたり、官邊の惡因緣を絶つたりする消極的の仕事のみが「中上川」の

得意とする場面では無い。彼の本領は寧ろ快刀亂麻を斷つて、新天地を切り拓く積極的勇猛心に在つた。果然、彼は得意の第一歩を踏み出すべく身構へた。

當時『芝浦製作所』は「田中久重」が經營して居たが、事業振はず、資金に窮し、工場全部を擔保に供し『三井銀行』から、かなり巨額の借金をして居た。「中上川」の食指は先づ此の『芝浦製作所』に向つて動いた。と云ふのは既に銀行の整理も一段落がつき、今後の『三井』の發展は工業方面に活路を求めるより外に道が無かつたからだ。

「藤山雷太」は「中上川」の內命を啣んで、私かに『芝浦製作所』の內容調査に着手した。而かも報告書を三日以內に提出すべき旨の嚴命が附隨して居た。「藤山」は其の使命を完うした。其の報告書には資金豐にして、經營法宜しきを得れば、前途有望であるとの結論が下されてあつた。

「田中」が『三井』から融通して貰つた手形の期限が來た。平生は利息だけ入れて書き換へが出來たが、此時ばかりは頑弱に元金の返濟を迫られ、調達が出來ぬため、工場を『三井』に讓り渡すべく餘儀なくされた、斯くて我が電機工業界の覇者たる『株式會社芝浦製作所』は金權『三井』の掌握するところとなつた。

既に工業界に巨手の一端を觸れた「中上川」は、次いで我國貿易品中の大宗たる製糸業に着眼して『富岡製糸所』を政府より拂下げ、前橋舊藩主の創立せる『前橋紡績所』を買收し、同時に三重・大島・四日市・名古屋に製糸所を創立し、以前から持つて居た『新町紡績所』『大濤製糸所』と併せて、我が製糸界を縱斷せんとする大計畫を立てた。それと共に『三井銀行』内に新に工業部なる一局が設けられ、「中上川」自身其の采配を揮つた。

二　會社乘取りに成功

さうした時に、最も強く「中上川」を衝動したは、夫の『鐘淵紡績株式會社』であつた。同社の創立者は製革界の功勞者「北岡文平」で、當時業績不振の極に在つたとはいへ、しかも其の規模の雄大なる設備の完備せる、鐵中の錚々たるものであつた。

「中上川」は乘取りの策として株式の買占に着手した。其のために今まで底値にあつた同社株式の市價が俄に値を吹き出したことに世人の興味を唆つた。やがて定時株主總會の時が來た。總會の席上、無名の一青年株主が立つて、滔々として經營上の缺陷を論詰し、所論微に入り細を穿ち、一

一適確なる例證を擧げて罪を重役の失態に歸し、猛烈に引責辭職を迫つた。此の疑問の一青年こそは慶應義塾卒業後、姑く『三菱』に勤めて居たが、後獨立して生糸貿易を營み、百萬圓の大穴を開けて窮乏のどん底に陷り、到底再起の望み無しと見られて居た「朝吹英二」其人であつた。彼は義塾の先輩「中上川」の同情に依つて救ひ出され、其の恩人の密旨を受けて『鐘紡』乘取の謀士となり、現重役內閣顚覆の野望を遂げんと策動しつゝあつたのだ。

「朝吹」は再び起つて、現重役の引責辭職を動議として提出し、採決の結果、過半數以上にて通過し、內閣は到頭崩壞した。新に組織された內閣は「中上川」を取締役社長に戴き、「朝吹」を專務取締役、「和田豐治」を取締役兼支配人とし、たゞ政策上舊重役の二三を伴食的に連ねた純然たる三井系の天下になつた。今の同社取締役社長で、政界にまで活躍して居る「武藤山治」が、當時まだ漸く同社兵庫縣分工場長に過ぎなかつたのも面白い。

「中上川」の天下となると共に、彼の平素の持論である職工優遇の道が極度に開かれた。そしてかために同業者の嫉視を被り、幾度か手酷い抗議を受けた。同業者が結束して『鐘紡』に對する實戰の布告文を全國の各新聞紙に廣告したこと、『鐘紡』がこれに應戰して『三井銀行』の本支店に命じて反對

會社並に其の關係者に對し貸出し拒絶を斷行したことなどもあつた。併し、あれも一時、これも一時、さしも業績不振のため前途を危まれた「鐘紡」は、「三井」の手に歸してからメキ〳〵面目を改め、啻に斯界のみならず事業會社中の花形と謳はれるやうになつた。

當時、「中上川」の得意は絶頂に達した。そして直ちに第二の鐘紡たるべきものが物色された。此の遣り方は一寸「安田」のそれに似て居るものがある。それは兎に角、既に「王子製紙株式會社」であつた。此の會社も亦、甘々と「三井」に乘取られてしまつた。そして「藤山」が當面の經營者となり、鋭意事業の改良刷新を計つたが、如何したものか此方は巧く行かず、藻掻けば藻掻くほど窮境の深みに落込むばかりで、到頭「藤山」は匙を投げ出し、斯くて「鈴木梅四郎」が「藤山」に代り「藤原銀次郎」が「鈴木」に代つて、今日の盛況を見るまでには、かなり長い年月を要した。

次いで手に入れたものに「三池炭鑛」がある。同炭鑛は舊三池藩の所有であつたものを政府で買上げ、三百五十萬圓の巨資を注ぎ込んだが物にならず、四百五十五萬五千圓で「三井」が買ひ取つたものである。それが「三井」の手に移つてから、業績大いに見るべきものがあるやうになつた。

「九州紡績」は「三井」の勸奬で成立し「三井」の援助に依つて發展した「三井」の子會社である。時

の社長は後に政界の大立物となつた「野田卯太郎」であつた。「野田」は此の時代に會社の手で綿糸の大買占を行ひ、五十萬圓の儲手を負うて引責辭職し、懊惱煩悶の極、人生を悲觀して參禪したといふ逸話を殘して居る。

「中上川」「益田」の暗闘

一 「益田」と「井上」との關係

斯樣にして「中上川」の威望が全三井を壓した時、これに對して心私に不平を懷いて居たものに「益田孝」があつた。「益田」は當時「三井物産會社」長、「鑛業部」專務理事といふ重要の地位にあつた。「益田」は隱忍性に富んだ男で、「中上川」の專横を見て見ぬ振りをなし、久しく忍んで來たのであるが、あまりの增長振りに堪り兼ねたと見え、最高顧問の「井上」に悶々の情を愬へ、「井上」の力に依つて「中上川」の横暴を抑へ付けようとした。「益田」は「井上」が野に下つて「先收會社」を興した時、副社長となり、親分子分の誼を結んだ。「井上」が再び官途に就くと共に「先收會社」を「益田」

ぐるみ『三井物産』に合併し、「益田」の『三井』入りとなつた。斯うした因縁で「井上」と「益田」との間には斷つべからざる連鎖があつた。「井上」が「益田」の苦衷を聞いて動かされたのは、當然の歸結である。

二　二六新報の三井攻撃

時恰も『二六新報』の三井攻撃事件なるものが起つた。『二六』の三井攻撃は痛烈を極め、波紋は竟に『三井銀行』に及ぼし、同行の有力なる預金者であつた『日本赤十字社』が、突然二百萬圓の預金を引出して、『十五銀行』に預け替へをしたことから、同行の取付け騒ぎまで引起し一時同行の危殆が傳へられた。併し幸ひ難關は切抜け得たものゝ、之がために『三井』の威信は全く地に墜ち、家名までも傷つけた。といふのは此の和解成立に當り『二六』をして、『三井家』の家憲にまで干渉を加へしむるの大失態を招いたことである。

此の『三井』の失態、不面目は、取も直さず當時の總理大臣たる「中上川」の責任であらねばならぬ。流石に威勢赫ぶものなかつた「中上川」も懊惱の極、病を發し、湘南に病軀を横へるもの幾月、

遂に病床の裡に「井上雷公」から辭職を迫られ、悶々として世を終つたのは悲劇であつた。時に明治三十四年十月七日である。

物産の純益八百萬圓

一　早川千吉郎の手腕

『三井』の巨星「中上川」は、斯くして世を去つたけれども、多年培養し來つた麾下は『三井』の王國内に蟠踞して牢として拔くべからざる潛勢力があつた。之と對峙したのは『三井同族會』理事から一躍して『三井銀行』專務理事となつた「早川千吉郎」であつた。此の兩勢力の對陣は恰も支那の南北兩軍の如く、動もすれば軋轢暗鬪の虞れがあつたので、社長は之を憂へ、「朝吹英二」を召して調和劑の役目に就かしめた。併し「早川」は多年官海游泳の術に長けた老練家、一時險惡に見えた舊中上川系の殘黨も彼の懐柔慰撫に依つて事なきを得たのは幸ひであつた。

併し、それよりも見逃すことの出來ぬのは「益田」一派の擡頭であつた。「益田孝」を主班とする『三

井物産」の業績は年毎に異常の發展を遂げ、「三井」の總利益の七割は「物産」の手に依りて生み出され、殘餘の二割が「銀行」、一割が「鑛山」から生み出された。從つて「物産」の鼻息が日毎に荒くなつて行くのは當然の勢ひであるのに、一方には眼の上の瘤であつた「中上川」が死んでしまつたので、「益田」の聲望は日に重きを加へ、搗て〻加へて親分たる「井上」の庇護も厚く、全三井の實權は何時の間にか彼「益田」の物になつたのも時世時節と云ふべしだ。

二　日露戰爭時代の暴富

やがて日露戰爭となつた。「三井」は日清戰爭でも隨分大金儲けをしたが、日露戰爭は日清の役とは比べものにならぬ程の大規模であつただけ、彼が之に依つて儲けた金も亦世人が想像の出來ぬ程に大きな物であつた。たとへば軍艦で使用するカーヂフ炭・軍馬・大砲・彈藥・食料品を初め無數の軍需品を納めたことに依つて、思ふさま懐を肥らせた。恐らく「三井」の富の幾割かは戰爭に依つて獲得したと見ても間違ひはあるまい。

併し商戰場裡にも一勝一敗、一伸一退は免れぬもの、儲けた半面に犧牲も少くは無かつた。「三

井」は嘗て北海道の木材の買占を行つた。其の買付け金額は七百萬圓にも達した。所でこれを鐵道の枕木に賣込まうとした目算が外れ、差引き二百萬圓といふちつぽけならざるお灸を据ゑられたことがある。また北米の大市場に對し、日本製花莚の輸出を企て〻多數同業者を向ふに廻して火花を散らして戰つたが、商戰利あらず、此時も二三百萬圓の大損耗を招いた筈だ。

次は羽二重市場へ乘り出して、これも亦手を燒いた。それは横濱の輸出貿易商「忽那商店」と握手し、當時斯界に大勢力のあつた「野澤組」壓倒の計を運らしたのであるが、多年賣り込んだ地盤と信用とは、如何に「三井」の力を以てしても、造作なく覆すことは出來ず、涙を呑んで敗辱の憂き目を味つた。

然し、部分的には失敗と損失もあつたが、大勢は次第に有利に展開し、一物産會社の純益が年々七八百萬圓まで滑ぎ付けたとは、嘘のやうな話だが、それは事實である。斯樣にして「物産」は「三井」の弗箱となり其の主宰者たる「益田」の勢力が往々「井上」を凌ぐものあるに至つたといふのも偶然では無い。

三　三井王國の主權者團琢磨

斯うした時に「中上川」の後任として『三井銀行』專務理事の椅子に坐した「早川」は擡頭を出しかけて來た。彼は日常豪奢の限りを盡し、爲に銀行の過振りが五十萬圓にも達せんとした。四十二年、「益田」は「井上」と協議の上、事業の統一を計り、第一着手として諸事業の組織變更をなし、『三井合名會社』を總本部とし、爾餘の各社を株式組織に改めた。其の結果、『物産會社』の專務として益田直參の「飯田義一」が擧げられた。『三井銀行』は三常務制とし、「早川」「池田成彬」「米山梅吉」が推された。卽ち「早川」は今までの配下と席を竝ぶることゝなつたので、體のよい辭職勸告と見られた。「益田」は顧問となり、元老の威望を以て之に臨み、「團琢磨」を『三井合名會社』の參事長とした。參事長は卽ち『三井』の總理大臣である。斯うして『三井』の改革は斷行され、天下は「團」の掌中に歸した。現在の『大三井』は「團」の領土と見て誤りが無い。

「團」は技術家の出身で、『三井炭鑛』の首腦者として貢獻するところが多かつた。併し、『大三井』の總理大臣として縱橫に切つて廻すには如何かと思はれぬでも無いが、併し、今日の『三井』は既に

大磐石の上に置かれてあつて、これを統帥するものは、創業の材幹よりも寧ろ守成の鯁骨漢を必要とする。此の意味で彼は案外はまり役だと云ふものもある。

彼の天下になつてから世界大戰といふ金儲けに屈强の舞臺が開かれた。ところで『三井』は此の大戰を當て込んで、米國の市場で棉子油の大買占を行ひ一時は五千萬圓からの巨利を攫んだが、戰爭の終局に近づくまで手を緩めず、卽ち見切りの時機を失したため、前の儲けを全部投げ出しても、まだ二千萬圓からの大怪我をなし、これがため紐育支店長「高木某」の變死事件等もあつたけれども、斯程の大傷を受けながらビクともしない位に『三井』の基礎は鞏堅不滅のものになつた。

これを『安田』に較べて稽へて見る時、『安田』には如何にも人物落寞の嘆は無きか。是れ我々が金權興亡の跡を點檢して第一に感ずる所のものである。

三菱王國の解剖

彌太郎の生立ち

一　帶刀を捨てゝ前垂掛に

「三井」の富も、其の根柢は政府の要路と結託し、巧みに之を利用することに依つて出來上つたけれども、「三菱」に至つては其の手段方法が一層露骨で且つあくどいものがある。また「三井」に於ては「三野村利左衞門」なる英傑兒が偶然外間から飛び込んで來て、縱横に奇策を弄し、「三井」と政府とを結ぶ取持役を務めたのに對し、「三菱」は最初から創業の主「岩崎彌太郎」が其衝に當り、而も傲岸不遜、卓犖不羈、殆ど人間業とも思はれぬ豪膽振りを思ふ存分に發揮して、意の儘に政府の財囊を搾りあげ、私腹を太らせた處に特異の點がある。いはゞ彼の富の大半は政府のお臺所から生れ出た。即ち其の手段方法には非難を免れぬ或物があるけれども、併し世評の如何は別として一代に克く巨億の富を築き上げた彼の手腕力量は、凡ならずと謂ふべしだ。

即ち、「三菱」の「興隆史」は取も直さず「彌太郎」の一代記である。「彌太郎」を除いて「三菱」の存在は無い。「彌之助」「小彌太」は單に彼が築いた富の浮城の門衞に過ぎないのだ。

「彌太郎」は天保五年十二月、土佐安藝郡井口村の鄕士「彌二郎」の長男として生れた。少時同鄕の儒者「小牧周平」の漢學塾に學んだが、持つて生れた剛情我慢の腕白癖は此の時代にも遺憾なく現れ、人跡稀なる妙見山に參籠して白衣の妖怪を退治したために、土地の庄屋「奥宮周二郎」に膽力材幹を認められ、安政元年三月、「奥宮」が舊藩主「容堂公」に隨ひ、江戸に赴く時、從者に加へられて上京し、當時の碩儒「安積艮齋」の門に入つた。

ところで彼の出京中、酒癖の善くなかつた父「彌二郎」は、酒の上の不始末から郡代率行に召捕へられ牢獄に投ぜられた。急を聞いて「彌太郎」は歸鄕したが、これも亦獄舍に繫がれ、六箇月目にして父子漸く放免された。こんな事情から村内の不評を招き土地に居たまらなくなつて、一家を擧げて高知近在の鴨田村に移住した。其處で父は私塾を開き、「彌太郎」は當時名高き「吉田東洋」に師事した。同塾生に「後藤良輔」なるものがあつた。「彌太郎」は彼と肝膽相照し、刎頸の交を結んだ。「良輔」は「東洋」の甥で、後の「後藤象二郎」である。

鼓で突然、師の「東洋」が勤王黨の忌諱に觸れて暗殺されたといふ事件が持ち上つた。「彌太郎」は悲憤其極に達し、師の仇を報うべく、「良輔」を國元に殘し、同志の「井上佐一郎」と共に秘かに勤王黨の巢窟京都に向つたが、途中「井上」は刺客に襲はれて斃れ、「彌太郎」の身邊も危くなつたので、巧みに難を免れ、大阪に落延びた。

鬼角する內、慶應元年を迎へ、時勢は急轉、幕府の旗色は頓に凋落を示した。此の機運を見て取つた「彌太郎」は敏捷にも商賣を以て身を立てんと志し、正月匆々颯然と鄕里高知に姿を現した。此時の彼は帶刀を捨てゝ前垂掛の商人姿に早變りして居たのであつた。

二　土佐に於ける大活躍

先づ第一に無二の親友「良輔」を訪れた。「良輔」は此時既に「象二郎」と改名し、藩の要職を占め、堂々たる門戸を張つて居た。彼は一見して「彌太郎」の風采の激變に驚き、其志を聞いて納得はしたけれども、容易に同意を表せず、却つて彼に仕官を奬めた。併し彼の決心を動かし難きを知つて强制はしなかつた。且つ彼の長き放浪生活を慰め、一は商賣の資本に充てさせる目的で金一百兩を

與へた。「彌太郎」は大阪に滯在中、同地の商人と關係を結んで來たので、此の百兩で土佐の國產木材を買入れて大阪表に送り、忽ち二百兩の利益を得た。これは彼が商人としての第一歩の勝利であつた。材木の買付には「象二郎」の世話で、藩の山方役「永山」が特別の便宜を計つて呉れた。彼が士族の商法で當時として少からぬ二百兩の金を儲けた裏面には、斯うした「永山」の庇護のあつたことを見逃す譯には行かぬ。そこで「彌太郎」は其中、百兩を割いて「永山」に贈つた。役人を籠絡することが巨利を博する秘訣であることを、此の一擧で彼は汎々と體驗したのである。

程なく「彌太郎」は土佐藩の國產方に擧用された。これと同時に「象二郎」は長崎表にある『長崎商會』の支配人として赴任した。『長崎商會』といふのは土佐の國產を賣拂くために、土佐藩で創始したのだ。これは云ふまでもなく「象二郎」が「彌太郎」の劃策を容れて實現せしめたもので、「彌太郎」は出荷方、「象二郎」は販賣の衝に當つたのだが、もと〳〵「象二郎」は東洋流の豪傑肌の男で、計數に闇く折角「彌太郎」が廻らした商策も「象二郎」のために、めちや〳〵に毀されて一向利益が擧らなかつた。そこで「後藤」は呼び戻されて一般の政務を見、「彌太郎」が代つて長崎に赴いた。「彌太郎」が引續いでから『商會』の利益は相當上つたけれど、こゝに意外の出來事のために思はぬ蹉

跌を生じた。それは朝鮮の無人島占領の企てであつた。或和蘭人の一夕話に、朝鮮の東海に無人島があることを知り、これを手に入れて大きな功名と金儲けを一緒に占めようといふ大それた夢を描いたのが彼であつた。藩主も「彌太郎」の空想に釣込まれ、莫大の準備金を支出し、いよ〳〵同島を占領した上は、「彌太郎」を島主にするといふ條件で、探險に向はしめた。ところで實際島に着いて見ると、無人島と思つたのは實は朝鮮領の鬱陵島で、多數の朝鮮人が住んで居た。何も彼も夢となつて悲然長崎に引上げ、御褒美の代りに嚴いお叱りを受け、次いで藩へ呼び戻されて留守居役といふ閑職に左遷されたのは大痛事であつた。

兎角する內に、叮治維新の兵亂も鎭定し、會津征伐の參謀として出陣した「板垣退助」は赫々たる武勳を樹てゝ歸藩した。「板垣」は「象二郎」と會合の上、藩の勢力を張る方法に付いて畫策を凝らしたが、何と言うても先だつものは資金である。其の資金を得るには「彌太郎」の手腕を俟つより他に道が無いと云ふことに歸結し、「彌太郎」の意見を徵した。彼は舊藩の勢力が永續せぬことを察知した。從つて土佐藩のために資金を作つても、返る見込は無いが、さりとて此際利を得るには兩人を利用するのが手取り早いことを悟り、それに付いて、いろ〳〵瞞着を絞つた揚句、案出したのが

金札を發行することであつた。併し折角金札を發行しても流通せぬ虞れがあるので、三人合議の上、太政官の紙幣と同格に交換する制を定め、先づ最初に『大黑札』といふ木札を發行し次に『鯨札』といふ紙幣を發行した。此の『鯨札』は鯨の游泳して居る構圖のあるために斯く命名したのだが、第一回に百三十萬圓、第二回に七萬圓を發行した。

ところで『鯨札』の流通と共に、藩の兩替所へ太政官紙幣と交換を申し込むものが多くなつて來たが、藩の財政窮乏のため一々これに應ずることが出來ず、從つて『鯨札』の價値は次第に下落し、太政官紙幣との間に非常なる開きを生ずるに至つた。利を見ること掌の如き「彌太郎」は此の形勢を見て取つて直ちに腹心を堺方面に派遣し、太政官札十萬圓を買入れ、其の資金で百四十萬圓の『鯨札の三分の二以上を買占め、且つ爾今兩替は大阪の藩邸でするとの布告を出さしめた。此の布告が出ると共に『鯨札』九十萬圓を一時に太政官紙幣と交換し、此の一擧で十萬圓の資金は忽ち九倍の九十萬圓となつた。差引八十萬圓は、あらかた彼の懐へ入つた。此噂を聞いて藩民は激昂したが、彼は平氣の平左であつた。

三菱會社の誕生

一　密偵を懷柔して腹心となす

當時土佐藩では、國產販賣の機關を別に大阪に設け、「土佐商會」と名付けて居た。「彌太郎」は其の指揮監督のため大阪に滯在したが、金の有るに任せて盛んに京阪の地を豪遊し、つとめて當時の諸名士と交際した。これは朝野の有力者と接近することに依つて、金儲けの糸口を見出さんがための野心からであつたことは云ふまでも無い。祇園の「富田屋」に於て名妓「お雄」の關係から「井上馨」と大格闘を演じ、「西郷南洲」の仲裁で和解したのも此の當時の話である。

併し「彌太郎」の豪奢の生活は、漸く土佐藩主等の疑惑を招き、密議の結果、敏腕の聞えが高かつた「石川七助」を目付役として大阪に派遣し、其の罪跡を檢査せしむることゝなつた。「石川」は非常な苦心を嘗めて「彌太郎」の犯行を探査した。そして怪しむべき幾多の事實を發見し、證據の蒐集に取掛つた。然るに其事を聞知した「彌太郎」は忽ち「石川」を抱き込んで、自分の唯一の配下にしてしまつた。此の「石川」は「三菱會社」の設立に當つて最も大なる貢獻をした功勞者である。昨日の犬を懐柔して自分に忠勤を抽んでさせたといふ一事でも、彼が唯の奴で無いことが分るであらう。

一　腹背に敵を受けた三菱會社

彼は既に相當の金が出來て見ると、藩の爲に盡すことの馬鹿らしさを感じて來た。そこで一層獨立して事を成さうと決心し、官を辭してしまつた。彼が官を辭するに方つて、彼と去就を共にしたものに「川田小一郎」「石川七助」「吉永亮吉」の三人があつた。彼は此の三人を幹部として、「九十九商會」なるものを創立し、土佐藩から「紅葉の賀」「夕顔」「鶴丸」の三帆走船を借受けて、土佐と神戸大阪間の航運業に從事し、四國の物產を大阪方面へ紹介することに務めた。これこそ今日の「三菱會社」の萠芽である。

併し「九十九商會」の營業成績は思つた程振はなかつた。「彌太郎」も之には甚だ不滿で、何とかして新生面を拓きたいと悶えた。ところで此處に彼と「石川」以外には知られなかつた大枚七萬圓といふ秘密の大金があつた。それは彼の「坂本龍馬」が、伊州丸の償金として紀州家から取つたもの

を、「龍馬」の死後、他人の名義で彼が保管して居たのであつた。「石川」が如何して此の秘密を知つたかと云ふに、藩の命を受けて内密に「彌太郎」の罪跡調査中に討らずも嗅ぎ付けたのである。「石川」は敵として恐るべく、味方として頼むべき有爲の材であつた。「石川」は彼の股肱となつた今日、大膽にも其金を會社の資金として流用を勸めた。そして更に土佐藩の倉庫に在つた樟腦四萬丁、時價約十五六萬兩の品を「後藤象二郎」の斡旋で自分の方へ送らせ、此の二つで忽ち二十二三萬圓の資金を作ることが出來た。其後間もなく「九十九商會」を解散し、豐富なる資金と十餘艘の汽船帆走船を有する「三菱會社」を新に創設した。時に明治四年、「彌太郎」は年僅に三十七歳であつた。

彼は此の「三菱會社」を提げて海運界に大飛躍を試みんとした時、米國の「太平洋汽船會社」が既に二年前より我國の沿岸に現れ、貨客の吸收に努めて居た際なので、同一の立場も頗る難渡であつた。そこへまた半官半民の「郵便蒸汽船會社」が創立された。これは我國に於ける會社組織の嚆矢で政府から年六十萬圓の補助を受け、三十餘艘の汽船帆走船を所有した有力の會社であつた。當時其勢力微々たる「三菱」が腹背に斯くの如き强敵の挾撃を受けたことは非常なる打撃で、結局は「郵便蒸汽船會社」對「三菱」の喧嘩となり、必然の勢ひとして運賃の大競爭が起り、これがため小回漕

業者の倒産者は續出し、「三菱」も亦、殆ど致命的の傷痍を負うた。併しかうした盤根錯節に遭遇してこそ始めて英雄兒たる「彌太郎」の眞面目が發揮して來るもので、彼は親友の「象二郎」が政府の要路に居たのを幸ひ、自分の苦境を說いて厳談を持ち込み、到頭手を廻して「大久保利通」と「大隈重信」とを說き伏せ、逆手を使つて「郵便蒸汽船會社」の補助金を取消さしめ、即ち戰鬪力を失はしめて、滅茶滅茶に叩きのめして了つたのは、どこまでも凄い腕前だ。そればかりか臺灣征討に際し、海上運輸の彼目を一手に壟斷し、これに依つて數百萬圓の巨利を獲得して、「三菱」の基礎を大磐石の上に据ゑた。

海運界の實權掌握

一 近藤廉平を起用す

斯樣にして海運界の實權を確實に掌握し、巨富を築いた「彌太郎」は勢ひに乘じて、鑛山事業に手を伸ばした。第一に手に入れたのが岡山縣吹屋町の「吉岡鑛山」である。同鑛山は大同二年に發見さ

れ、幕府の手に移つてから八十五年も採掘を繼續した有望の金銀山で、彼は之を買入れると、當時下級社員だつた「近藤廉平」を一躍して所長に起用した。其後數代の所長を經て、今日は主として銅を產出して居るが、其の年產額は八九十萬圓と云はれて居る。これが『三菱鑛山會社』の始めである。

彼はまた事業の規模が擴大されると共に、人材養成の必要を感じ、私財を投じて『三菱商業學校』を創設し、嗣子「久彌」も亦こゝで教育を受けさせた。後同校は『明治義塾』と改稱し、「大石正巳」を塾長とし、寄宿舍を設けて「久彌」をも入舍せしめた。一日、「彌太郎」が此の寄宿舍を見廻り、「久彌」を呼びつけて、目前にて小倉袴の繕ひをさせたといふ逸話がある。

此の前後に『郵便汽船會社』の解散したのを知つて、米國の『太平洋汽船會社』が又復我國の沿岸に現れ、『三菱』を向ふに廻して火の出るやうな貨客爭奪戰を演じたが、此時の『三菱』は最早昔日の『三菱』でなく、征韓に依りて巨富を積み、所有船は增加し、加ふるに政府の保護を受け、殊に相手が外國會社のことだから敢て驚く氣配も無かつた。併し「彌太郎」自から陣頭に立つて指揮の采配を振り、遂に敵の會社の日本支店長を軟化せしめ、彼の手を通じて日本に於ける倉庫と船舶とを買

取り、手も足も出ぬやうにしてしまつた。其後二三の外國汽船會社が競爭相手になつたことがあるけれども、殆ど問題にならず、隨分思ひ切つた運賃値上を行つたりして橫暴の限りを盡した。

反三菱の輿論沸騰

一　アンチ三菱を目標とした三井の陰謀

政府を利用すること、戰爭とで味を占めた「彌太郎」は、「石川」に旨を含めて、私かに九州に下らしめた。これは當時「西鄕南洲」が徒黨に擁せられて叛旗を翻す下心が見えたので、其の形勢を探らしめるためであつた。「石川」は歸つて南洲擧兵の信憑すべき事實を報告した。そこが「彌太郎」の狙ひ所であつた。彼は直ちに政府の大官を歷訪して風雲の急なるを告げ、これに對する戰鬪準備の必要なるを說いた。果して十年六月、賊軍の勢ひ猖獗を極めたが、當時政府の兵力微弱にして勝敗は逆睹することの出來ぬ情ない情勢であつた。其處で政府は一も二も無く『三菱』の獻言を容れ、『三菱』に對し汽船購入費として百五十萬圓の補助を與へ、『三菱』は之に手元の金七十六萬圓を加へて

外國汽船十艘を購入し、それに依つて西南役に際し、海上輸送の任務を完全に果し得たことは云ふまでもないけれども、兵亂鎮定後、其の汽船は無償にて自己の所有に移し、剩へ運輸其他の總益金は優に一千萬圓以上にも達し、全く濡手で粟の掴み取りをした譯だ。時に彼は歳四十三であつた。

其頃「野川良平」の紹介で入組してゐた「莊田平五郎」は彼の手許に一の建白書を提出した。それは官替・海上保險・倉庫業の三者兼營の利を說いたものであつた。元來獨斷專行主義の彼は他人の容喙を欣ばなかつたが、此の獻言だけは直ちに聞き入れ實行したが、これに依つて「三菱」は急激に貨物取扱ひの數量を增加し、且つ兼營に依つて少からざる利益を占め、事業の面目を一新することが出來た。

これまで「三井」は「三菱」を眼中に措かなかつたが、斯く急激に膨脹せる「三菱」の業績を見ては袖手傍觀することが出來ず、被に爭抗策を講じ、先づ以て越中の「藤井龍三」、新潟の「鍵富三作」、伊勢の「諸戸清六」等を說いて、「風帆船會社」を設立せしめ、以て「三菱」を牽制せんとしたが、「彌太郎」は之を聞いて、速早く「諸戸」を籠絡して「三菱」の株を持たしめ、此の切崩策に依つて、折角の金でも闇に葬られ、「三井」の陰謀も水泡に歸した。

二　政府の命令書と田口卯吉の攻擊

「三菱」が急速に羽翼を伸ばしたことは、啻に「三井」其他の既成財閥の嫉視を買つたのみでなく、政府當局と雖も亦懷疑の眼を以て眺めぬ譯に行かぬものがあつた。といふのは、當時「三菱」は政府の無利子無期限の借用金が四百五萬千七百四十圓あつた外に、郵便航路補助費として年額二十五萬圓、沖繩縣航路補助費として年額一萬五千圓、商船學校補助費として年額一萬五千圓、浦鹽定期航路補助費として年額一萬圓を受けて居た。斯うした補助費は「三菱」の海運業の收支が償はず、縱し償つたとしても老朽船の淘汰・新船購入修繕等、いはゆる海運業助成の意味に於て補給せられて居るのであるが、事實「三菱」は其の何れをも實行せず、且つ平素に於て年々四五百萬圓の利益を收め、殊に西南役の如き非常時に於ては一千萬圓以上の巨利を獲得して居る以上、補助金が全然無意義であるばかりか、前記の貸付金四百餘萬圓も寧ろ返濟を迫るべきが至當だとの議論が政府部內にも起つたためである。其處で政府は「森田某」なる間諜を「三菱」に潛ませ、內情を探らせた結果、以上の事實が明瞭となり、十五年二月二十八日、「駅遞總監」野村靖」の名で、十三ケ條より成る命令書を「三菱」に突

き付けるに至つたけれども、併し、それは貸付金を一時に取上げたり、補助金を取消したりする程度の手厳しいものでは無かつた。つまり政府の放つた强弩は「彌太郎」の頭上を掠めて去つたやうなもので、一向に手應へが無かつた。それよりも「彌太郎」に取つて應へたのは、當時「東京經濟雜誌社」に據つた「田口卯吉」が、一々數字的の基礎に依つて祕密を發き立て、正面から痛擊を加へたことであつた。「田口」の此の三菱攻擊は意外なる反響を喚起して世論を沸騰せしめ、流石の「彌太郎」も堪らなくなつて、當時「報知」の客員であつた「犬養毅」を聘して「東海經濟新報」を發行せしめ、保護貿易の立場から極力辯護の任に當らしめた。「犬養」は其の當時の功勞に依つて終身五百圓の月手當を貰つて居る。

彌太郎あつての三菱

一「大隈重信」との腐れ縁

當時「後藤象二郎」は既に失脚し、彼と腐れ縁あるもので「大隈重信」が首席參議として大藏卿を兼

ね、大に威勢を揮うて居た。「大隈」は一個人として手腕力量が勝れて居たけれども、藩閥とか、軍閥とかの背景の無いことが弱味であつた。時恰も「木戸孝允」は死し、「大久保利通」は刺客のために倒れ、薩長は首領を失うたので、彼は機乘ずべしとなし、閥族殲滅に想ひを凝した。そこで「大隈」は「彌太郎」と策應し、明治十四年七月、明治天皇が東北・北海道御巡幸の砌、これに扈從した「大隈」は御族中に於て天皇に憲法制定を奏請し、其の留守中「彌太郎」は言論機關を利用して一齊に閥族攻擊の火蓋を切り、一擧にして閥族の牙城を屠らんと謀つた。其の結果、鬱勃たる民間の不平は一時に湧發して、天下多事ならんとするの兆を示し、閥族は愕然色を失して爲す所を知らなかつた。明治十四年十月十一日、鶴駕還御、御前會議の結果二十三年を期して國會開設の詔勅が發せられた。併し「大隈」は反逆者として閣外に放逐され、政治的生命を全く絶たれたので、野に下つて「改進黨」を創立し、且つ政治思想啓發のため「早稻田專門學校」を起した。

最初「大隈」等の計畫では、此の以前に結黨された「自由黨」と連衡して、閥族に對し共同戰線を布く策謀であつたのだが、閥族のために却つて計畫の裏を掠かれ、「自由」「改進」兩派の暗鬪排擊となり、「自由黨」は言論文章を以て「大隈」並に、「三菱」の總攻擊を開始し、「犀亭」の如きは「自由の

燈』を創刊して、完膚無きまでに「岩崎」を猛撃した。且つ「自由黨」の壯士論客は全國を遊說して、『改進黨』を俗黨と罵り、「岩崎」を海坊主と扱き下し、讒侮中傷を極めたので、「彌太郎」の身邊に怨嗟の矢が蝟集したのは致し方も無い。

二　日本郵船會社創立のイキサツ

且つ復讐心に燃えた閥族は、反三菱派を使嗾して資本金六百萬圓の『共同運輸會社』を設立せしめ、內二百六十萬圓を政府にて出資し、『三菱』の海運業に對し威嚇挑戰の擧に出でた。流石の「彌太郎」も腹背に敵を受け、此時ばかりは血みどろの惡戰苦鬪を續けたのであつた。兩者の競爭の如何に熾烈を極めたかは、神戸横濱間の三等客賃が五圓五十錢から只の五十錢に下げられた一事でも明かである。此の接戰は二箇年の長きに亙つて尙ほ平和の曙光を認められず、十七年夏に至りて、さしも頑健を誇つた「彌太郎」も甚しく健康を損じ、間もなく癌腫を發して病の床に臥し、醫師からは死の宣告さへも下された。併し剛愎な彼は死の刹那に至るまで、事業に對する執着心を失はなかつた。病床の裡、猶ほ『共同運輸』の對抗策を苦慮し、つひに「後藤象二郎」「岩村通俊」の斡旋で殆ど彼

の希望通りの有利なる條件で、『三菱會社』と『共同運輸會社』との合併談が成立した。其の條件の骨子は『三菱』の出資に對し、年八朱の配當を政府が保證することであつた。これが今日の『日本郵船會社』の創まりである。其の結論から云ふと『三菱』は『共同運輸』との對戰に於ても亦、最後の勝利を占めたことになる。「彌太郎」は此の勝利を確認して大往生を遂げた。時に明治十八年二月六日、享年五十二歲であつた。

斯くの如くにして、『三菱』は愈々大を成し、財界の覇者となつた。日本の財界を三分して、其一を領有するものは實に彼である。今日の『三菱』の事業は實に海運のみならず、四方八方に觸足を伸ばして居るが、今日及び今後の『三菱』には最早「彌太郎」の如き創業の材幹を必要としない。若し萬一彼の天命を長からしめば、或は益々野望を逞しうして、爲めに折角築き上げた全財產を擲ち丸裸體になるやうなことが無かつたとも限るまい。此の意味から云へば、彼が比較的短命であつたことは、却つて『三菱』の大を成し得た所以であるとも云へる。何はともあれ、『三菱』は「彌太郎」ありての『三菱』である。「彌太郎」を除いて、『三菱』の存在が無いと始めに云つたのも此の意味に外ならない。『三菱』の解剖が「彌太郎」の解剖に終始するのも止むを得ぬ所である。

成金沒落史

成金の起り

一 成金の語源

若し玆に根氣と暇との充分な人があつて、いはゆる日本の成金史なるものを編纂するならば、これは或意味に於ける日本の經濟史の一部を形成するものであり、また或意味に於ける社會史の一部面をなすものであつて、我が國民の經濟生活の一面が遺憾なく記述せらるゝであらう。尤も「成金」といふ語が出來たのは極く最近のことである。それは少くも日露戰爭後の事であつて、しかも其の「成金」の名の始祖をなす者は彼の「鈴久」事「鈴木久五郎」であつた。といつても決して「鈴久」自から之を口にしたのでは勿論無く「鈴久」が日露戰後の、あの空景氣に乘じ、「鐘紡株」で一擧に三十萬圓も儲けた時に、金の實る木を十萬本も植ゑつけたやうな氣で、それは〳〵野放圖もない馬鹿遊びや、豪奢を極めたものである。これに對し世間の人が一種の反感と侮蔑とを以て「彼は成金だ」といつたものに始まる。即ち將棋の歩が一躍して金に成つたやうなものだと言つたのである。

蓋し此の「成金」の語ぐらゐ道般の意味を最も適切に言ひ表はしたものは少く、其後其の大小と性質の如何とを問はず、苟も歩から一躍して金になつたやうな事柄に對しては、等しく一種の侮蔑的意味を以て此の「成金」なる語を當て嵌められたのである。即ち土地の賣買に依つて一躍巨利を占めた者を「土地成金」、船の賣買に依つて一躍巨利を占めた者を「船成金」といふのは勿論、下女が奥樣になれば「旦那成金」、自動車の運轉手が主人の令孃を口說き落せば「妻君成金」と言つたものである。此の意味からすれば世に「成金」の種類も隨分多く且つ「成金」の語は無くとも「成金」なる事實、即ち「成金」なるものは、ずつと昔から存在して居たのである。それは將軍の手が娘についたとかで、其の親父が一躍お大名になつたのや、田子作が大名の落胤であつたといふので武士になつたのやは暫く措き、本來の意味の「成金」――といふのも一寸可笑しいが――主として經濟的意味の「成金」も相當に存在して居た筈である。

先づ手近いところが江戸は其の創世期からして既に成金に依つてでつち上げられたのであつた。それは今を去る三百四十餘年前の天正十八年八月朔日、「德川家康」が駿府から入城して來た時の江

戸は、數戸の寺院と百戸ばかりの民家とが一眺千里、茫々たる武藏野の原に散點するのみであつた。八月から九月にかけ、駿・遠・參・甲・信五ケ國の家臣が一族郎黨と共に續々として入城して來たのであるが、彼等は、それと同時に其處に食料問題・住宅問題にハタと打つ突つたのであつた。こに於て機敏なる商人――それは遠・參二州乃至遠きは近江・越後から草鞋一足・天秤棒一本で入り込み、此の機會に乘じて、しこたま腹を膨らし、昨日の素寒貧は一躍して今日は成金となつたのである。斯くて彼等と密接なる關係を持つ酒と女の巷も、始め鎌倉河岸から後は日本橋・葭原と、江戸の發展につれて發展し移動したのであつた。

江戸は斯うして其の發達の緒に着いたのであつた。爾來德川幕府二百數十年間、そこには大小幾多の成金が生れ且つ沒落し、我國成金史の隨一たる後の「紀國屋文左衛門」の如き、或は「河村瑞軒」「奈良屋茂右衛門」の如き此間の所產たるは勿論、今日の「白木屋奥服店」の如きも寬政の奢侈禁止令施行の當時、「白木屋」の祖先「大村彦太郎」が人間の慾望と奢侈心とは到底何時までも抑制さるべきものではなく、早晩此の禁止令は解除せらるゝことを見込んで、盛んに奢侈品の買占めをやつた。而も、それはどんな高價な美術品や贅澤品でも、兎に角こんなのを持つて居れば酷い目に逢はされ

るので、止むなく之を二束三文にでも手放すやうになり、「彦太郎」は之をしこたま買占めたのであるが、此の思惑は見事に適中して、其後幾何もなくして江戸文明の爛熟時代ともいふべき文化・文政の反動時代が來た。そして「白木屋」は裏日買占めて置いた色々の美術品や贅澤品を賣出したところ、それが飛ぶやうに賣れ、そして一代の成金振を發揮したのであつた。

二　成金と天下の富豪

「三井」とか「住友」とかいふ蓄富豪だつて其間大小の成金振を發揮して今日に至つたのであるが、殊に新富豪――一代富豪といはれる「大倉」「安田」は勿論「三菱」だつて、そこに一攫萬金の成金振を發揮して今日に至つたのである。

「安田」が「鈴久」の後押をしたればこそ「鈴久」もあれだけの大手張をしたのであり、其の時代に「安田」が儲けた金も並大抵では無かつた。人は「安田」を評して堅實そのものゝやうにいふかも知れぬが、其實彼の思惑は實に大膽なものであり、殊に機を觀ふこと掌の如く敏にして鮮かなることは到底匹々たる投機者流の足許にも寄り付き得ざるところであつた。鰹節屋の一小僧から四十年か五十

年の間に巨億の富をなすといふのであるから、これこそ大成金と言はなければならぬ。

また『大倉』にしても、同じく鰹節屋の一小僧から今日の大を爲したのであるが、其間彼の放膽なる投機的行爲――それは上野戰爭當時に銃砲を官軍に賣付けて一攫千金を握り、津輕の飢饉に食糧を送つて大當りをしたことや、或は西南戰爭若くは清國戰爭に糧食を送つて巨利を得た事等を擧ぐれば、彼の生涯も亦投機と冒險とであつた。

斯く擧げ來れば今日富豪と言はれるもので、其の過去に投機的行爲の無かつた者は少く、素寒貧から一躍して天下の大富豪となつた所謂成金が大部分を占めて居るのである。たゞ是等の大成金が中途にして浮沈なく、よく富豪として今日あることを得たのは、一度得たところの金を克く守るに其の宜しきを得たためであつて、此點が世の所謂成金とは大に趣きを異にする所以である。そして其の克く守るがために、假に其の成金なる冠頭詞は何時の間にか削られて、以て天下の富豪として其の重きをなすに至つたのである。

成金出現の時期

一　天災地變と戰爭動亂

由來、成金なるものは不景氣とは間接的ではあるが、最も密接なる關係を有してゐる。成金が財界的好景氣時代の所產であることは勿論であるが、しかも此の好景氣は必ず不景氣の後に來るものであり、此の不景氣は、また必然的に好景氣の後に來るものであつて、好景氣と不景氣とは互に因となり果となる關係を有するものである。即ち成金は好景氣時代の所產であるが、此の好景氣は不景氣の後に來り、不景氣は好景氣の後に來るものである。

しかして「ゼボンス」に從へば、恐慌は遲期的に來るものであるといふことである。即ち大抵十年目に不景氣と好景氣とは交互に來るものであるといふ。即ち好景氣だと思つて居る時に突然パニックの颱風が起り、不景氣だと思つて居る時に財界の一端は徐々に好景氣を齎すのであるといふのである。果して然りとすれば、成金も亦好景氣の獨特の所產であるだけに、必ずや十年目といつたやうに遲期的に現れるであらうし、同時に、また彼等成金の沒落も遲期的に來るであらう。しかして玆に成金の簇生となり、しかして玆に成金の沒落となるのである。

我國今日まで成金を生むこと其の幾何なるを知らない。天災・地變・戰爭・動亂後には殆ど必然的に成金の簇生を見た。しかも是等の天災地變乃至戰爭動亂は不思議にも「ゼポンス」の說を忠實に遵奉したかの觀あり、週期的に是等が現れ、隨つてまた世の景氣・不景氣も之に隨つて現れ、そして成金また之に伴れて簇生したのであつた。

二　不景氣は景氣復活の陣痛

それは是等の天災・地變・戰爭・動亂の後には、一時人心は疲弊し困憊するものであるが、人間は何時までも此の疲弊困憊に堪へ忍ぶものでは無い。猛然これに反抗的態度を持し、財界が漸く恢復の緒に着きかけるや、其の反動力は急加速度を以て進み、遂には空景氣までも煽り立てゝ、曩日の不景氣は今何處にと言つたやうにケロリとした顏になり、斯くて投機熱は都鄙を通じて旺溢し、然して人心は奢侈となり遊惰となり、いはゆる成金氣分を以て漲らしむるのである。

即曆の大火災後には、一代の成金「紀文」を生んだのは遠き昔の事ながら、近くは日清戰役後には「雨宮敬次郎」「田中逸平」「鴻戸清六」を生み、日露戰役には「天下の鈴久」現れ、しかして歐洲大戰

には、

「俺は神戸の內田だ、金なら幾何でも遣るから、助けて呉れ！」

と汽車の下敷となりながら絕叫した彼の「內田信也」を始め、金あればこそ見事一黨の總務を贏ち得た「橋本喜造」を始め、「勝田銀次郎」「山本唯三郎」「山下龜三郎」「久原房之助」といつたやうな大成金を筆頭に、大小無數の船成金・鐵成金等々を生んだのである。更に大きく毛唐に例を求むれば、世界の金融王「ロスチャイルド」の富はナポレオン戰爭に依つて蓄積せられたものである。

こゝまで言いて來れば、大正十二年九月の大震災にも何だか其處に大小幾多の成金が現れる可能性があるやうに思はれた。震災によつて失はれた損害見積額は約百億圓にも達したといふことである。それで若し震災前のまゝに復興するとしても、此の損害額だけは今後十年か十五年かの間に復活しなければならぬ筈である。しかも此の復活の道程に、それが震災前のまゝに復活するとは何人と雖も豫期しないところであらう。即ち例へば玆に震災前百萬圓の資產を持つて居たものが、震災のために五十萬圓の損害を蒙つたと假定し、今後の努力に依つて、失つた此の五十萬圓を必ず復活補塡し得るとは何人も豫期しない事であつて、或は其人は殘れる五十萬圓をも失ふかも知れず、或

はまた震災前までは一介の素寒貧であつたものが、忽ち一躍何百萬圓の成金にならぬとも限らぬのである。

尤も今のところは皆一齊に苦んで居る。震災の打撃の餘りに大きいのに苦み惱んで居る。不景氣は餘りに深刻に財界の隅々までも滲透して居る。此の苦難の中から彼の華やかな成金氣分が生れようとは想像されぬ位だ。しかし此苦みは所謂生みの苦みである。復活をなす陣痛である。

政府は財政の緊縮・行政の整理を斷行した。其の程度は未だ十分で無かつたかも知れぬが、兎に角、震災後の大苦難に處すべき相當の施設をした。そして經濟政策としても公債の市場引募債主義の斷行、日銀の金利引下等、日と共に今日まで財界の禍根をなした「鮮銀」「泰銀」兩特殊銀行の整理乃至「國際汽船」の整理を斷行し、これに伴れて民間各事業會社並に銀行の整理も殆ど其の大半行はれた。

三　黃色の渦をなした大正九年

歐洲大戰開始直時の大正四年に於ける我國の正貨、即ち現ナマは、どれだけ有つたかといふに、

僅に五億一千六百萬圓に過ぎなかつた。これとても外債や其他いろ〳〵の手段を講じて現ナマを持つことに汲々たるものがあつた。ところが歐洲大戰の勃發と共に平常なれば粗製濫造品として見向もせられない我國の物資も、ドン〳〵歐洲に向けて輸出せられ、それに船齡は遠の昔に來てゐるやうなボロ船も奪ふやうにしてチヤーターされた。斯くて現ナマはザク〳〵として我が商人の懷に入つて來るやうになり、國內は所謂黃色の渦をなすの有樣となり、大正九年末には實に內外正貨總額は二十一億八千三百萬圓といふ巨額に達した。即ち大正四年の五億一千萬圓から六年には倍額の十一億三百萬圓となり、更に三年後の九年には倍額の二十二億餘圓となり、五ケ年間に正貨の總額は四倍した譯である。こんな調子であるから世の中は所謂成金氣分にならざるを得ない譯であつて、ボロ船二三隻持つて居れば忽ちにして數百萬圓の成金となり、兵隊靴を何萬足か露國に送れば何十萬圓かの利益を得たといつたやうな有樣であつた。それで苟も男子であり苟も覇氣ある者で百圓や二百圓の目腐れ金の月給取は馬鹿の骨頂とされ、商賣人・會社員で無ければ人でないかのやうに言はれて居たのであつた。

斯くの如く成金全盛を招來せしめた正貨も、大正九年末を絕頂として九年三月に端を發したバニ

ックは、いよ〳〵十年になつて深刻となり、正貨はこれより漸く漸減趨勢に轉じ、十年の二十億八千萬圓から十一年には十八億三千萬圓と澎減し、遂に十四年の九月には十四億四千五百萬圓と慘澹たる減少振を示し、そして一時十何億からあつた在外正貨も二億五六千萬圓迄にまで澎減し、これでは年來の國際貸借決濟の辻褄が合はぬといふので、遂に內地正貨の現送を開始され、さしも榮華を止めた正貨も遂に外國に逆戻りすることゝなつたのである。此の正貨現送は昭和三年三月、金融界大恐慌のため中止されたけれども、此邊り感傷的に世態の變轉、轉た今昔の感に堪へずとか何とか言はなければならぬところである。

パニック

一 パニックとは如何なるものか

我が正貨が大正九年末を絕頂として漸減趨勢に轉じたのよりも、更に其の以前に於て、そんじよ其處等の大小成金はパク〳〵と算を乘して倒れたのであつた。それは大正九年三月十五日に端を

發したパニックを境として銀行の取付、會社の破綻、綿糸布の暴落、株式の慘落といつたやうに悲風慘雨はトテも面も向けられず、そして一しきり續いた嵐の後には昨日までの成金は今何處にか在るといつたやうな有樣であつた。

パニック！　財界にこれほど恐ろしいものはない。それは持てる者は持てるだけ其の影響は大きく、持たぬ者は持たぬだけ又一層苦痛が甚しいのは實に此のパニックである。しかも此のパニックが七年とか十年目とかに週期的に來るといふのであるから、堪つたものでは無い。

然らば元來パニックとは如何なものをいふのか。例によつて學者は之に就いて種々な說をなして居る。しかしパニック、卽ち恐慌の狀態として破產者の續出、企業家殊に金融業者の警戒、貨幣の蓄積、銀行の取付、及び支拂停止、信用の縮少、金利の暴騰、取付の激減、物價の暴落等は、共に相關聯して起る現象である。

しかして斯くの如きパニックの勃發する原因としては、パニック學者の「アフタリオン氏」は、

「恐慌は物價に生ずる週期的變動の問題である」

また、「ペートン氏」は、

「恐慌の中心的事實は投機である」

と言つてゐる。然れども此の兩氏の說は何れも眞であつて且つ十分とは言へない。蓋し恐慌は事業擴張時代より收縮時代に遷る過渡的現象であつて、信用の過度の膨脹が其のクライマックスに達して其の膨脹力を失ひたる時に起る現象に外ならない。

恐慌が物價と密接なる關係を有することは事實である。然れども之に信用の附隨しない間は未だ恐慌たるの原因を誘發しないのである。例へば玆に船舶業者があつて、現在の船價計價額一千萬圓と見積られたものが、其の後船價俄然暴落して半額となつたとしても、其の船舶業者は猶五百萬圓を有することになるのであるが、しかも之に信用が附隨してゐて、當初船舶業者が銀行から五百萬圓の資金を借入れて其の船舶を購入し其後船舶界の好況につれ、そこに投機も手傳ひ船價が倍數に增加して一千萬圓となり、一擧に所謂五百萬圓からの利潤を得て船成金となつたのが船價暴落で半額に下落したとしたならば、其の船舶業者の手に殘るのは五百萬圓の船舶と同額の借金であつて、結局元の杢阿彌となつた譯である。斯くの如く資產と負債とが同額でキャンスルし得る時は未だしも、もしさうでなく資產の値下りが更に甚しく、好況時代の三分の一乃至四分の一となつた場

合には、こゝに貸借對照表のバランスを失ひ、遂に其の船舶業者の破產となり、惹いては直接に此の船舶業者に對し信用を拂つて居つた銀行が資產の回收不能となり、銀行の資產の回收が順調でなく、滯貸もしくは貸倒れが增加すれば其の銀行の營業狀態が不健實となり、斯くて預金者は之に不安を感じて當初は緩漫な取付から遂には急激な取付となり、斯くて其の銀行は止むを得ず整理のために休業となつて財界は玆に混亂化し、こゝに於てかパニックの狀態は如實に展開されることとなるのである。

二　パニックを生ずる原因

即ちパニックの狀態は物價と信用と投機とが巴狀的に因果關係をなし、そして其の信用がクライマックスに達した時に起るべき現象である。然らば如何なる場合に斯くの如き現象を呈するかといふに、それは今日までの各國の例を見れば、

一、金銀の發見――南アフリカ・濠洲・カリフオルニア・クロンダイキ等に於ける金銀の發見は、各地方に於ける採金者が成金振を發揮し、且つ之がために一般物資の運轉が活況を極めたること。

二、植民地の開拓――米大陸の發見は歐洲に於ける物資の需要を增大したること。

三、大發明――汽船・鐵道・電信・電話、若くは紡績機械・蒸汽機關等の大發明は英米に於ける企業の勃興を促し、ために物資の需要を增加した。

四、戰爭――ナポレオン戰爭は米國に於て、日露戰爭は日本に於て、歐洲大戰は英・米・日・獨・佛等に於て、軍需品の需要を增大したること。

等を原因として各貨物の市價は著しく騰貴し、製造業者の利益は玆に增加する。此の結果として事業の擴張となり、勞働賃銀の騰貴となり、しかも製造業の利益は勞銀の騰貴に拘らず更に增大して事業の擴張は自己の資力以外に、借入資金を以てするやうになり。斯くて一般に資金の需要が增加し、延いて金利は騰貴するのであるが、それでは利益は依然激增一方なるがために益々事業を擴張し、同時に勞働賃銀の騰貴は勞働者の購買力を增大し、金利の騰貴は資金の膨脹力を加へ、且つ事業の擴張に隨つて物資の需要を增大し、斯くて日用品、奢侈品及び一般物貨の需要增加は玆に經濟界の黃金時代となり、銀行其他の金融業者は資力の最大限度まで貸出を行ひ、信用は膨脹して其のクライマックスに達するのである。

しかも斯くの如き信用膨脹の狀態は恰も膨れ切つた風船玉と同じく、其の一端に一寸した龜裂を生じても、それは全體の組織を崩壞せしむるものである。蓋し此の信用の崩壞狀態こそパニックと稱するものである。

三　パニック後の不景氣時代

パニックは前述の如く信用が爛熟した後には、殆ど必然的に來るものであるが、しかも好景氣の後に必ずしもパニックが來るものでは無いこと勿論である。即ち好景氣時代から不景氣時代に移る過程として、必ずパニックの洗禮を受けなければならぬといふ譯のものでは無い。尤も好景氣と不景氣とは因果的に交々發して極端から極端へと移つて行き、其間、時にパニックなる過程を踏むこともあるが、それは不景氣から好景氣のクライマックスに達し信用が爛熟した場合に限られて居るのである。

勿論、好景氣から不景氣に移るには、そこに何等かの原因なくてはならぬ。しかし其の原因が如何なるものにせよ、其の過程なるものは極めて徐々たるものであり、決してパニックによる如く、

左樣に急激に且つ經濟上に大擾亂を起すやうなことは無いのである。

それは兎に角として、パニック後の不景氣は其の期間頗る永く、到底二年や三年では容易に恢復し得るものでは無い。しかも斯かる不景氣時に於ては、其の特徴として金融は梗塞し、購買力減少のために商工業は益々疲弊し、有價證券の市價は鈍重そのものゝ如くにして容易に動かず、一方パニックの怒濤から漸く餘喘を保つてゐる會社や事業家も經費は極度に節減し、操業短縮・勞働者の解傭・賃銀の引下等を行ひ、惹いては失業者續出・勞資爭鬪等、社會の一切の悲慘事・不祥事は相繼いで起るのである。それは大正九年のパニックのために今日如何に國民が苦き經驗を嘗めつゝあるかは如實に痛感しつゝあることであらう。

英米の恐慌史

一　太陽黑點說とパニック

「ジエヴオンス」の所謂「太陽黑點說」に隨へば、太陽の黑點は殆ど十年目を週期として最大となり、

斯く太陽の黑點が最大となつた時には、光線の發射量を減ずるがために天候に變徴を來し、五穀ために熟せず、これがために食料・原料品の不足となり、國民の購買力を減じ、一般商工業上に影響するから遂にパニックが起る。それは英國の恐慌史を見ても、英國の恐慌は一千七百十年・同二十一年・同三十一年・同三十二年・同四十二年・同五十二年・同六十三年・同七十二年・同七十三年・同八十三年・同九十三年・一千八百四年・一千八百五年・同十五年・同二十五年・同三十六年・同三十七年・同四十七年・同五十七年・同六十六年・同七十八年と殆ど十年目毎に發生して居り、これが太陽の黑點と符合して居るといふのである。

太陽黑點說とパニックとの關係が如何あらうとも、兎に角、各國の恐慌史なるものを見れば、殆ど週期的にパニックが發生してゐることは事實である。「ジエヴオンス」の擧げた前記英國の恐慌史は勿論、米國の恐慌史を見ても、千七百九十一・九十二年・千八百十四年・同二十六年・同三十七年・同四十八年・同五十七年・同六十四年・同七十三年・同八十四年・同九十三年・千九百三年・同七年と殆ど十年目毎にパニックに見舞はれてゐるのである。

斯く英米は十八世紀から近年に至るまで、十數回に亙りて悲慘なるパニックの經驗を嘗めてゐる

が、たゞ其の程度に至つては、自から時と場合とによつて相違がある。蓋し此のパニックの影響する程度並に範圍は、經濟組織の發達に隨つて相違するものであつて、例へば經濟界の比較的幼稚であつた千七百十年から二十一年にかけて起つた彼の有名な『南海泡沫會社』事件の如き、『亦』は同じ頃起つたミスシツピー事件の如き大きなパニツクも、其の及ぼした範圍は殆ど一地方に限られてゐたのであつた。然るに經濟界が漸く發達した千八百五十七年の大パニツクを見ると、其の影響するところは極めて大にして同年九月米國に端を發したパニツクは、同年十一月には英國に現れ、次いでドイツ・デンマルク・オーストリーに移り、更に印度に波及して最後にはブエノス・アイレスまでも及んだのであつた。近くは千九百七年米國に起つたパニツクも殆ど全世界に及び、或は大正九年三月我國を侵したパニツクの如きも其端は實に歐米にあつたのであつた。

二　英國に於けるパニックの歴史

それは兎に角として、英米に起つた前述十數回に亙るパニツクの程度及び其の原因如何といふに、先づ英國に於てパニツクとして著しいものは、千七百六十三年のそれであつた。此のパニツク

は當初ハンブルグから起り、此のハンブルグに關係を有する商店は之がため一齊に影響を蒙り、倒產者相踵ぐといふ慘狀であつた。そこで『イングランド銀行』は百萬ポンドの救濟資金を出して漸く之を救濟することが出來た。

千七百九十二年のパニツクは恰も米國獨立戰爭終結後のこととて、歐洲一體は好景氣旺溢し、投機熱も頗る熾なものがあり、『イングランド銀行』の兌換券發行高は急激に增加し信用は極度に膨脹した。それが同年の秋から財界の一部に倒產者を見たが、時恰も穀物取引の一大會社に對し、『イングランド銀行』が取引を停止したので、これに關係する會社・銀行は、それこそ將棋倒しに倒產したので、政府は遂に大藏省證券を發行して之が救濟に當つたのであつた。

千八百十年のパニツクは南アメリカのスペイン領諸國が獨立したので、南米との投機取引が盛となつて大小成金を續出し、銀行また頻りに信用を濫發して投機熱を煽動したがために遂に信用の破綻となり、ロンドン市に於ける大商會の破產は累々たるものであつた。

次いで千八百二十五年と同三十六年には鐵道・運河・炭坑・瓦斯等の事業熱勃興し、銀行は頻りに之に信用の增發を行つたが、いざ正貨の引換となると之に應ずることが出來ず、しかも之に對する『イ

ングランド銀行」の無策は手形の割引を拒絶し、若くは三十六七年の如きは恰も米國にもパニックが起つてゐた時であるから、リバープール市に對して米國と取引する商人の手形割引を停止するやう命令した程であつた。故に銀行・會社は兩年とも慘澹たる光景を呈したのであつた。

其他千八百四十七年には「イングランド銀行」の金塊所有高が增加し割引歩合が低下したために投機熱起り、同五十七年にはロンドンの商人が信用を濫用して投機熱を煽つたために、また同七十八年にはロンドンの大銀行が一會社に對し大量貸付をなし、而もそれが回收困難となつたがために閉店の止むなきに至り、遂に何れもパニックの端をなし財界を一大混亂狀態に陷れたのであつた。

三 米國の恐慌史

米國の恐慌史は矢張り千七百九十一・二年から今日まで數十回のパニックを繰返して來たのであつた。殊に米國に於ては、凶作・政治上の變動・鐵道賃銀・戰爭・通貨法・トラスト・金鑛發見・石油噴出等の事情が加はつてパニックの發生も財界の好轉も屢々起つたのであつた。

先づ千七百九十一・二年のパニックは單に金融上のものに過ぎなかつたが、千八百十四年のパニックに至つては英國と戰端を開いたことに原因するのである。卽ち開戰と同時に外國貿易、殊に輸入貿易不振となり、僅にボストン市に於ける空輸入によつて米國內の需要を充してゐる有樣なので、米國內の正貨はボストンに偏在し、他の各所の銀行は營業困難の折柄、十四年八月二十四日に首府ワシントンは英軍のために占領せられ、大統領は森林に逃れるといふ有樣なので、經濟界は愈々ここに大波亂を起し、銀行の閉鎖・商店の倒產が續出したのであつた。

それから千八百二十六年のパニックに次いで三十七年には政府が國庫剩餘金を各州立銀行に預金したため資金潤澤となり、土地に對する投機熱が勃興したが、其後政府が此の剩餘金の一部を回收したので市場は俄に資金涸渴し、ために一大パニックの端をなし、銀行は殆ど一齊に支拂を停止し、株券・土地・貨物は瞬間に大暴落を演出し、商會の破產、就中ニューヨーク市に於ける「ロスチャイルド家」の代理人たる「ジョセフ商會」すらも破產した程であつた。此の千八百三十七年のパニックは米國に於ける五大パニックの一とせられ、殊にパニックの最大原因が土地投機にあつたので、今日まで土地パニックとして傳へられてゐる程である。

次は同五十八年のパニックで、これも五大パニックの一つと目はれてゐる。しかしてパニックの

壊因をなすものは、千八百五十四・五年のクリミヤ戰爭であつて、此の戰爭のために米國船舶は巨利を占め、所謂航成金が續出したのであつた。斯くて船舶業は活況を呈し、これに關聯して鐵道事業も大に氣勢を揚げ、隨つて銅・鐵等の鑛業も盛となり、斯くて證券も株式も商品も法外に騰貴し、米國内は所謂黃金の海嘯が來たやうであつた。

然るに早くもパニックの陰影はウオール街に現れ、猫も杓子も空株を發行すれば、金は濡手で粟の摑み取りであつたのが、しかも同五十六年十二月に至つて「イーリ鐵道株」の賣から崩れ立ち、遂に之が因をなして一大パニックの混亂狀態と化したのであつた。

千八百六十四年のパニックは、南北戰爭による鐵道會社の好況から好景氣の端をなし、それから株式の大買占等も起り、投機熱狂時代となつたのが、絶え間なき戰鬪と外國貿易の入超續きのために、こゝに鐵道株の下落を切かけに遂にパニックを現出したのであつた。しかし此時のパニックは前回に比ぶれば大したものでは無かつた。

然るに其後千八百七十三年のパニックは所謂五大パニックの一つであつて、其の影響するところも甚大であつた。其の原因はウオール街に於ける劇暴なる株の買占であつて、各々買占團を組織し

て株の釣上に熱中したのであつた。斯く買占團の熱中して居る間に金融は用捨なく逼迫して來たのであるが、大西洋銀行の支拂停止によつて愈々本物のパニックと化し、それからといふものは諸株一齊に投賣に轉じ、市場ために秋風落寞といふ感を呈するに至つた。

其後千八百九十三年にはマッキンレー保護關稅法が製造業者に刺戟を與へた外、財界は好景氣に充されて居たのが、大統領「クーブランド」の獨占攻擊演說と『ナショナルコールデージ會社』其他二三會社の破綻によつて愈々パニックの幕が開けたのであつた。また千九百〇三年には財界好景氣で、株式活況を呈し、一日の株の取引高三百萬株といふ素破らしい勢ひであつた。然るに此の勢ひも千九百〇二年九月を絶頂として、それからは例の買占團の金策に窮したのや其他釣の落ちた音にも市場は脅へるといふ有樣で、三年六月を大團圓として大崩落を演じ、例によつて會社銀行は勿論、死屍累々たる觀があつた。

最後に千九百〇七年には金融の逼迫、『ニューヨーク同盟銀行』の現金所得額の減少等を原因として、其後株式有價證券は總體に於て約五十億弗方の下落を示し、加ふるに大統領「ルーズヴエルト」はトラスト征伐を行ひ、また生命保險會社等の大會社の詐僞行爲が曝露せられてパニックを招來す

べきことは殆ど避くべからざるの狀態となつた。そして此の禍端は俄然銀行業者の製銅株買占の失敗に發したのであつた。それから製銅株の下落・製銅會社の破産・取引銀行の休業は勿論のこと、惹いては一大信託會社の支拂停止となり、パニックは愈々擴大して人心は既に狂亂の髓に陷り、それからといふものは信託會社といふ信託會社は勿論、銀行も齊しく取付に遭ひ、政府は市中銀行家と協議して之が救濟に當り、兎に角國庫から一億弗を支出して救濟資金に充當し、また「モルガン」「ロック、フェラー」の如きも、信託會社に一千萬弗を提供して救濟に當つたのであるが、僅に「リンカーン信託會社」が最後まで支拂に應じた以外は何れも支拂停止の外なき狀態にして、しかも人心ますく〳〵不安となり、日一日と市中は險惡に陷り、信託會社や銀行の前に預金者は蝟集し、斯くて銀行の倒産相踵いで起るといふ有樣であつた。米國も今日まで幾回となくパニックを經驗してゐるが、恐らく此時ぐらゐ混亂紛糾した時は無かつたであらう。

日本の恐慌史

一　維新當時のパニック

恐慌史なるものを詳しく書けば、立派な經濟史である。日本の經濟史！　それを探究せんとすれば遠く幕府以前に溯らなければならぬかも知れぬが、併し其の當時の經濟組織は玆にいふ經濟史、若くは恐慌史とは相當趣を異にし、且つ本書の目的からして左樣に遠い昔のことを必要としない。それは少くも明治初年以後からで澤山であり、或は更に我國の經濟的發達の程度からすれば、日清戰爭以後、若くは日露戰爭以後から記述すれば十分であるやうに思ふ、

我國に於ける王政維新直後のパニック、それは未だパニックといふ程度に至らないものかも知れぬが、兎に角、王政維新のために玆に政治組織が一變したのであるから、同時に經濟組織も一大變化を來したことは事實である。政治組織上に一大革命を齎した以上に、經濟組織の上に大革命を齎したのであつた。從來、幕府若くは諸藩の手で行はれてゐた各種の事業は擧げて民間の自由競爭に委せられ、且つ職業の選擇も土地・財産の所有權も漸次確認せられ、玆に一國の經濟組織乃至生活狀態は一變せられた譯であるから、曾て百萬長者と言はれた者は、破産して無一文になつた者もあり、曾ては千石乃至萬石の食祿を食んでゐた旗本や武士たちも、いはゆる士族の商法で、素寒貧になつた者も可成りに多くあつた。其の代り百姓町人が一躍して百萬長者になつたり、土佐の海濱

から飛び出した「岩崎彌太郎」が我が日本に於ける富豪番附の筆頭に列せられたり、北陸の山奥から匍ひ出した鼻液垂小僧が後年、安田善次郎」になつたり「大倉喜八郎」になつたりしたのであつた。

それは兎に角、政治・經濟乃至社會上の一大革命であつて、しかも一方には砲煙到る處に漲り、兵火各處に起るといふのであつたから、商工業は一般に衰退するし信用取引は中絶せられ、金融は杜絶するといふ有様で、今日でいふパニックの狀態を呈したのであつた。それで政府は所謂商法司なるものを設け、大政官札なるものを發行して、是等各種の商工業の救濟資金を貸付けたのであつた。それでも其時に米作が凶作であつたために、米價は十一圓といふ値を見せたのである。

それで一千七百萬圓からの外米の輸入となり、米の不足が稍緩和されると同時に、明治二年には府縣制度が施行せられ、また京濱間の鐵道敷設工事が外債によつて着手せられ、民間も漸〳〵活氣を呈して來たのであつた。そして又幕府時代に御爲替組を勸めた「三井組」「小野組」「島田組」なんどが爲替會社といふ金融機關を設置し、政府は之が保護のために大政官札の貸付、また金券・銀券の發行權を與へたので、此の會社は頻りに紙幣を濫發し、ために信用は膨脹して空景氣を出し、所謂成金時代を出したのであつた。

二　不換紙幣の整理とパニック

併し之も束の間で、明治七年には例の佐賀の亂に次いで臺灣征伐等の事件あり、正貨流出・人心不安のために一寸パニックの狀態を呈し、金融全く逼迫して、流石に景氣の好かつた「小野組」や「島田組」といつたやうな富豪も到頭破産沒落の運命に遇ひ、我國維新後の最初の財界沒落史の一ページを彩つたのであつた。

ついで西南戰爭後も紙幣增發で小パニックを來したが、是等の原因は兌換制度そのものが惡いためであつた。玆に於て漸く紙幣整理の聲が起り、殊に明治十四年に「松方正義」が大藏卿に就任するや、銳意此の紙幣の整理統一に着手し、翌十五年には日本銀行條例を發布し、十六年には改正國立銀行條例を發布して不換紙幣の整理を行つた。

しかも不換紙幣整理前である明治十二三年頃の景氣といつたら、それこそ凄じいものであつた。殊に今日の「株式取引所」の前身である「東京商社」の繁昌などは恐ろしい程で、投機心は國内に瀰漫するといつた有様であつた。それに當時仲買人になるには僅に一等五百圓・二等二百圓・三等百圓

の保證金があれば誰でもなれたので、少しく投機心あるものは猫も杓子も仲買人になり、定員百六十名であつた仲買人が八百名からになり、そして實際には金といふものから緣の遠かつた士族が餘程公債などを持つやうになつたので、急に山氣を出し、これを賣放つて株を買ひ、百姓は石四五圓の米が十二三圓もするといふので、俄に膨ツ玉が大きくなつて、これまた株を買ふといふ有樣で、それは大正七八年の好景氣時代と、ちつとも變るところ無かつた。

此間に事業會社の創設されるもの彩しく、『足尾銅山』が明治十四年に「古河市兵衞」によつて經營せられ、『王子製紙』『東京瓦斯』『石川島造船』『東京海上保險』『横濱正金銀行』『日本鐵道』『東京馬車』等も此間の所產であつた。そして是等會社の株券が所謂投機の對照物となつて居たこと勿論であつた。

ところが前に述べた如く「松方大藏卿」によつて不換紙幣の整理が行はれ、明治十四年には一億五千三百萬圓からあつた紙幣發行高が明治十九年には一億一千萬圓に減じ、卽ち四千二百萬圓からの回收を見たのであつた。斯く急激に紙幣が回收せらるれば、そこに金融の梗塞・物價の低落といふことは避くべからざることであり、且つ之と同時に銀行・會社の破產といふことも避くることの出

來ないことであつて、明治十二三年の好景氣時代に簇生した會社・銀行は算を亂して倒產し、有名なる彼の「オリエンタル・バンク」横濱支店の如きも此時閉店したものであつた。

三「三井銀行」の取付

紙幣整理による財界の整理も一段落を告げ、健實なる會社のみが漸く殘存するやうになつた時、外國貿易は漸次出超に轉じ、且つ金利低落のために布價證券の市價も復活して、財界は明治十九年頃に至つて蘇生の思ひをしたのであつた。そして明治十九年一月に政府紙幣が正貨に兌換せられることゝなつたので、財界は愈々景氣づき、再び財界活況時に入つて事業會社の計畫創立せられたるもの著しく增加し、明治十九年に銀行・會社の資本金一億三千九百萬圓であつたのが、二十二年には二億八千萬圓となり、三ケ年間に一億五千萬圓からの增加を示したのであつた。

斯くの如き有樣であるから、二十年から二十一二年頃の景氣が、如何なものであつたかは想像に難からざるべく、當時の銀行局長であつた後の首相「加藤高明」は此の時分の好景氣を報告して、

「紙幣交換實施以來、通貨の基礎益々安定鞏固なるに從ひ、曾て通貨の變動より受けたる商業

上の危險なく、社會の情況は漸く着實なる事業に傾向せり。此際公債の市價は飛騰して、其の極點に達し、また薄利を見る能はざるに至り、遂に鐵道其他工業會社企圖の念翕然として社會に振興せしが、利弊は常に相伴ふものにして、株券の熱度漸く加はるに隨ひ、所謂泡沫會社の此機に投じて起るもの尠からず、當時株券の景況は其の會社の何たるを問はず、翼なくして飛び脚なくして走るの氣勢にして、玉石俱に混淆し、商業資本は多く株券となり、鐵道公債の募集また資本を固定するの勢ひを添へたり」

と言つてゐる。即ち會社の何たるを問はず、苟も新會社が創立せらるれば、其株は所謂翼なくして飛び脚なくして走るの活況を呈し、五十錢拂込の兩毛鐵道株式が五十圓、即ち拂込の百倍といふ馬鹿相場をしたことによつても、當時如何に株式熱が熾んであつたかを知ることが出來るのである。

しかし斯くの如き馬鹿げた景氣が永く續くことは如何なる場合にもあり得ないことで、果して明治二十三年のパニックが襲來したのであつた。そして之は二十二年に於ける米作の不作と銀相場の騰貴とが外國貿易を逆調せしめたことが、此のパニックを誘因するの時期を早めたのであつた。それは兎も角、此のパニックのために昨日までの泡沫會社は一も二もなく消えて無くなり、惹いては

銀行の破綻續出し、「久留米銀行」の休業に次いで「鶴島第六銀行」「名古屋第四十六銀行」「八戸第百五十國立銀行」を始め、東京では「第一國立銀行」と「三井銀行」が取付に遭ひ、就中「三井銀行」の如き、今日でこそ天下第一位の銀行と自他共に許して居るが、其時ばかりは實に慘澹たる有樣であつた。

最初の株成金

一　今村清之助と井上安次郎

日本は神州だ、日本人は特別製の大和魂を持つて居る國民だと威張つて居ても、日清戰爭前までは恐らく歐米で地理學者でない限り、日本國なるものが地球上に存在して居たことは知らなかつたであらう。それがチヤン〳〵坊主の眼玉を思ふ存分に剮いてやつたばつかりに、地球上に日本といふ嗤笑好きの小ぽけな國があるといふことが、漸く國際的に知られるやうになつた譯であるが、それと同じ事情によつて、我國の經濟組織なるものが一個の形體を備へるやうになつたのは、此の日

清戰爭後からであつた。

それまでは、即ち明治維新から明治二十四五年までは、所謂我國經濟組織の創生時代であつて、其の幼稚なる點に於て今日から見れば、眞に隔世の感ありと言はなければならぬ。それは、やつと明治十五年になつて、日本銀行條令が發布せられ、十一年に『東京株式取引所』（その以前に『東京商社』なるものはあつたが）が設置された程であるから推して知らるゝ譯である。そして明治十四五年頃の政府紙幣、若くは銀行紙幣發行額の如き一億四五千圓に過ぎず、日清戰爭直前の日本銀行の兌換券發行高すら僅に一億四千百萬圓、日銀正貨準備金七千九百萬圓、東京組合銀行の預金總額は僅に三千三百萬圓、貸出金六千萬圓といふ貧弱なる經濟狀態であつた。

それで斯くの如き貧弱なる中から、たとひ成金が生れても其の程度は知るべきものであつて、明治維新から明治七年・同十年・十四年・十五年・乃至二十二三年といふやうに、パニックが起る毎に、其のパニックを誘因するだけの好景氣を齎し且つ又其間に於て大小幾多の成金を生んだのであるが、しかも經濟組織が幼稚なだけに、これといつて名ある成金といふものは現れなかつた。殊に株成金といつたやうな者に至つては、明治二十三年頃までは殆ど現れなかつたといつても善い位であつた。

成程明治十八九年頃にも株式會社は相當あるにはあつたが、『東京株式取引所』に上場せられた銘柄は僅に十九種に過ぎず、それに株式に對する思惑思想が一般に幼稚であつたから、投機といへば主として米に限られ、株式に手を出す者は尠かつた。しかし二十一年の事業熱から二十三年のパニックに遇うて始めて一般に株式なるものゝ味を解するやうになつた。それは多數の株の背負込で辛き經驗を嘗めた者と、狂熱時代の高値で賣放つて株式はボロい儲けのある放資物だといふ甘い經驗を嘗めた者との二方面があつたこと勿論である。

其の甘い經驗のお手本をつくつたのは、横濱の「今村清之助」と大阪の「井上安次郎」であつた。恐らく此の二人は我國株成金の嚆矢をなすものである。尤も其の以前に伊勢の「諸戸清六」は銀紙の思惑で巨利を博し、また「安田善次郎」「石崎政藏」の如きは公債の思惑で成金になつたのであるが、斯く株式の思惑で當てたのは、此の「今村」「井上」が最初の者である。

二　天下の糸平と金穀相場會所事件

「今村清之助」は横濱の貿易商である。ニックネームを「島清」と云ひ、彼の「天下の糸平」こと「田中平八」と共に明治初年頃の横濱の商權を或意味に於て牛耳つて居たといふことは、少くも當時の我が外國貿易を牛耳つて居たといふことになるのである。しかも彼等は貿易業者であるばかりで無く、其の當時に於て投機思惑界にも驍然、若くは陰然たる勢力をなして居た。殊に彼等が太ッ腹で且つ負けず嫌ひであつたことは、今日までも彼等を知る者の間に語り草とされて居る。

其の恰好の例として横濱の金穀相場會所事件といふのがある。それは明治五六年頃メキシコ弗を目的とした空相場が建つた。其後此の弗屋仲間で之に米穀も加へて會員組織の會社を組織することとなり、そして間もなく資本金五萬圓の「金穀相場會所」なるものが出來たのである。「島清」と「糸平」とは無論、此の會所の株主であり且つ仲買人であつた。

元來「金穀相場會所」といふのは當時は維新後間も無いことであるから、通貨として藩札の通用あり、また古金銀も依然として通用して居たのであつた。しかも一方貿易上には銀を使用しメキシコ弗を用ひて居たのであつた。是等の結果として玆に弗と古金銀と藩札との間に相互交換が行はれるのは自然の勢ひであり、且つまた此間に於て之を仲介する仲立業なるもの、存在することも當然の

こと、言はなければならぬ。そして外國貿易が盛であれば有る程メキシコ弗の必要を生じ、其の結果メキシコ弗の實買が玆に行はれる譯である。殊に當時內地米作の不作から外米の輸入があつたので、此のメキシコ弗の需要旺盛となつて來たので、玆に米と弗とを目的とする思惑實買が行はれ、そして此の「金穀相場會所」なるものが生れた譯である。

然るに玆に問題が起つたのはメキシコ弗が實買されるに隨つて、メキシコ弗に對する資格如何、及び我が古金銀の價値如何といふことを忘れることである。即ち金銀の比價に對する觀念が怪しくなり、一弗のメキシコ銀を得るために古銀壹兩に八錢乃至四十五錢の打歩をしたことである。當時金一銀十六の比價は金貨騰貴して非常な懸隔があつたのであるが、當時我が商人は經濟思想が幼稚であつた爲めに此間の事情をよく知らず、たゞメキシコ銀を得ることに熱中して居たのである。

ところで流石に抜目のないのは支那人であつて、殊に横濱居留地六十二番館在住の支那人「繆輝堂」は「香上銀行」を背景として此のメキシコ弗と我が古金銀との利鞘を覘つて我が商人の買に對して賣に廻り、しかも「香上銀行」の背景を以て賣崩すのであるから、我が商人が如何に團結し且つ奮鬪しても常に賣崩されて慘澹たる敗北をするの外は無いのであつた。しかも彼は我が敗北す